女子文壇

口繪
三宅克己 水彩画 夏の海邊
河合英忠 彩色画 綠蔭
美術寫真版數葉

第壹卷 第八號

明治三十八年八月一日發行（每月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



中村不折画
吉田晩稼題字

東京 女子文壇社 發兌
（電話本局六〇七番）

（注意）此目次を熟讀順次内容閲覽を乞ふ

第一卷 第八號 目次

女子文壇

▲勿見落＝＝投稿規定（並に新案）懸賞方法は毎號の目八頁にあり就て見よ!!

大日本國民中學會編　鏑木清方君畫

送行・弔祭
慰問・歡迎

軍國文範

洋裝全一冊
體裁高雅頗美本
定價金参拾五錢
郵税金四錢

劍を取つて戰地に赴くものあり、送つて其行を壯にせざる可からず。傷を得て歸り來るものあり、迎へて其情を慰せざる可からず。敵鋒の下に斃れたるものあり、情を盡して之を弔せざる可からず。若し夫れ戰爭の功果を收め有終の實を得て、壯夫百萬凱旋するの日には滿腔の熱血を披瀝して歡迎せざる可からず、是れ國民の責務なり、國民の至情なり、殊に**婦人の義務なり**婦人が優しき心を込めたる玉章ほど征人の情を慰むるものなしと云ふにあらずや。本書は、これ等送行、慰問、弔祭、歡迎等、軍國百般の贈答及び式禮諸文の作法を詳記して、直ちに用ゐらる可き文例百餘篇を網羅せるもの、文例の諸篇皆時に合し格にかなへ、情至り詣つくせるに於いて他類似の書と夐に選を異にせるは勿論**女子**の爲めに**各體の範例**を擧げたるは、世只此書あるのみ也。軍人の勞苦を察して慰問せんとする際、又は送行、弔祭、歡迎等の時に臨み、諸嬢は此書によりて筆を執らるれば、優麗娟秀にして情趣饒かなるの作を得るに難からざる可し。口繪は鏑木清方畫伯の筆になる、傷を負うて蹌踉たる軍人を背景とし、温顏玉の如く白姿神々しき看護婦が一莖の白百合に恍たるの狀を描く、蓋し同子苦心の作也

發行所　東京駿河臺南甲賀町十　東京國民書院

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

文士奇譚

文學士久保天随君編

口繪（府深習夜廓に上りて赤穂義士の討入を觀ふ／刻山提灯に照きて下男の貧を救ふ（不折畫伯筆、石版五色摺））

文士印譜……（二遍）刷　▲附錄……（名著序文集）

▲全一冊大判百三十頁　正價拾錢　郵税一錢

文士訓

文學士 大町桂月先生序

長谷川天溪君校閲

立野天風君編

（諸新聞雑誌の好評あり）

▲正價金二拾錢　郵税二錢　全一冊袖珍

學生の生涯

文學博士 建部遯吾君述

全一冊袖珍　正價二拾錢　郵税四錢

旅行の友

學生必讀

全一冊美装　實價拾六錢　郵税二錢

秀才文壇

低廉無比 青年筆戰場 投稿雑誌 每號獎學賞與規定あり

文士必讀 大評判の本誌を讀めば文章の上達疑ひなし

十六號一日 十七號十五日 發行

不折先生水彩畫及寫眞版入

大判百十二頁 頗美本

價郵税共 一冊金拾壹錢 六冊六拾參錢

母と子供

慶應義塾々長鎌田榮吉君題辭

慶應義塾教授菅 緑蔭君譯

▲正價三拾錢　郵税四錢　全一冊中判美装

目次 ●總論●新誕生兒に就て●餘計なる心配は

て●第一期の教育●幼兒の育榮に無用なり●子供は愛す可きものなり●子供は奴隷にあらず又暴君にあらず●理論は餘り早く教ふ可ならず●虚言及び挨拶の効力に就て●體育に就て●衣服に就て●睡眠に就て●五官の修養に就て●觸官に就て●視官に就て●嗅學に就て●聽官に就て●音聲に就て●味官に就て●勉強の時代●好奇心に就て●實物教育に就て●學問と趣味●實驗物理學●實學に就て●「ロピンソン、クルソー」●結果ー十四五歳頃の子供

此軍艦帖は紀元節をトし東京市四谷第一、二、三尋常高等小學校を始め全國頓なる各學校にてつまらぬ菓子抔を廢し數萬部御買上の命を忝ふせり殊に紀念品としては上乘の者なり」との讚辭をさへ賜はりしは無上の光榮といふべし

◀美術寫眞銅版三色刷▶

軍艦寫眞帖

第五版

附錄大捷軍歌集

全壹冊袖珍美装價金五錢

（送料二冊にても三冊にても二錢）

勅語……上等洋紙 鮮明題 金刷

出版元 東京神田旅籠町壹丁目三十番地 文光堂 賣捌 東京堂 外全國書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



緑蔭



河合英忠筆

東京大江石印

夏の海邊



三宅克巳先生筆

三間石印

泰西名畫（村の少女）





（所在　新潟縣長岡町）

新潟縣女子師範學校卒業生並職員　（明治三十八年）



最近の米國大統領夫人と其家庭



（所在　本郷區東竹町）

東京裁縫女學校普通科卒業生並職員

（明治三十八年）



赤堀氏割烹敎室



（所在　京橋區築地明石町）

立教女學校卒業生並職員　（明治三十八年）

女子文學泰斗

第七號目次（増刷出來）

第六號目次（殘部僅少）



女子文壇



東京京橋區大鋸町十一
女子文壇社發行
（電話本局六〇七番）

毎月一回一日發行
價一冊送料共
金拾壹錢

第三號
殘部僅少

爰に廣告せる第三、六、七號の外は皆品切缺本なり

美術口繪（第七號）

水彩畫　△夕立雲（石版十色刷）　三宅克巳筆

彩色畫　△潮の散歩（同　六色刷）　山中古洞筆

寫眞版

都下有名女學校卒業生 大判寫眞三枚（日本女子大學校、共立女子職業學校、女子商業の三大學校）アルマ、タデマ夫人の繪畫眞筆

短冊 小杉文學博士、酒井伯爵夫人、大塚楠緒子筆○圖案畫○淺草觀音と仁王門○吾妻橋

美術口繪（第六號）

水彩畫　△月夜の海岸（石版九色刷）　三宅克巳筆

彩色畫　△ころもがへ（同　六色刷）　山中古洞筆

寫眞版

都下有名女學校卒業生 大判寫眞八頁（第一高等女學、三輪田、跡見、女學館、淑徳、女子美術、日本女學、青山女學の八大校○池邊義象、伊能外記兩君短冊眞筆○野口小蘋女史、都筑眞琴、熊谷直彥畫伯眞筆○宮城二重橋○日比谷公園の噴水池○新設兩國橋○泰西名畫

治庖會第四教場主幹 龜井まき子女史著

實用 家庭料理法

◎口繪極彩色貴婦人料理實習の圖 島崎柳塢君筆

菊判美本
全一册洋裝
正價參拾五錢
郵税八錢

これまで料理書の種類はいろ〳〵澤山に出版ておりますが何れも初心の方には分り兼るのが多いやうです、それと申すも悉皆料理人の爲の參考にする目的で編制ましたもの許りですから、それ故にいくら料理書を閲ましても甚麽も實地に行ことが出來ませぬその上この料理書の編輯と申ますと古でも今でも其著者が多くは庖刀の持ち方さへ知らぬものが何れも糊と鋏を持ちて、古い書より截り張細工をして編輯たのが多いからその不完全なのは當然であります、仍て料理のお稽古を爲さるゝ諸孃の爲めに本書を編輯しられたので、その目的と申しまするは先づ庖刀の持方や胡蘿蔔、牛蒡の切樣を御存知なきお方にもお分りになりますやうに龜井刀自が諸教場に諸孃にお稽古ありし實習をそのまゝ筆記致されたのであるから、其事項には寸毫の遺憾なく細微に親切に、實用となるべく又た調理易き料理品のみを撰ばれ示されたのであり升、諸孃がいかに御便益となるかを御諒知下さい、内容の綱目左の如し。

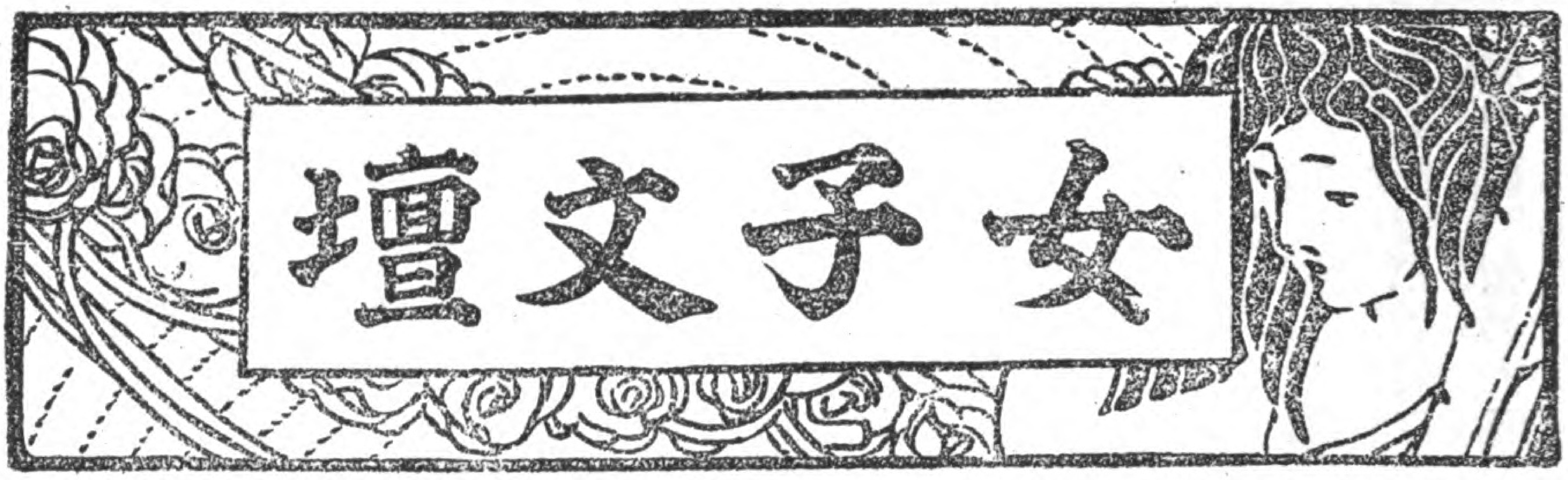
(一)料理の準備
(二)臺所の經濟
(三)調理場の構造
(四)器具取扱法
(五)魚鳥野菜の切方
(六)飲食物の撰擇法

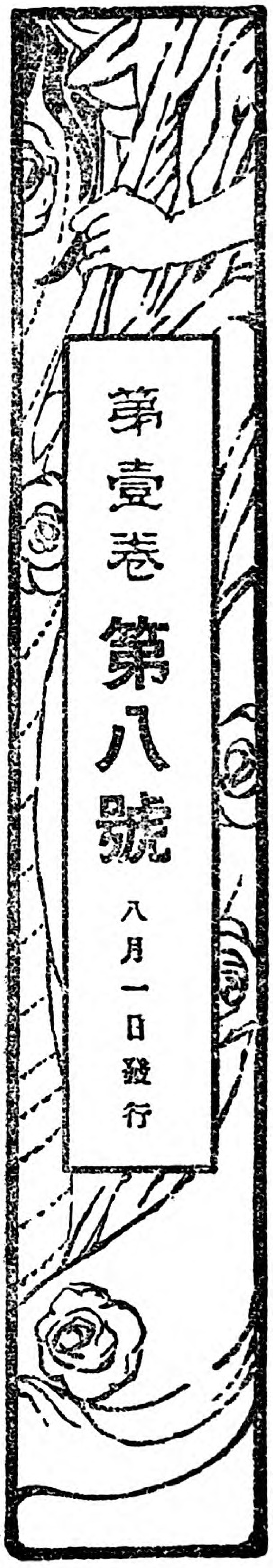
(七)材料購入に際する鑑別法
(八)主婦の注意
(九)鹽梅加減の説明
(十)料理の配合
(十一)煮出汁の製法

(十二)汁物の調理法
(十三)煮物類の調理法
(十四)燒物の調理法
(十五)浸し物の調理法
(十六)和へ物の調理法
(十七)酢の物調理法

(十八)刺身の作方
(十九)蒸し物の調理法
(二十)油揚物の調理法
(廿一)寄せ物の調理法
(廿二)きんとん類の調理法

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館





戀愛の訓練

男女兩性が相愛すると云ふ事は、一種不思議の作用から起るので、之を獸的に發作するのと、靈的に發作するの相違で、或は墮落し、或は美くしい一生を飾る事となる。さればと言つて、青春の男女に戀愛の何物たるかを全然敎へないと云ふ事は、却つて危險だ。男女七歳にして席を同ふせずなど謂ふ東洋的の道德は、太政官發行の紙幣と同じく、今日に於ては全く通用せぬ、此の如き古風の道德で鑄型に入れられた青春の女子が、一度男子に接すると、ひたすら嬌羞し、盲從し、遂には男子の爲に飜弄せられ、一生を誤るやうな事になる。嚴格な家庭に育つた所謂箱入娘が、存外墮落する塲合の多いのは、必畢男子を見分る眼識がなく、只男子でさへあれば、情慾の俘となるからで、之を矯正するには、平素から戀愛的訓練を受け、戀愛に對する詩人の感想、純潔なる戀愛を描いた物語類を繙き、男子に會つたからとて、直ぐ上氣して、前後を失ふやうな不覺は無いやうにせねばならぬ、但し放埓なる戀愛自由論には斷じて與しては不可。

名家文壇

摸範的女傑

三輪田高等女學校々長　三輪田眞佐子

世界の歷史ありて以來、既に幾千歳を經しといへども、眞に萬人の理想に適ふ如き、女傑は多くあらざるべし。即ち、一藝一能に秀でたるものあり。人の忍ぶ能はざる所を忍びたるものあり。人の難きを爲し遂げたるものあり。甚しきは、人情にあらざるものを、敢てしたるものあり。更に甚しきは、道德上の罪人となりながら、人の注目を價する、行動をしたるものあり。或は、自ら何等の効績なくも、良人の位置に由りて、雷名を歷史に、留めたるものあり。或は、時運に投じ、幸福なる生涯を送りたるものあり。玆に於て、天道是か非かの歎なき能はざるべし。

勿論、一藝一能に秀でたるものも、其非凡なる點より見れば、一の女傑たるを失はず。例之は、千代女の文學上に名を得、淸少納言の文章家なる實力を有したることは、確かに、女傑たるを失はず。蓋し、今日の女子敎育に於ても、單に、藝能の進步せし一點より見れば、世に女傑の增加せしと言はんも、妨げなし。されど、藝能以上の標準を以て、評價せば、退步せしと、言はざるべからざるものなしとせず。

亦、怪力を有し、事業を經營せし點のみを以て、高下の評價を附せんか、所謂、女傑なきにあらず、例之ば支那の韋氏、武氏の如く、陰謀を企て、社稷を危くせしもの、並に埃及のクレヲパトラの如く、容色を以て國家を覆したる者も、亦、女傑と數へざるべからざるに至るべし。今度とても、天下に名聲の傳へらるゝを以て、女傑と否との標準にせんか、社會の道心は、日に月に衰ふるならん。

尙、封建時代の節婦烈女には、良人の戰死を聞きて、

忽ち、自然の黒髪を斷ち、身を僧菴に潛めたるものあり。甚しきは、腹を劊き、咽を刺し、命を落したるもの少からず、これ薄志弱行なる婦人の夢想だに及ばざるものあらん。されど、今日、出征者の妻に向ひ、これを希望せば、果して如何。おのれは、今日の婦人に、これを責むるは、難しと信ずるも、其志のみは、古の女傑を尊び、これに同情を表せざるを得ず。偶、世には、徒らに、生前偕老を口にしながら、戰袍の血跟、未だ燥かざるに、心ひそかに、婚を議せんとするものあるを聞き、感慨の情、禁ずる能はざるものあり。
更に、婦人の天職なる、慈善事業にありても、和氣廣蟲の如く、自ら、天下の孤兒を救はんとするものあり。亦、ナイチンゲールの如く、博愛の情、迸りて、戰爭に倒れたるものを助けたるものもあり。これ皆、女傑の行動にあらざるはなし。思ふに婦人の事業も、一般社會的にあらざれば、不可なりと言はんか、所謂、閨門を出でざる良妻賢女は、如何ばかり群に擢でんも、女傑の名を得ること能はざるべし。

繙りて史を見るに、一時の僥倖を得たる女傑少からず、聞くが如くんば、ナポレオン一世の夫人、ジヨセフインは、平凡なる人なりと傳ふ、而れども、良人の關係上より、無比の閨秀として、歷史上芳名を垂れけりとかや、さればにや、彼の女は、遂に良人より離婚されき。反之、彼の晏氏の御者の妻は、其の良人の劣等なる人物なるに拘はらず、後世、婦人の好模範として知らるゝにあらずや。
おのれの思考する所によれば、眞に後人の模範とするに足る女傑は、第一、操の正しきものならざるべからず。若し、過去の歷史に於て、恥つべき行爲ありとせんか、たとひ、口に、金科玉條の言を唱へ、心は東西の學理に明かならんも、露ばかりだに、尊敬するに足らず。
第二に、赤誠を以て、貫通せんことを要す。抑も、人は如何なる運命に逢はんも、如何なる位地に居らんも、其の言行、常に、赤誠より發するにあらざれば、恰も、傀儡と相異なることなし。況んや、僞善の罪深きは、

眞惡の罪の深きよりも、一層、甚しきものあり。されば、家庭にありても、赤誠を要し、社會にありても赤誠を要す。若し、赤心を人の腹中に置くが如き女子あらば、人は如何に評せんも、おのれは、女傑として數ふるに憚からざるべし、

第三は、常識の婦人にあらざれば、女傑にあらず。如何となれば、妻となりて秀で、母となりても勝り、老人もこれに慰められ、幼者もこれに導かるゝにあらざれば、眞の女傑にあらず。變調の人を以て、女傑とするは、社會の女風を害すること少からざるべし。女子教育の主意も、必竟、常識の養成に外ならず。

今日の社會は、秩序的となりき。故に、亂世の哲婦、若しくは、逆境の烈婦たらんを理想とせんよりも、平和時代の善良なる婦人こそ、願はしけれ。即ち、家庭の女傑となり、實行の女傑となりて、生涯を送らんことを期すべし、徒に、虚榮心を滿足せんとするは、女子の能事にはあらざるぞかし。

蓋し、人は全智全能にあらされ、如何なる女傑とて、多少の缺點なきにあらず。されば、古今の史を見て、意中の師表を求めんとならば、甲より一善を採り、乙より一長を拔くを以て、滿足すべし。これ我身を進步せしむる最良の道なり。（完）

選評餘談（二）

文學士　鹽井雨江　談話
門生　筆記

第四　再び思想と詞藻との修辭法に就きて

是れを修養するに就いては、前回に。（一）熱心でなければならぬ。（二）廣く觀察するがよい。（三）多く讀書する必要がある。との三ヶ條を擧げたのである。尚ほ左の二ヶ條をもらしたから、ここに追加して置く。それは。（四）多く試作せねばならない。（五）深く自ら工夫せねばならないといふ事である。

此の試作と工夫とを欠いては、幾多の想詞法を學んでも、遂に一篇の美妙なる文を作る事は出來ない。熱

心に多く觀察し讀書して、我が詞嚢中の想詞法を豊富にするに伴つて、是非に常に自から試作すると工夫する事とを怠つてはならない。しかせざれば、美妙なる文を作る事が出來ない許りでなく、遂には志した文の山路も、中途にして思ひとまつてしまふ樣になるのである、幾多の古來の金玉の文を見、幾多の名家の美妙なる修辭に接しても、只自分の眼ばかり肥えて、我が手は之れに伴つて行く力がない。

されば、自分で文を作るに當つて、我が肥えた眼は、大層自分の力のないのを卑んで、自分に滿足を與へないて、遂に空しく失望落膽して、「文何者ぞ、作るに足らず」などゝ、意氣地なき慨嘆の聲を發して、これを棄てゝしまふやうになるのである。これ畢竟、觀察讀書に伴うて、試作工夫の苦勞をつまない結果である。また、試作工夫の苦心は、自分をして、我が貯へ得た想詞法を運用するところの技量を養ふ許りでない。古人の想詞法以外に、又更に新らしい自家の想詞法を發明するの道である。自家の淸新なる想詞法は、多く此所に見出し得るものである。文章家は必ず自家の想詞法、自家の特色を存ぜねばならぬ。古人の眞似にとゞまり、糟粕をなむるに終つては、一かどの文章家とは言はれぬ。而して此の特色は我が練習經驗の賜物である。であるから、自ら多く試作し自ら多く工夫して、練習をかさね、經驗をつまねばならぬ。

◎文章の趣向

投書の中に、筆整ひたりとのみは評すべき文章は多いが、趣向の面白きを得たりと賛すべきは甚だ少ない。其の原因は、一言で言へば、工夫が足らないのである。而し、工夫が足らないと許り言つても、あまり漠然として居るから、左に、これに就いての二三ヶ條の注意すべき點を擧げやう。

(一) つとめて新しい問題を促へ來ねばならない。抒情にせよ、叙事にせよ、或は議論にせよ、凡べて其の文章の思想のありふれたもの、例へば、抒情文と云へば、亡き母、亡き友、叙事文と云へば、夏の夕ぐ

れ、春の夕ぐれ等を促へ來つたのでは、余程の手腕家でない以上は、どんなに詞を飾り、云ひ廻しを工夫して發表しても、つまり陳腐の平凡を、まぬがれる事は出來ない。何故なれば、文章は思想がもとであるから、思想が陳腐や平凡では、到底面白い文章とはならないのである。例へば、錦の切れに石を包み、奇麗な器具の中に腐敗した御馳走がはいつて居るのとちがひはない。毎號の投書、新しい問題を促へ來つて、趣向の面白さを得たりと言ふべきは、實に少ない。殊に議論文は甚だしい。大かた陳腐、平凡、淺薄の評をまぬがれぬものばかりである。

（二）眼の着け方を工夫せねばならない。

其の促へて來た材料の表面外部のみを見て、其の有樣を記述した許りでは、駄目である。つとめて我が感情想像を働かして、其材料の內部を深く洞察して、其の材料に存ずる美を發揮する樣にしなければならない。例へば、江村の夕ぐれの景を材料としたならば、單に江村の夕ぐれ、の景色を集めて、之れを記すばかりでは、いけないのである。其の江村の夕ぐれに、どんな美があるかと云ふ點に注目して、其の我が美術的の感情想像の眼に映ずる美を寫し出だす樣にせねばならない。然るに、初心の人は、其の點の注意が足らないて、其の材料の表面に見えるところの尋常一片の狀態を記すのであるから、平凡を、まぬがれないのである。

（三）材料を精製しなければならない。

材料を精製すると云ふ事は、我が想像と感情の力で、先づ其の材料を美しいものに仕立てゝ置くを云ふのである。語をかへて言へば、其の材料に修飾を加へるのである。更に換言すると、其の材料を限定して行くのである。例へば、春の夕ぐれを材料にせうとすると、如何なる塲合に、如何なる所の春の夕ぐれで、如何なる人の眼に映ずる情景と云ふやうに、其の春の夕ぐれに塲所塲合などの限定をして行く事である。單に春の夕ぐれと言へば、決して新らしい材料ではない、されど、かく修飾し限定する時は、どんな新しい材料にも

面白い材料にもならぬ事はない。斯くの如く、深く我が工夫を凝らして、材料の精製をしてこそ、始めて面白い趣向が得られるのである。

（四）道具を精選しなければならない。

一篇の思想は、主想を敷衍したものである。其の思想を敷衍する爲めに記す凡べての事柄を、道具と言ふのである。例へば、

猫の子は鼠とるべくなりにけり
いかに暮らし〻月日なるらむ。（香川景樹）

此の歌の主想は、我が徒らに過ぐしたる月日の感であつて、猫の子が鼠を取る樣になつたと云ふ事は、これを敷衍し構成するに用ひたる道具である。

山里の春の夕ぐれ來て見れば、
入相の鐘に花ぞ散りける。（能因法師）

此の歌の主想は、山里の春の夕ぐれの寂寥な感興であつて、入相の鐘聲と落花とは、この主想を組み立つるに用ひたる道具である。これは僅かに歌の一例を擧げたのであるが、凡べて文章の思想は、かくの如く道具を用ひて、主想を敷衍して組立てるものである。扨て、これを敷衍するに用ふる道具は、自分の表はさうとする主想に最も適切なものを、選んで用ひなければならない。例へば、春の夕ぐれを表はさうとするには、雲の形、鳥虫のなく聲風のそよぎ、小川の流れなど、種々の道具あるべけれど只其の塲合、其の塲所に見えた事柄及び景色一切を擧げたのではいけない。我が表はさうとする其の美を發表するのに必要かくべからざる最も適當したものを、選んで擧げねばならぬ。能因法師の入相の鐘聲と落花との道具立てなどは、實によく選んだものではないか。

一事物を材料として、其の一種の美を描出するには必ず其の美をあらはすに適切なるものを求めて、これに依らねばならぬ。さるに、初心の人は、この道具の精選に注意しないで、春の夕ぐれの寂寥なる美をうつさんとすれば、只寂寥さうな事を多く並べやうとする。其の美をよく表はす事の出來る一句千金の道具を精選して用ひてこそ、千金の價の文章は出來るのである、

一山百文の道具を、妄りに多く並べても、いかで千金の文を得らるゝ筈のあらうか。初心の人の文章の趣向の面白くない一原因は、たしかに此の道具の選擇に不注意なるからである。

（五）　其の目的其の場合に適應して、自然なる組立て方をせねばならぬ。

思想を組み立つるには、よく其の場合と其の目的に適應した道に出ねばならない、清少納言の枕の草紙の初段、秋は夕ぐれの條に、晩鴉の歸り行くさまを書いて「三つ四つ二つ」と數へたのは、誠に面白く、其の景に適應した手ぶりと云ふものである。二つ三つ四つと言はないで、斯く三つ四つ二つと順序をはづして數へたので、ちらほらと歸つて行く晩鴉のけしきが、目に見える樣である。これは單に其の景によく適應して、自然を得た筆づかひと言ふに過ぎないが、文章の思想を組み立つるにも、亦斯う言ふ風に、其の場合其の目的に適應して、自然でなければならぬ。初心の人は、かゝる點に注意しないで、例へば、夏季休業になつて、日ごろ待ちこがれた故郷へ歸る日の記でも、一日休暇を得て花を見た記でも、如何な場合の記でも、いつも同樣の方法を以て、思想を組み立てやうとするのである。これは慥かに面白くなくなる一原因である。日頃待ちこがれた故郷へ歸る日、心は既に其方の空へ飛びゆきて、身はもぬけのからのやうになつた折りの記に、出立前後の情景を長々と書き記して、我が心の平靜である時の記と、少しも違はない書き方をするなどは、其の場合に、其の目的に、適應した自然の道をとつたものとは言はれない。我が感情の激昂した場合には、凡べて、吾人の言語行動は、普通の狀態をはづれるものである。今故郷の戀しさに我が感情の激昂した場合には、其の記事の仕組方は、記事文の普通の軌道をはづれなければならない。それゆゑ、長々しい前置きなどは畧して、中途の情景から、突如として筆を起す方が、反つて其の場合によく應じた自然の仕組方と言ふべきである。もとより其の場合に適應した仕組方は、種々あるであらう。今それを一々言ふ事は

出來ないが、文章の思想は必ず其の塲合其の目的によく適應した自然の組立て方をせねばならない。(未完)

國文評釋

伊勢物語(一)

文學士 中内蝶二

《解題》 伊勢物語は、古歌より趣向を案出して、人の一代記やうの小説にとりなしたるものにて、竹取物語の如く、全くの架空談にあらず。巻首に『むかし男初冠して云々』と、成男の時より書き出だし、巻末に『つひにゆく道とはかねてきゝしかどきのふけふとはおもはざりしを』の臨終の歌を載せたるにて、作者の意のある所を知るべきなり。さて此書は、在原業平の作なりと云ひ、或は、伊勢の御の筆記などいへる舊説もあれど、それ辯ずるまでもなし。こは全く業平が、時勢をうとましと思ふ頃、をりにふれて詠み置ける歌、心やりに書き置かれし日記なとの、世に傳はれるを基とし、歌のはし書を敷衍潤色し、種々附會をもして、一冊子とはなしたるならむ。されば、いづれか自記の文、いづれか追記の條といふこと、今更に知るべくもあらず。たゞし其文躰は、竹取の如く、始終連續したるものにはあらず、いはゞ、歌の序文のやゝ長きを數多集めて、順序よく排列したるまでにて、全篇百二十五段、毎段おほかたは、その冒頭に『むかし男ありけり』の一句を加へたり。てにをはを除きて簡潔ならしめ、結末を截ちて遒強ならしめ、一語千語を含み、一句萬句を包みて、詩趣に滿ち、餘韻に富む。かの定家卿が、歌よまむ人は、古今和歌集に次ぎて、翫ぶべき書なり。といはれたりしも、まことに道理なりとぞ思はる。

○吾妻下りの條

むかし男ありけり。都にありわびて、あづまにゆきけ

ろに、伊勢、尾張のあはひの海づらをゆくに、浪のいと白くたつを見て、

いとゞしく過ぎにしかたの戀しきに
うらやましくもかへる浪かな

《釋義》むかし男ありけり　むかし男とは、それとなく業平のことをさしたり。業平は、阿保親王の第五子にて、天長三年、兄行平と共に在原の姓を賜ひ、世に在五中將と稱せらる。容姿閑麗にして、多恨多情の風流公子なり。文屋康秀、大伴黑主、喜撰法師、僧正遍照、小野小町と共に、六歌仙の一人にて、頗和歌に巧みなりき○ありわびて　ながらへがたく思ふこと。即ち、都に住むがいやになりてとの意○あはひ　間におなじ○あづま　畿內より東の方の國の總稱○海づら　海邊のことなり○浪の白く云々　浪白く打ち寄せてあがること○いとゞしく云々　いとゞしくとは、一層の義、かへる浪とは、打ち寄せたる浪の、また引きゆくことを云ふ。この歌の意は、さなきだに、過ぎ來し故鄉の方の戀しきところに、かく立ち歸る浪を見ては、羨ましくて、一層都の方の戀しく思はるとなり。

むかし男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京にはをらじ、住むべきところもとめむとてゆきける。しなのゝ國、あさまのたけに、けぶりのたつを見て

しなのなる淺間のたけにたつ煙
をち方びとの見やはとがめぬ

《釋義》やうなきもの　有りても益にたゝぬものとの義、業平が世をはかなみたることを云ふなり○しなのなる云々　しなのなるとは、信濃國に在るとの義、をち方びとゝは、遠方に隔たりをる人との義にて、この歌の意は、信濃國に在る淺間嶽は、高き山なれば、その山より立ちのぼる煙を、遠方の道を行く旅人の、見つけ出さぬことがあらうか、きつと見とがむとなり。此處に云ふをち方びととは、業平自身のことを云へるなるべし。

もとより、友とする人、ひとりふたりして、もろとも

にゆきけり。みち知れる人もなくて、まどひゆきけり。

《釋義》もとより　初めよりの義○友とする人云々　旅の道連れ一兩人にてとなり○みち知れる人　東國への道案内を知りたる人○まどひゆきけり　道を迷ひながら行きたりとなり。

みかはの國、やつはしといふところにいたりぬ。そこをやつ橋といふことは、水のくもてに流れわかれて、木やつわたせるによりてなむ、八橋とはいへる。その澤のほとりの木かげにおりゐて、かれいひくひけり。

《釋義》八橋　澤の水を八方へ、蜘の手の如く溝を穿ちて流し、それに八つの橋を架したるより、所の名となりたるなるべし○くもで　蜘蛛の足の八方へ出でたる如く、打ち違ひたる形をいふ○澤　地の低くなりて、水と草との交れる處をいふ○かれいひ　乾飯、即ち干したる飯のことなり。昔は、旅する人の、定まる宿もなく、或時は、野山に臥すこともあれば、旅行する時には、いづれも、乾飯を袋に入れて携へ持ちしといふ。

その澤に、かきつばた、いとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五もじを、句のかみにすゑて、旅のこゝろをよめといひければ、よめる、

から衣きつゝなれにしつましあれば
　はるばるきぬるたびをしぞおもふ

とよめりければ、みな人、かれいひの上に、涙おとして、ほとびにけり。

《釋義》かきつばた　燕子花、また杜若の文字をも用ふ。大かた菖蒲に似て、夏の初に花開く。紫、白、淡紅などありて、その色いと美し○からころも云々　からころもは、着る、着馴らすなどいふ語の枕詞、きつゝは、着つゝと、來つゝと掛け、つまは、妻と、褄とに掛け、きぬるは、來ぬると、着ぬるとに掛け、初めに唐衣と云ひたるゆゑ、すべて、衣の緣語を以て云へるなり。この歌の意は、都に馴れたる妻あるゆゑに、かく遙々と來りし旅を、かなしく思ふとなり○ほとびにけり　潤ひて脹るとなり。

ゆきゝ〳〵て、するがの國にいたりぬ。うつの山にいたりて、わがいらむとする道は、いとくらうほそきに、つたかづらはしげりて、ものこゝろほそく、すゞろなるめを見ることゝおもふに、すぎやうざあひたり。かゝる道には、いかでかおはするといふに、見れば、見し人なりけり。京にその人のもとにとて、文かきてつく、

するがなるうつの山べのうつゝにも
夢にも人のあはぬなりけり

〔釋義〕ゆきゝ〳〵て　進み行きつゝとの意○うつの山　また宇津谷峠ともいふ。有渡郡の西端に位し、古の海道筋なり○わがいらむとする道は云々　我がこれより分け入らうとする宇津の山は、甚だ暗く細き道なるが上に、蔦蔓生ひ茂りて、心細くとなり○すゞろなる目を見ること　思ひもかけぬ、つらき目を見ることかなとの意○すぎやうざ　修行者にて、野に伏し、山に伏して、佛道を修行する人なり。本文、すぎやうざの次に、にの字を略したり○かゝる道には云々　いかでかおはする迄は、修行者の言葉にて、このやうな苦しき旅の道には、何故に來たまひしぞと、業平に問ひたるなり○見し人　かねて見知れる人との義○その人のもとにとて云々　その人とは、わが戀しく思ふ人との義にて、その人の許へ送るべき文を書きて、京にかへる修行者に頼みたりとなり○するがなる云々　するがなるとは、駿河國に在るとの義、うつゝとは、夢の反對にて、眼の覺めてゐる間のこと、人とは、その戀しき人のことにて、この歌の意は、君は遠く都の方に止まりてあれば、今かく旅の道にある我れと、目前に逢ふことのできざるは道理なれど、我がことを思ひたまはゞ、せめて眠れる夢のうちになりとも、心かよひて遇ひたまふべきに、うつゝに逢へぬのみならで、夢の間にさへ、その人に逢へぬ悲しさよと、その人を恨みたるなり。駿河なるうつの山べのまでは、うつゝと云はむがための序にて、深き意あるにあらず。たゞし、我が現在通りつゝある所の名を取

りて、直ちにその歌の序に用ひたる技倆のほと、深く味ふべきなり

（未完）

《評論は次號に載すべし》

賴山陽十二媛絶句評釋（二）

福井學圃

妓王

舞衫歌扇帶二新愁一。强把二榮枯一等二水漚一。佗日嚴霜摧二萬木一。幸然野草早知レ秋。

舞衫歌扇は歌舞のときの衣物や扇にて、文を互ひにしたるなり。帶二新愁一浄海入道淸盛、一たび佛が歌を聞き舞を見けるに、見目貌世に勝れ、聲よく節も上手に、心も及ばず舞ひ澄したれば、今まで寵愛限りなかりし妓王を捨てゝ、佛に心をうつされたり、妓王名殘りもをしく悲しくて、なくなく三年が間住み馴れし所を立ちいでたり、故に帶二新愁一といふなり。榮枯は妓王が忘紀念に障子に書きつけたる『萠え出るも枯るも同じ野邊の草いづれか秋にあはではつべき』といふ歌に據れり。水漚は水の上に浮べる漚にて、此句は榮枯を極めて輕く見たるをいふ。嚴霜摧二草木一は、平氏の沒落に比す。野草知レ秋は前の歌中の意にて、妓王に比せしなり。

大意は、妓王が歌意に基づきて、妓王が早く榮枯の無常を觀じ浮世を悟りたるをいふ。妓王元と白拍子を以て浄海の寵愛を得しが、佛が來るに及びて、秋の扇とうち捨てられたれば、歌舞の衣物や扇も新らしき愁を帶びたり、されば强ひて世の中の榮枯を水の漚の輕きに比し、尼となりて嵯峨の奧なる山里に草の庵を結び、念佛三昧に耽りたり、他日嚴霜が萬木を摧き、さしもに盛んなりし平家一門も、沒落の悲運に陷ゐりしが、幸なるかな、此の野草なる妓王は早く秋のあることを知りし故、其の危難を免れしとぞ。榮枯、萬木、野草、字々顧應の妙を得たり。

佛

誰知禁澤出二蛾眉一。奪レ寵辭レ榮轉瞬時。崇石棱々似二秋鵰一。見レ機却不レ及二家姬一。

禁澤　戰國の世、魏人范睢、秦の昭襄王の爲めに登用せられて、威權雙びなかりしが、白起と隙ありて起に死を賜ひしより、王の不首尾を蒙れり、時に燕人蔡澤なる者來りて、四時の序功を成す者は去るとて、巧み

に睢に說きつけしかば、睢も其の動かす所となり、病と稱して辭職し、澤を王に薦めしに、王もまた澤の說を喜び睢に代へて丞相となせり、以て佛が一たび淨海に見へ妓王に代りて寵を得しに譬ふ。蛾眉は美人の眉をいふ。紫石稜稜は、晉書の桓溫傳に、劉談が桓溫の眼を稱して紫石稜の如しとあるに本づき、眼が紫石のかどあるが如きをいふ、稜々は威ある貌なり。秋鶻とは秋のくまたかは殊更眼光のするどきものなり、紫石稜と共に淨海が眼光のするどきに比す。

大意は、佛が寵を奪ひ榮を辭せしは誠に機敏にして、淨海の及ぶ所にあらざるをいふ。婦人中に蔡澤の如きものを出さんとは、誰も思ひよらぬに、忽にして妓王が寵を奪ひとり、また忽にして榮華を辭して草庵に入り尼となりしも、僅かにまたたくうちのことなり、彼の淨海は眼光ばかり徒にするどけれども、身は天子の外戚となり、位は人臣の極に上り、榮華を極め盡くして、機を見て處置することは、却て此の家姫の佛には及ぶ能はずして、身前已に源氏の蜂起を招き、一杯の土未だ乾かざるに、其の一門は忽ち滅亡の禍にあひたりとなり。あはれ入る日を麾きたりと言ひはやされし淨海入道も、かく論じつけられては一言もなかるべし。

文學を專修せんと思ふ女學生のために、

佐藤湖月

己が意見を文に綴り、天下の雜誌なり、はた新聞なりに發表せんとするまでには、女學校卒業後少なくも、二ヶ年の星霜を經なければ、甘く行かぬかと思はれます。それもと、學校時代に非常の拔群の女生なれば論外でありませう、けれども、並み〳〵の者にはどうしても卒業後二年間の勉强なくては、天下に發表して、人にも讀まれわれも面白味を感ずるといふまでに至らぬやうに思はれます。しかし卒業後同じく二年間勉强してもその勉强のいかんによります換言すれば、女文士となるに足るべき書物の選擇いかんによりて、その遲速の程度が生じて來るのであらうと思ひます、で女として、一通り文を書き歌を詠み、また人のものかたり多少の批評を試みる位に逹するには、どうしても左の書籍は通讀せねばならぬことが明かであらうと思ひます。勿論茲に揚げた書籍以外に讀める腦髓を有つてる方は幾等でも讀む程よからうと思ひます。が、先づ、これ丈け讀めば、大抵一方の女文士として社會に立つことが出來ませう。

但し外國語は除く、

一、源氏物語　二、枕草紙
三、萬葉集　四、古今集
五、新古今集　六、太平記
七、平家物語　九、增鏡
十、今昔物語　十一、方丈記
十二、徒然草　十三、神皐正統記

十四、折燒柴の記　十五、日本外史
十六、八犬傳　十七、論語
十八、孟子　十九、詩經
廿、唐詩選　廿一、史記列傳
廿二、左傳　廿三、唐宋八家文
廿四、文章軌範　廿五、和漢列女傳

數は僅か廿五しのありませんけれどもその冊數は澤山にある、一つでもなか〳〵一年位で讀みきれぬやうのもある、だから、それは、先輩かまたは自分の先生から讀んで價値のある處を指導して貰ふのも一策である、兎に角これ丈の本を備へて精讀すれば一方の文士となれることは明かである、これを讀むには、女學校卒業後どうしても僅に二年間は要する、下手にすると二ケ年にその半分位しか讀みきれぬかも知らん、しかしこゝにあげた書物は女學校に居る時でも大抵のは、齧りかけたのばかりで耳あたらしく眼あたらしい本がなからうと思はれます、して齧りかけたばかりても、大躰その本の文躰やらまた一躰の口調やらがよくわかつてゐるから讀むにもさまで骨が折れはしまいと思はれます、だから一心不亂に讀めば、二年間に讀み切ることが出來る、尤も中には師匠どりせねばならぬ本もあらうから、さやうのは大に習ふがよからうと思はれます、兎に角この本を二年間に讀んでその後に自分の尤も氣に入つたものをその中からより拔いて幾度ともなくよめば、そこに始めて自分の文章も出來、歌も出來て、面白味もついて來る、始めから雜誌新聞などばかり愛讀して、それで女流社會に一等地を拔くことが出來やう筈がなからうと思はれます。參考になるかならぬか、一寸筋丈けばかり申上げておきます。

新刊紹介

▲金帆（尾上柴舟氏著）　文學士尾上柴舟氏の新體詩集にして低唱、波上、湖畔外數十篇を收む、創作もあり、譯詩もあり、格調流麗渾然として一家の風あり、柴舟氏は短歌を以て名あれども亦新體詩に於ても特技を有す殊に女流作詩の模範として疵瑕なき點は「金帆」を最とす（定價四拾錢駒込東片町四十六本郷書院）

▲塔影（河井醉茗氏著）　カスリ入のクロースに長原止水氏が塔の尖の五輪を印譜にくづせるものを紫インキにて目さむるばかりに刷出したる表紙、女學生式とや言はむ、三宅氏の塔の畫は淸水か八阪か、幽韻人をなづかしむ、作者の詩は一般に評判よしと云ふ（定價四十五錢神田今川町二金尾文淵堂）

▲靑海波（河井醉茗氏編）　横瀨夜雨、伊良子淸白、溝口白羊、窪田うつぼ、北原白秋、原田ゆづる以下凡て五十八名、現代靑年詩人の傑作を蒐集したる新體詩集、所謂「文庫」派の粋なり一種の袖珍本、口繪も詩趣あり（定價五十錢四片町內外出版協會發兌）

▲新古文林（第三號）　名の如く新しき文學と古き文學を林の如く並べたる重寶なる文藝雜誌なり紙數三百五十頁（定價十八錢京橋區五郎兵衞町近事畫報社）

▲みづ繪（大下藤次郎主筆）　近時繪畫雜誌の頻出するに當り本誌の如きは最も藝術的に忠實なるものにて水彩畫に志ある者は座右を離すべからず一般鑑賞の人にも愛好さるべき美術雜誌なり（定價十八錢小石川關口駒井町三春島會）

▲家政講義（第一號）　講義は衣食住、育兒、看護、裁縫、割烹、家事經濟、家庭衞生、家庭管理、禮法、詠歌法、作文法等にて外に家庭、叢報、科外講話等あり會費二十錢束修二十錢（本所區相生町五ノ八大日本家政學會）

▲明治才媛新體詩（第一集）　女子之友投書家の新體詩を集め批評を加へたる小册子なり（二十五錢市谷田町文友社）

▲スケッチ繪はがき（第二輯）　三宅氏の「山家」中澤氏の「車窓」ウイツスラー氏の「婦人」の三葉一組、色刷美くし（十五錢本郷元町一ノ十六スケッチ會）



家庭

▲新聞を讀む心得

小紘生

○新聞を讀む時間　學課の時間が一定してある如く新聞を讀む時間も一定すると宜い、男子なれば職務上、新聞は朝早く讀む必要があり、朝餐前に眼を通すことを忘れてはならない人もあらうが、男女の學生、殊に女學生時代に於ては、必ずしも朝起ると直ぐ新聞を見る必要はなからうと思ふ。其爲に朝早く爲すべき仕事例へば厨の業とか、室の掃除とか、庭の手入とか、運動とか、云ふやうな仕事を怠るやうになつては不可い。言ふ迄もなく新聞は社會の活動を描すものであつて、修養時代、青年時代の人には一刻を爭つて讀む必要を認めない。それで新聞は先づ朝の仕事を整然と片附けてから見るか、新聞縱覽所の設置ある學校ならば、休憩の時間に見るか、それとも晩餐後、意の悠然した時に見るのが一番善い。女學生の間は朝、見ることは先づ禁物とする方が爲になるので、新聞を遲く見る爲に勉強に差支えると云ふ事は決して無い。それに多くの若い男女は、朝餐の箸を放つや否や新聞を擴げて見る、一つ讀む、面白い、二つ讀む、面白い、遂には全紙悉く讀むと云ふ工合に、不知不識、貴重の時間を消費して了ふ。且又、朝の間の比較的精神の澄み渡つた時に新聞を讀むと、刺戟される力が強く、現實的になつて、學問の事などが自然荒むやうな習慣になる。此習慣と云ふものは恐ろしいもので、毎朝、新聞を見る習慣を附けると屹度見ないと氣が濟まぬ、初めから何うしても見ないと云ふ習慣を附けたら、決して見ないから不都合を生ずると云ふやうな場合は無い。

○早く讀む癖　教科書とか參考書とか、凡て修養の爲に讀む書籍又は雜誌類と違ひ、新聞は只事實を知れば足りるので文章の上手下手や、書振などに深く注意を拂ふに及ばぬ。依つて新聞は成丈け早く讀む癖を附けねばならぬ、所謂三行並び下る讀方は、新聞に適用して不可はないので、事實の要點さへ合點が行けば、後は反古とするを惜まないが可い。

○續き物に溺るゝ勿れ　新聞を讀む者の最も陷り易い弊は、續き物に溺るゝ事で、殊に婦女子に多い。面白い續き物の爲に、寢食を忘れて耽讀する人もあるが、

甚だ善くない、新聞の方では賣物であるから、明日は、明日はて讀者を釣るやうに書くのは當然で、夫に釣られて夢中になる讀者は實に愚と云はねばならぬ。讀むべきものは、續き物より却つて、其日々々の出來事に多い、續き物の如きは、一週間先にならうが、二週間先にならうが少しも關はぬ、當節では評判のある續き物は終つてから、必ず一冊の書籍に纏つて、世に出るから、其時讀んでも亦敢て遲くはない。然るに從來婦女子が新聞を讀むに、大騷ぎするのは大抵續き物にあるので、一種なら未だしも、三種も四種も續き物の爲に、新聞に時間を割く事がある、志ある者は宜しく此弊を矯めて、新聞を讀むのにも、續き物は一番後へ廻す位にはしたい。



○多方面に見よ　新聞を讀むに一部に拘泥するのは不利益、右に云ふ續き者の愛讀者の如きは必ず續き者許り讀む、外の記事は顧みない、其他女に多いのは三面許り讀む人や、芝居の噂許り讀む人などで、是等は孰れも新聞を見ながら、新聞の德に浴し得ないのだ。勿論自分の志す事業の上から、專門的に注意を拂つて讀むのは、至極宜い事で、例へば敎育事業に志す人が、敎育界の摸樣が出て居ると見免さぬやうにするとか、文藝の嗜みある人が、詩歌其他の創作又は評論等を大切に讀むとか云ふのは、之は決して差支えない。只普通に新聞を見ると云ふ場合、一方に偏してはならぬ、殊に三面ばかりを忠實に見て、二面一面を忽かにしたり、論說は遂に讀まなかつたり、電報欄は見ぬ事と極て置いたりするのは、新聞知識の薄い人と言はねばならぬ。新聞は悉く眼を通して、而して重要な記事は落さないやうにする習慣が欲しい、三面のくだらぬ艶種や雜誌的の娛樂記事に許り心を注いで、二面の

電報にある世界の大勢に疎いなどは、少くとも教育を受けつゝある女子には似合はしからぬ、新聞は娯樂の爲ばかりに見るのでなく、社會的知識を養ふ教育の爲にも見ると云ふ事を、始終念頭に置いて貰ひたい。

○新聞の信用　悉く書を信ずれば書なきに如かず、悉く新聞を信用すれば新聞なきに如かずで、若い人が新聞を悉く信用するのは甚だ危險である。我國新聞事業の起りてより既に三四十年、其間長足の進歩はしたに違ひないが、猶ほ通信機關の不備、新聞社の基礎の薄弱、記者の不信用等は、あらゆる新聞をして信用すべき地位に進めない、追々發達進歩して行くに相違なからうが、現下の處で、新聞を信用し過ぎると飛んだ間違が起る、自分に多少の見識があれば、新聞記事の正否位は分る筈であるが、識見の狹い者は稍ともすると新聞を信用しすぎる氣味がある。無論全然信用しないのは、之れまた不都合で、言ふ迄もなく新聞は社會の指導者でもあり、活きた社會の縮圖であるから、之れを善く讀めば、何れ位ゐ博い知識を得られるか知れぬ。



○新聞の撰擇　地方に居る人も中央都府の新聞は一へは見なければならず、地方から東京に來て居る人も、成る可く故郷の新聞を見るが宜い。只、東京の新聞數は二十種近くあるから鳥渡撰擇に迷ふ。それから各新聞とも長所と短所とあるから、夫を能く辨へて讀んだら、新聞に誤らるゝ事も少く、利益を得る事も多からう。今此處に一つ〳〵新聞の名を擧げて、長短を示したいと思ふが、少し考があるから何れ機會を待つて示す事とする、只各新聞の長所と短所とを能く人にも聽き、自らも吟味する事の必要なる由を一言して置く。

○新聞の切拔　新聞切拔帖を一冊手許に置くと、他日大變に助けを爲す事がある、當時は別に大した記事でなくても、後日になると鳥渡見たいと云ふやうな事が往々起る其爲に切拔帖を一冊用意して置いて、此記事は後日になつて必要がありさうだと思へば、貼附して置く、當座の面倒は、後日になつて數倍の面倒を除く事になる、之は其人に依り、切拔の部分も違ふだらうけれど、決して無用の事ではない。

以上、新聞を讀むに就いて、心得となりさうな事を、思ひ當るに任せて、述べ續けたが、之は眞の概略で、詳しく言へば、未だ〳〵心得となるべき事項は、澤山に在らうと思ふが餘り長くなるから、玆に筆を擱く。只世間で新聞を讀む心得に就いて、餘り言つた人が無いから、之でも多少の參考となれば、私は何よりの幸榮とする。



▲家庭笑話

小式部

作り話てはありません、實際に見聞したこと!
笑ひ草となり、また數へ草ともなる滑稽な話!

一 かんちがひ

須田町から、品川行の電車に乗つた若い婦人は、一人の老人が、あわてゝ腰掛を離れて、席を讓らうとするを見るより、

婦人「あなた、そのまゝに」

老人「ナニ、私は……」

婦人「イエ、どうぞ、その儘に」

婦人は、やさしく介抱して、老人を舊の座に復せしむるのであッた。

鍛冶町近くなッた時、老人は、またも立ちかゝるを

婦人『後生てすから、どうぞ其まゝに』

婦人の優しい、纎い手は、やはらかに肩をおさへて動かさない。

今川橋に近くなつた時、老人は、またも立ちかゝるを、

婦人「どうか、おかまひなさらないで……あなたは、御老人てゐらつしやるのですから」

老人「デモ、私は……」

婦人「イエ、イエ、どうぞ其まゝに。私は立つてゝも大丈夫ですから」

肩のところに、手がかゝつてゐるから、立たうにも立たれぬ。

そのうちに、電車は、日本橋まで來た。今度こそはと、老人は立ちかゝる。婦人は、かさねて、

婦人「まつたく、あなた、御心配なさらなくとも、いゝんですよ」

老人「そ、そ、その御親切は難有いが」と恨めしさうに、婦人の顔を眺めて、『須田町で降りなければならないところを、到頭、五つも乗り越しましたよ、はッはッ、は、ゝ、ゝ」と苦笑ひ。

婦人、も氣の毒さうに、

『オヤ！オヤ!!まア!!!

二　滊車の初旅

田舎の婆さん、はじめて、東京行きの滊車に乗つた。

珍らしさうに、キヨト〳〵と箱の内外を眺めまはしてゐたが、不圖、頭の上に引いてある、警報機の紐に眼をつけて、

婆「オヤ、この紐、何するだアね」と頓與な聲を出した。

隣の席に腰を掛けてゐた、生意氣な風な小僧、物識り顔に、

小僧「婆さん、そりやア、食堂列車に續いてゐるんだよ。何か食べたくなつた時に、それを引けば、いゝんだとさ」

婆さんは、いたく感心したといふ態で、しばらく見入ッてゐたが、やがて、空腹を覺えたので、あり合ふ蝙蝠傘の柄を引つかけて、きつく其紐を牽いた。

號鐘は鳴る、汽笛は鳴る、列車は、遽に進行を止める。如何なる變事が出來したのかと、旅客は、しきりに罵り騒いで大混雜。

婆さんは、平氣なもんだ。

車掌は、あはたゞしげに駆けまはつて、

車掌「どなたですか、紐を、お引きなすッたのは」

婆「わしだアよ」

婆さんは、落ちつきすましてゐる。

車掌「やア、どうしました？」と急き立つ。

婆さんは、せかず、騒がず、

「わし、辨當と、お茶を、一つ貰ひますべいかのう」



論文

日本女子大學教授　鹽井文學士選

地

○ばらとしきみ

東京小石川區大塚坂下町　星　久子

わが五歳の暮れの事なりき、父君の三年忌にとて、親戚の人、村の人など數多集ひて墓參しける折り、垣間にいと美しの花の咲きゐたれば、これを父君のみ前に供せんとて、手折りてよと母君に云ひしを『折るまじ』と止め玉ひぬ。歸りて何故と聞けば、花は奇麗なれども、棘あれば、佛には供せぬものぞと諭し玉ひぬ。これやがて、ばらの花なりき、この語、今に至りて忘れられず、

その後、佛のかみ前に供へられしを見るに、殆んど葉ばかりなるが、處々に小さき白き花の匂ふなりけり。何ぞと問へば、しきみなりと告げ玉ひぬ、

あはれ母君！ばらの美しさをもても佛の前に供せられず、かゝる小さき花もて佛の前に供せらるゝはいかにと問へば、佛は誠を愛し玉へばなり、と語り玉ひぬ。

あはれ、世の人の、表面のみいたく飾りたてゝ、人の眼を眩し、腹の中に毒もて知らぬ顔なるが、世を欺き人をたぶらかさんも、いかで佛と神とを欺き得ん。表にいと質素なる粧ひしたるも、心の中に錦を包める清き乙女子は、よしや世の人に誤られんも、神と佛は見おとし給ふべくもあらず、幸は自づと與へられんのみ。誠に今の世の人は、ばらにも似たるかや。御身等いかに他物をかりて身を繕はんも、そはお身が物にあらざるを知らずや。作りし物は、破るゝの時なきを得ず、おん身等が神の前佛の前に行き玉ふ時、おん身は裸躰ならざる可からず。外觀の美、何等一文の價なきものなり。この時、おん身等が信頼すべきは『誠』のみ。誠これやがて神なり佛なり。願はくは、ばらとなりて世人に愛せられんよりは、寧ろしきみとなりて神に愛せられたきものなり、人は死すべきも、神は遂に死すべき時なければなり。

（兩評）論文として整へり。敍事を以て起し來たれるもおもしろし。地とす。

人

○我が日記に對する感

西備　紫明子

胸に感慨極まる時、我が熱涙は凝つて、此の編となりし。心静かにひらく時、再び我が熱涙は溢れて、此編を沾す。見よ、我に於ける一年間の事々物々は、殆ど漏さず記して此の編にあるを、あゝ思へば、已往悔なき事幾許かある。ページ毎に、不快の文字を以て満たされたるにあらずや、我は豫期せざりし、かくの如き歴史を、我が身につくらむとは。

世は塵を以て滿ち、雅を以て成る。我れは寧ろかゝる世を天涯遙に脱せんと願ふ。思へ、過去幾年。世俗動搖の波濤は、ひまなく襲ひ來り、時に故山の月に泣き、時に學路の憂苦に沈み、時に魔軍の襲擊に遇ひ、遂に爛熳たりし清淨の心は、まどはされて、蹉跎！逡巡!!修養日にうすらぎ、精神月に耗す。何を以て之を補ふべき、俗界遂にたのむに足らず。

我れ、孱弱の一女子を以て、而も齢未だ壯ならざるの身、早くも遠大の希望を懷きて、一度美はしき前途の星光を仰ぎしが、風雲終につれなくては、活ける眼も光なく、果敢なくも星影を雲間に奪はれ、心ならずして濁流の波瀾にたゞよひ、なまじいに志を屈して世に從ひ、以て心身の安きを得んかなと、幾度か思ひ返したりけん。然れども、一度もえし希望の光は、猶消えはてずして、時には望む燦爛たる雲間の星影。願くは、我生を終るまで、此の光は輝く事を。我もルソーの述懷を知らざるにあらねど、奈何せん、切なる志は絕つによしなきを、たゞ誓はしめよ、我は心の光明を以て、あらゆる前途の障碍を排せん

（兩評）文に氣あるを愛す。人とす。

秀逸

○余が愛の種子

靜岡　たか子

あゝ美しき余が愛や、行ひやすくして、而も大なるものなり。美麗なること、それ櫻花の爛漫たるが如く、崇高なること、それ秋月の大空にすめるが如し。さらば、此の大なる愛とはそも如何なるものぞ。他なし、愛國の念これなり、愛國の念これなり。あはれ。世に愛と名づくるもの多かめれど、この愛ほど美しきはあらじ、尊きはあらじ。一つの愛國心は、清歷をし

て、皇統を永遠に無缺ならしめしにあらずや。一つの愛國心は、時宗をして數千の艨艟を、龍宮へ有に歸せめしにあらずや。されど、此の美しき愛國の花も、決して偶然に開くものにあらず必ず種子あり。而て、余が愛の種子は之れを師より得たりといはん師より得たる愛校の念と云はん。

あゝ余が小學八年の年月よ、此の間に限りなき愛校の念を養はれぬ。余は小心翼々として校の名を穢さざらん事を思ひぬ。更に二年の學び屋に於ていよゝ此念を固くせられ、遂には愛鄕の念となり、ついで、至大なる愛國の念となりぬ。國名を穢さざらんとする至高なる愛國の念となりぬ。……あゝ實に美しき余が愛の種子、愛校の念よ、此の種子なくて、いかで、開かん、愛國の花を。おゝ美麗なる崇高なる愛國の種子、愛校の念。

（雨評）論旨は美なれど筆の少しく亂れたるふしあるをおしむ。



最近東京女學生風俗（其十三）

○夏の自然

尾張國　犬飼平子

おゝ、夏は來たれり。吾は誠に夏の自然を愛す。夕べ、そゞろ歩きに蛙の鳴くを聞かずや。其の聲は美人の彈琴も及ばざらん。雨後、綠涼しき木蔭にやすらひて、美音を弄する蟬を聞かずや。其の音は、天上の仙樂にも優るを覺えん。あゝ、愛すべき自然に富める夏は來たれるよ。

萬物を生長さすべく、心氣を養はすべく、自然に富める夏は來たりぬ。梅桃さては批把に至るまで、此の夏に向ひて、多大の感謝を述べよ。汝等は之れによりて美果を結ぶにあらずや。おゝ、汝等のみならず、われ等も亦、之によりて大に心氣を養へば、大に感謝を述ぶるなり。

若しそれ、涼風靜なる夕べ、海濱に立たんか。數艘の魚舟の白帆、まろくこなたに漕ぎ來るを見ん。その廣濶なる海面の、如何に心氣を爽快ならしむることよ。あらかわの土さへさけんばかりの暑さ堪へ難き時に、一しきり夕立雨の來る、如何に吾等の精神を淸凉ならしむることよ。

吾は誠に夏の自然を愛す、夏の自然こそ、最も雄壯に最も趣味あるものなればなり。

（雨評）筆としては整ひたれど、前段に說き來たれる自然の景、精巧を欠きたり。

○ネルソンの傳を讀む

泉州橫山の里　天堀美浪子

われは、古英雄の傳を讀む毎に、常に思へり。其の能く大業をなし偉功を遂げて、常人の意表にいづるものは、全く、其の自己の天命を知るが故なるべしと。何となれば、能く其の天命を信ずれば、能く其の死生を一にすることを得ればなり。能く死生を一にすれば、何事をか恐れ、何物にか驚かん。其の心は、鐵よりも堅くして、矢石も破る可らず、刀刃も割く可らず。其の膽は宇宙を呑むを以て、萬口の譏もそを動かすに足らず、百たび其の失敗もそを碎くこと能はず。其の心、其の膽は、已に斯の如くなるを以て、其の身躰亦隨ひて剛健にして、當る可らず。さてこそ、古今に稀なる偉功も、尋常人の思ひ圖り得ざる大事も、成し遂げらるゝならめ今ネルソン傳を見るに、其の身は生れ得て羸弱にして、常人にだも及ばざるに、その幼き時には、他生徒の敢てせざりし校庭の柿樹に登り、壯夫も難しとする命を賭して洋上の軍艦に投じ、はた、北極無限の荒地、白水皚々たる寒地に於て、白熊としも鬪ひつ、長じては、英國艦隊を率ゐて屢敵艦を破り、殊に「トラフハルガー」の海戰に於ては、勇往奮進して、彈丸雨と降る艦頭に立ちて、奮ひ擊ちたる其勇氣。敵丸に貫かれて、氣息奄々たるに及びても、驚きもせず、あわてもせず、只管我軍の大捷を喜びつゝ、我れは我が英國の爲めに我が義務を終へぬ、との聲と共に、やすらかに絕命せし其の心は、そも何處よりか得來りけん。曾て其の「トラフアルガー」の戰に臨むや、かねて胸のあたり眩ゆきまで飾られつる、勳章の、敵の目標となりて危からむと、諫むるものありしに、ネルソンは從容として答て曰く、命は天にあり、天我れを助けんには、百の勳章を胸にすとも、死せじ。天我れを助けざらんには、一つの勳章を掛けずとも、斃れなん、とて、顧みだにせざりきとかや。こゝに知る、ネルソンの、かく剛勇無雙なりしも、全くその天命に安ずるにありしことを。されば、人能く天命に安ずるを得てこそ、偉功大業も成すべく、英雄も亦希ふことを得べきなれ。若し、大丈夫、斯る國家大事ある日に逢ひて、徒に餘生を僥倖して、忠に、義に、天命を終ふること能はずば、

實に口惜しき次第ならずや。日露の戰正に酣なる頃、寒燈を挑げて、ネルソンの傳を讀みて、深く感ずるとあれば、記しつ。時に四隣寂として聲なく、明月天にかゝりて、照さぬ隈もなし。

（雨評）論旨はきこえたれど、筆は未だし。

○櫻花

徳島市富田伊賀町　住友とき子

雄々しき、武士の、光り輝く甲冑を着せる如く、華々しき櫻花よ。慈愛ふかき父母の膝下に戯れ遊ぶ小兒の如く、天眞爛漫たる櫻花よ。面影たとへ方なき美人にも似たる艶麗なる櫻の花よ。おゝ汝は、我が國の美秀をあつめて、咲くものには、あらざるか。紅に明くる春の朝、萬條の朱を拖く朝暉に煥發しては、花の錦に大和心を織り出し。景色も淡きその夕、朧の月に匂ひては、輕霧混々たる戰塲の如く、遠山寺の鐘の響とともに片々散りては、大砲の煙に卷かれ、潔く……雄々しく……勇ましく……華々しく……戰死する益良夫には似たり。長閑なる春の日も、櫻ありて、其の美をまし、我が國人の心も、櫻花ありてこそ、其の芳ばしさは現はるれ。あゝ、めでたい哉、尊い哉、櫻花!!!あゝ、その姿の美しきは、天下の花、これに優るはなく、そのゆゝしく華々しきは、六合またこれに勝るは、あらざるべし。あゝ、櫻花!!!げに、そは大和心!!!



最近東京女學生風俗（其十四）

（雨評）筆に一種變はりたる趣きはあれど、想はありふれたりと申すべし。

○讀書の快樂

岐阜縣安八郡牧村大字馬瀨　木村貞子

霞棚引く春の朝、花に鳴く百千鳥の聲を聞き、秋の夕照る月影の隈なきさまなど、心のどかに見たらむには、誰れか樂しからざらむ。しかはあれど、空蟬の世に、

讀書ばかり快く樂しきはあらじかし。足はありかねども、いまだ人の見知らぬ山をよぢ、海を渡りて、奇しき氣色を眺め、或は、外つ國人の風俗を知り、人情をもさとり得て、さながら其の地をふみたらむおもひをなし、おのれはた賤しき身ながら、貴きいにしへ人と、膝ならべて語り合ひ、あるは、忠臣傑士に孝子貞婦に面のあたり見え、其の履歴を聞きて、おのづから勵まされ、或は、至り深き物しりたちの物語を聞き、聞きてなほわかぬふしあらば、憚りなく問ひかへし得べく、問ひ〳〵てやう〳〵に心得たる其の樂しさ、何にかたとへつべきや。古人の螢をあつめ雪をつみて。燈火にかへしなどおもひおこされて、いと床し。わけて、軒の松風聲をさめ、草むらにすだく虫の音の、いとおもしろき秋の夜頃、文机のちり打ち拂ひ、孤燈火の下にて、くさ〳〵の文ども繙くこそ、樂しきもの丶極みなれ。あな快き讀書よ、あな樂しき讀書よ。

（雨評）文は整ひたりと申すべきのみ。

○獨言を諸孃に聞ゆ

出雲國松江市石橋　白すみれ

「あ丶くやしい、何故自分は男に生れてこなかつたらう。親が怨めしい。今度生れ變つて來たなら、どうして女なんかに。女に生れる樣なら、米國か佛蘭西かへ。あ丶くやしい」と、襦袢の袖噛みしめ給ふ姫君達よ。ネルソン將軍も地下て、くやし涙を出して驚嘆したといふ日本海の海戰に、人力以上の戰功を立てた日本人、忠君愛國の情溢れたその兵士は、誰れか生んだらう。よもや男子の腹から出た者はあるまい。奉天の會戰に、ナポレオンの死靈を寒からしめた忠勇高潔無比の大和魂は、抑々誰が育てたのであらう。實に婦人一種の潜力といふものは、たいしたもので、到底筆紙に盡し難してある。あ丶、私共の面目も高いではありませぬか。それや、社會は未だ女子を輕んじて居ます。隨分壓制な事もいたします。しかし是れからの私共の行ひて、左樣な境遇を脱する事は、强ち難い事ではなからうと信じます。從來の婦人は、或一方に於て、いや、云ひますまい。只私共の心一つです。頼もしいではありませぬか。殊にこれまで非常な壓力で以て、抑へられて居つた結果として、權利の方面に於て、活動の方面に於て、其の反動力は非常なものだらうと思ひます。しかし、徒に小說本の上に、くだらない涙をこぼして、戀愛を叫んだり、縮緬の大振袖を風に飜し、化物の樣に白い物を顔に塗つたり、バイオリンを肩に貴重なる一日を費したり、海老茶の袴は只形式のみぞ、理科數學の本は空しく本箱の奥の御護の樣な事ては、やつぱり例のくやし涙の乾く時はありませぬぞ。折りしも、高い自轉車の鈴の音、頭廻らせば、長いリボンを、風に飜しながら、意氣昂然たる海老茶の君。あ丶。

（雨評）此の獨言、諸孃は一度耳を傾くるの必要あり。

○花下の感

本郷　[illegible]澤貞子

上野の櫻、向島の花、さぞ人波に打たれて、片片と波間に漂うて居る事であらう己れも一ッ波の仲間に入り、數日の憂欝を散さんものと思ひ、飄然向島に足を向けぬ。吹くの〳〵、空氣の流通が實に烈しい。金融が此の樣であつたなら、我邦の經濟界も少しは愉快であらふになど〻思うて居る中、いつしか足は吾妻橋を踏んだ。見渡せば、一面の暗雲は、實に拙なきわが筆には、とても盡くされぬ姿して、我れ等を迎へて居る。行く人、歸へる者、制止する巡査さま、雜沓雜沓。堤の下では、大學のボートレース。ヤー赤ヤー白、全く別天地の光景である。此の光景の中、吹き來る風、舞ひ立つ塵埃に迫られながら、面白い社會觀を爲し、ヤ、一時間半も逍遙して、寓に歸へたのが、既に五時頃であつた。嗚呼、咲けば忽ち散る櫻花、人が何のかのと大騷ぎする、蓋し此の爲めであらう。若し之が長く美を見せて居るものならば、決して斯樣に稱賛せられぬに相違ない。花を見せぬ蕾の中に散り失せしならば、人は果して何んと觀察するであらう。若し花の美しきな知り居る者あらば、咲いて美を見せて散り失せしよりも、一層の同情を拂うてあらう。けれども、其の美を知らざる者は、何等の感をも生ぜざるべし。事をなさんとして居る所謂有爲の士にして、若し事業の中途に死せしならば、社會の多くは悲みを以て送るならんも、若し其の人の事業が未だ全くに知られなんだ時に不幸に遭遇せば、社會は決して何等の感をも拂はざるべし。今の社會、此の待遇を受けつ〻地下に恨を吞みし者、將してなきか。

○誤れるかな虚榮心

山口縣　寺内あまつき子

誤れるかな、當代の女性。恐ろしきサタン虚榮心に、あたら貴き胸なこがしてのみある也。彼れ等は、虚榮心を以て自己の生命とし、自己のハートとなして、意氣滿々たるにあらずや。彼れ等の一部は。虚榮心なくんば、とても生き延びて行く事能はざる也。その愚や笑ふべく、その想や、憐然の極といふべし。見よ、長袖と云ひ、白粉と云ひ、紫袴と云ひ、彼れ等の虚榮心を遺憾なく現出して餘なきにあらずや。彼れ等は、このしいやれの爲めに生れ、これによりて生活する也。更に極端に彼等の斑面を見んか、種々なる罪惡はこの爲めに生じ、親を欺き、友をおとしいれ、人を泣かせても、自己の虚榮心を滿足せしむるに至らざれば止まざる也。卿等よ、沈思熟考せよ。神はか〻るもの〻爲めに吾人を、生み給ひしには非らざるを。か〻る危き醉より醒めて少しは靈的に活動せらるべき也。誤れるかな、この罪惡。改むべきかな、この虚榮心。吾人は赤手をあげ以て、このサタンを棄却するものに同情をよするもの也。

○机の忠告

京都市　岩淵くに

机「私は元と北山のほとりに住んで居つた松の木で、仲間の内でも中々頭役の者でありました。何分常盤木の事ですから、春は圓山嵐山などの床しい櫻を、一目の内に見渡し、夏は涼しい風の下に、加茂川の夕涼み興をそへ、秋は四方山紅葉なす楓の群を友となし、冬の愉快は銀世界と、何不自由なく、くらして居りましたが、幸か不幸か、或年の夏、心地よく枝葉の羽衣を打振つて涼んでゐると、一人の樵夫が汗を流しつ〻出て來て、いきなり私の身に鋸をごし〳〵と入れ、他家へ賣つて終ひました。それから、私は斯樣な形に作られ、うろして化粧をしてもらつて、机と云ふ名になつて當校へ嫁入をなし、二年の間あなたのお友達になつて、共に私も學んでなります」私「お〻机よ、實に其方は感ずべき者である、妾が其方と交際をしてより、早や二年の星霜を積んだか、實にあはれなは其方である。一時間毎に重ひ硯や本をのせられ、三十分毎にばつたり〳〵ときつくメられ、小刀やつめてほじくられ、或は傷をつけられて、四角の角は圓くせられ、いくら好い化粧も、直にまだらになりつ〻、下の方は年が年中ほこりにまみれ、休の時間には、誰彼の差別なく腰掛にせられ。其れのみでなく、妾と交際してから、前の樣に、春の花、夏の涼み、秋の楓、冬の雪景色等を、一度も見せた事はなし、實に机よ、其方は妾をさぞうらんでをるであらう」机「いへ〳〵その位の事は、少しもうらみませんが、貴方の學科の出來の惡いのには、私も閉口して、人知れず涙にくれて居ります。而して、其上壁に耳や目のある浮世とは知らず、たはむれ事を云はる〻は、此れ本當に私のうらむ所であります。何卒此の後は勉强して、この間の作文の好かつた如く、何事も滿點を取つて下さい。其樣になられたならば、私はこの上もない仕合せ、あなたは亦此の上もない名譽でありますから。あ〻、それに、あなたはそれを樂しく思ひませぬか」あ〻、其れにしても、たのもしきは、この机よ、妾もこの忠告によりて、此の後は心を入れかへればならぬ。折りしも、ちりりんとなる鈴の音。教室に入れば、心を入れかへ、對座默然。

新體詩

東京女子高等師範教授尾上文學士選

天

○百合の花

栃尾町　晨露子

朝を讃美の樂戀ひて、　夏の姫御子天の野に、
憧憬れ出て、舞ひませば、　かうべすべりて下界に落ちし
詩の月桂冠の野に咲きて、　永久に薫ずる百合の花

想像力あり

地

○君が涙

岐阜西加納町一丁目 花井方　江春愛子

うつくしく、　すみて流るゝ、　谷間の水。
さはれそは、　すくふがまゝに、　涸れなむを。
うれしきは、　むすびて涸れぬ、　君が涙かな

短句錯落、然かも形容の斬新、君が涙をむすびて涸かれぬとうたひし人は我初めて見る

人

○春がたみ

小笠郡南山村高橋　松下德子

詩集に挾せし花びらを、　あつめて紙に封じつゝ、
春のかたみとなつかしく、　机の底に秘めむとす。
過ぎにし春は夢にして、　散りにし花もかへらねど、
今新たにも面かげの、　小さう浮ぶも興ありき。
さて封じたる小がたみに、　筆とりそへてたゆたひの
何とかかゝむふさはしき、　名もなきまゝに春がたみ。

詩興横溢、最も氣取り易き材にして氣取らざりしを愛す

秀逸

○和歌の浦邊

神田　紫葉女史

またゝき淡き明星の、　和歌の松原ぬけいでゝ、

袖吹返す朝風に、
寄せては返す白浪に、
砂路はしろあか蟹の、
深むらさきの潮路に、
神の使のかげかそも、
　ひとり濱邊を逍遙へば。
　もまれてころぶ貝殼や、
　あゆみせわしき朝かな。
　飛ぶや水鳥あかつきの、
三つ四ついつゝ羽白し。

松葉かくなる小女らの
　姿木の間に見え初めぬ、
けふもきくなり彼の歌を、
　あゝ樂しさは和歌の浦邊よ。

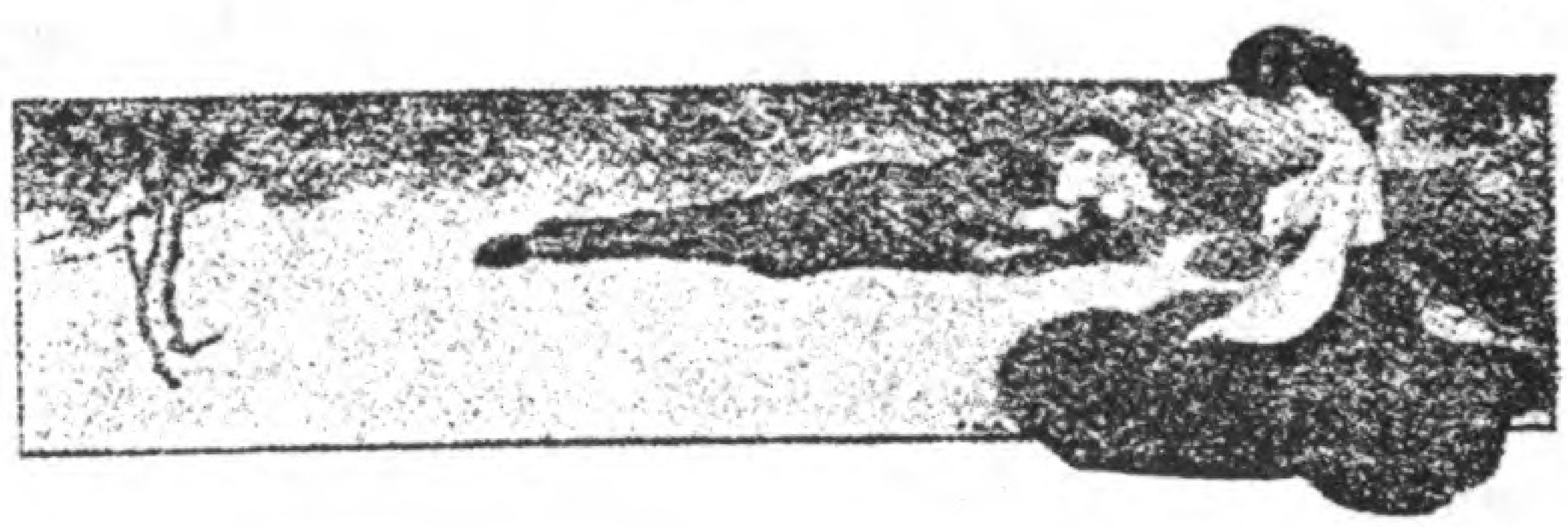
詩神彷彿として現はる

○琴の音　　愛知縣　かね

かくばかり狂ひもゆくに、
　かくばかり亂れもゆくに、
擊たむとやか弱き胸を、
　まがつみは斧ふりかざす。
妙なるは誰がしらべぞ、
　斧かざす腕にぶりて、
まがつみは何に醉ひしか、
　うなたれぬ琴の色音。

美人の琴、惡魔の斧、正に之れ詩の領

○淸少納言　　女子大學校　細川とし子



雲井の庭と白雪の
　御前の簾を揭げては
　香爐の峯もまのあたり
草紙見あきし手枕の
　夢を破りて聞ゆるは
　遺愛の寺の鐘の音よ
ゆかりの色のなしとても
　たやすく消えぬ緋の色の
　千年へだてし今日迄も
つきぬいさをは久方の
　澄む月影と競ふなり

おとなし

○おまゝごと　　呉市　大上くま

笑ひさゞめく春風に。
　其可笑さを打そえば。
散るぞ櫻の其下に。
　かわいお鍋でおまゝごと
おせどの淸坊が父さんで。
　おけしの梅ちやん母さんよ
かわひ人形が其孃と。
　無邪氣に語る愛情は
神の御愛子か花すみれ。
　優しき蝴蝶も訪れぬ。

遣句おろそかならず

○わづらひ　　ゆや子

言ふにも餘る煩ひを、　君は何とや見給ふぞ、
燃るや胸の炎にも、　沸きてや熱き涙にも、
冷かへりたる君がその、　み胸の血を如何にせん。
雪より清きわが胸を、　つれなきものと思さるゝ、
君こそいゝどつれなけれ、　たゞ一筋にあるべきを、
などて昨日の君にして、　今日の君とはなりませし。
捨て甲斐あるものならば、　夢惜からじこの形骸、
それも得ならぬ今の身の、　あるにあられぬ悩をば、
打ち笑ひますそれ程の、　君とは何時かなりませし。
よし情なくばつれなけれ、　君よし如何につれなくも、
君がちしほをひと度は、　溫めてやまん如何でかは、
たとへ涙の證きはてゝ、　枯れし形骸のよしくちぬとも

丸の圈點をつけし二句は巧みなり

○曉鐘　　白蓮女史

曉の神ヲーロラが、　ひんがし空を登るとき、
曳ける裳裾の彩化して、　榮えゆく清き紅の雲。
やをら紅雲うすれつゝ、　灰色淡く染めくれば、
高く神秘の天の扉を、　明けよと響く曉の鐘。
「自然」の絃に風ふれて、　響く微妙の樂の音か、
天の宮居の詩神の、　朝のしらべか鐘の聲。
高きみ空の額にしも、　響きてやさしき幸の曲、
廣き下界の胸にしも、　觸れてゆかしき愛の曲。

格調高し

○月居山の春　　茨城　茂子

かなたの峯に　そばたつ岩は
いかれる獅子の　くるふさま
　あゝおそろし
こなたの峯に　咲ける櫻は
あまつ女神の　立ちすがた
　あゝうるはし
あの麓をば　流る久慈川
龍のいかりて　はしるさま
　あゝすさまじ
このふもとをば　めぐれる小川
糸のもつれて　流るごと
　あゝ美し
あそこの谷の　木陰の池は

龍の住家か　底ふかし
あゝものすごし
こゝの谷間に　咲ける草花
天つ女神の　つむ爲めか
あゝゆかし
春こそは　げにたのしけれ
久方の　つきをれの山

能く態を盡くせり

○暮春
日本橋　橋本はな

綠色濃き葉櫻は　薄紫にたなびきて
此處黃昏の堤かな　頰に散りかゝる花もなし
芝生褥に西の方、　葉蔭に見れば錦屑の
散れるが如き夕雲は　夕映染みて緋牡丹の
紅絹の裂けたる花瓣の如　春逝きし國ぞ彼方ならむ

後半、最も力籠れり

○田舍の曉
茨城　小泉拾紫子

尊き御靈いつきたる、　鎭守の森の杉の木に、
明けの明星只一つ、　淡き光を放つなり。
折しも響く社のみ鈴、　神のみ聲からさびて



餘韻は長くみ空なる、　星と諸共に消えて行く
靑葉の陰を鳴きづる、　曉鳥羽ばたきて、
櫻色匂ふ東空の、　朝霧の中に影失する。
やがて東雲紅を吐き、　紅の淡幕綻びて、
金光數線こぼれ出て、　筑波の峯に橋架かる。

莊厳なり

○少女の凉
廣島　すゝき女

暑さを拂ふ松風に　心とられてすゝみ居し
少女はねむりに誘はれて　姿は夢の蝶の如
眠れる中の夕暮れて　友呼び交はす鳥の音も
靜かに止みぬ寢る少女　さながら合歡の花の如
若草吹いて起る風に　少女はさめぬ月出てぬ
輝く珠のひかるごと　少女の顏は淸うして

少女の凉を納るゝ又一片の詩趣あり、凉字に拘泥せざるは本篇の優れたる所以。

○しらゆり
愛知縣　紫琴女史

神の斧もて削りけむ、　くしき殿に身をよせて、
深谷の淸水に影宿し、　いみじき香流し行く、
神の化身の白百合や、　大空高き詩神の、
汚れし人に淸き詩、　示さんものと天降せし、
汝れが姿をしたひてか、　谷を越ゑ行く蝶二つ、
あゝ美くしき汝が姿、　神のみ園に遊ぶらむ、
未だ戀知らぬ小女子の、　笑める面に似たらずや。

處女の純白と白百合の花とは實に聯想の聚る處

○秋の勞働

兵庫　藤田喜子

秋の日光は東に　榮ある彩をなげうちて
勞働の途に誘ふべく　西吹く風は冷かに
朝は平和の領にして　諸人善と語るべく
けがれに染まぬ大空は　希望の色に滿ちたるよ
勞働の途に門立ちて　終日額に汗なすも
僞ならぬ喜悅の　心に平和の報あり

此の如き詩はいつ讀みても心もちを淸くす

○牧童

本郷　澤　貞女

紫匂ふ大空に　とけ行く星を惜まずや
蝶とび去つて野の花に　のこる涙を君見ずや
やよなさけなき牧童よ。
やよなさけなき牧童よ　漸く笛を吹き止めて
やさしき母の胸に倚り　乳房を啣む小羊の
甘きねむりを破らざれ。

温藉を以て勝る

○姫百合

靜岡　はちす

此の山里のひとつやの　姿が糸くる其ひまに
愛て養ひつ培ひし　花姫百合のかげ淸し
神のひめ言ひめ百合の　唇紅に燃えなむを
かたくも閉ぢて開かざり　秘言ひとつも漏らさじと
されど御空に星淸く　またゝきそめし夕まぐれ
躍る血汐を胸にひめ　訪ひ來し一人の詩人あり
この美しき姿見て　あはれとよりて手かくれば
二度三度うちゆるぎ　花は音なく唇を開きぬ
詩人は去りて只ひとつ　こゝに開きし姫ゆりの
つとめ果して今はいや　ひめ言もなき姫百合の花

○海のゆふべ

廣島　堀田温子

宵にほのめくいなづまの、　闇にきえたる心地して、
君と別れてたえまなく、　あやめもわかぬ袖の雨。
浪に送る礒際の、　淋しき浪の音きゝて、
さとしましけむ言の葉の、　別れは夢とさめざるに。

いつしかあらし吹き荒び、うき世の海はあれたちて、
よせては返すあだ浪に、おはれや中なみだされつ。
夢多かりし浪の上を、靜かにわたる夕雲の、
漂ふあたりはろ／＼と いづくの沖をゆくらんか。

○虹　磐城　秋月女史

かぎりもあらぬ大空に　美々しく奇しく色取て
北より南にそりかゝる　虹ぞまことの神ばしか
遊ぶは天津乙女らが
くれなゐ線をるはしの　おこり所を見んものと
疲るゝまでに走りつゝ　行けど行けども虹の橋
北と南にはてしなし

○夕の海　明石　白旗淸子

ほの紫の匂ふなる、香りは高き夕の海、
いとも尊き日の神の、五彩輝く雲の袖、
沖邊はろかに舊をのせて、吹きくる風はいと淸し、
霞を涙の限とて、こぎ行く舟の影おぼろ、
磯馴松の下かげを、ゆるう鷗の飛びかよひ、
さゝ波よする渚べの、貝は黄金の玉のごと、
あはれ美しき夕ぐれよ、これぞ平和の春の海。

○ほたる火　羽前　森谷ゆり子

靑葉さゝやぐ夏の夜、裏の川邊にさすらへば、
風のまに／＼おくり來る、いみじき香や白そうび、
醉ひて來つるかほたる火の、花のほとりにさまよひつ、
蚊やり團扇をさしのべて、あふげば忽ち消え失て、
影こそ映れ水の面、かは波ひくゝ又高く、
ゆられ／＼て行く末は、天つ國なるあまの川、
銀のいさごにやすらひて、しづけく夢やむすぶなるらん、

○野の花　赤坂　河村ふき子



朝露しげき細道に、一輪さける白百合の、
その花びらにこもりたる、淸き心を君見ずや、
深き啓示を君見ずや。

ソロモン榮華の極みだに、この一莖に劣るてふ。
人の力のはかなさは、浮世に何の譽ぞ、
浮世に何の企ぞ、
名も無き野路の草とても、摘むにあまれる思あり、
粧はぬ百合の花とても、夕の露に光りあり、
朝の風に香あり。

あゝその百合に身をよせて、とはに靜かにながらへん、
花よ、香よ、夕露よ、希望、平和、慰藉の
その樂園をこゝに見るかな。

○君がみ胸　麴町　重田靜子

淸く尊き光ある、君は星にも似たるかな、
さてしも君のみ言葉よ、悲愁の波ぞ胸に湧く。
君がみ胸に殘らずや、そのかみうけし征矢の傷
かゞやく戀の初花も、永久に咲けよと祈りしを。

○夏來る　兵庫　三浦久子

咲きてはちりて又咲きて、花春ごとに若かけれど、
うたて人の子いつまでか、頬くれなゐの色を見ず。
さもあらばあれ少女子よ、くれ行く春になやむより、
靑葉若葉の森かげに、淸き想ひを歌はずや、

○雀追ひ　福岡　野撫子

村の地主に雇はれて、昨日も今日も田の面に、

小さき竹を手に持ちて、　少さき聲をはりあげて、
雀追ひ行く三吉を、　われ呼び止めて年とへば、
年は入つて一人ある、　母は目盲と答へたる。

○夏の月　金澤　大地波子

朝日

青葉しげれる木の陰の　つゆけき小路さすらへば
怪しき鳥のなきすぎて　空に朝月かげ淡し。

雨後月

夕立晴れし山の端に　かゝれる虹の浮橋を
すゞろ渡りて夏姫が　天降りませしか青柳の
枝に冷しき夏の月。

○あゝ亡き君　大分　西萩花子

春花咲けば鳥歌ひ、　秋月照れば雲動き、
自然昔にかわられど、　あゝ君今は世にまさず。
咲く花輿もあらずして、　照る月涙の種にこそ、
あゝ咨れこの花この月に、　涙のたけを歎かなむ。
浮世の花は咲くとても、　浮世の月は照るとても、
土の下へは香はぬを、　何樂しうてあゝ君よ。
戀しき友よ亡き君よ、　今一度び醒めませな、
共に花月を歌はむに、　み墓に泣けどあゝ泣けど。
何の答さあらなくて、　月の光りのたゞ淸う、
あふるゝ涙苔の上に、　まろびて露と光るなり。

○螢よ汝　富山　諏訪芳子

一人文よむ學びの窓に、　あはれ飛び來し螢よ汝、
やさしの心忘れれど、　五年のむかし彼の君と、
共に汝をめてたるに、　たかどのゝ夕思ひ出づ、
くろしきものを心あらば、　せめて飛び行け彼君のみ墓に。

○ひるね　常陸　秀子

深き想ひにありし身は、　筧の清き水の音、
梢に高き蟬の聲、　漸う遠く聞きつゝも、
いつか詩集に枕しぬ。

○なやみ　武州　ほたる女

われも等しく人の子の、　ものゝあはれもしりたれど、
やさしき人のまごゝろの、　うれしからぬにあられとも、
所詮は心にそはぬよと、　思ひしりては中々に、
情の言葉きかなむも、　涙の種とことさらに、
つれなくわかれまつりした、　何今さらのわがなやみ、

○笛の音　福岡　高松ひで子

月また遅き里川の、　堤傳にさまよへば、
誰がふく笛か淸き音を、　風は淋しく誘ふかな、
見あぐる空に夕星の、　笑めるとこ世の花のかげ、
詩にもだゆる人の子の、　靈を導くそれのごと、
何にかむせぶ小流の、　歌ふや妙なる琴の曲、
しらぶる姫は何にや、　柳のもとのあさ子瀨か、
高うきこゆる笛の音の、　風にわなゝく一ふしは、
思ひ籠る戀の譜の、　しのび得たへぬ響かも、
返り見みれば君が家は、　それとも見へすもやこめて、
何にか狂ふ林間の、　心もそこにまよふかな、

○糸車　京都　岩村よし子

三年都の歴汲ひて、　今日故郷をたづぬれば、
我家はあはれ傾きて、　籬は破れ門朽ちぬ、
母やいますと訪へは、　答はあらで幽かにも、
響は何ぞ機の音か、　あらず糸繰る車の音、

○亡き母君　秋田　佐々木きた

情にみてるなつかしの、　我母君は今何處、

呼べどさけべど答はなく、
あゝ母君よ母君よ、
などて我をば只一人、
無常の風に誘はれて、
空しくこけとくちぬとも、
天つ御空の故郷なる、
御陵の下にしたしくも、
人の情の淺き世を、
神の使と仰がれて、
たづれどさがせど跡もなし、
情の薄き塵の世に、
殘して黄泉に旅立し、
はかなく消えし其身體、
靈は遊ばん天つ國、
御情厚き神父の、
仕へまつれる我母よ、
早くも去りて故郷に、
讃美の内に歌はれん、

金澤　森井せき子

○田園曙

あかつき頃を立ち出てゝ、
定かにそれとわかれ共、
一つ家あかり雞なきて、
かほるもうれし山里の影
うす霧の野にさまよへは、
八重山吹の盛りなる、
朝食の煙おちこちに、

大阪　つゆ子

○青葉かげ

青葉かげみどり滴る
そが手には香ゆかしき
何地より飛びて來にけん
ひらひらと花の邊りを
少女子は何思ひけん
微かなる笑みを洩らしつ
その下にまどろむ少女
一枝の花百合もてり。
羽根白きやさしき胡蝶
樂しげに飛びつまはりつ。
愛らしきその口もとに
夢路には蝶たどるらん。

牛込　白百合

○百合

みそらに淸き月姫の、
下界をかざる白小百合、
白衣の女神ふむか如、
玉のかつらのおちこしか、
淸くけだかく美はしく、
ひらけるさまのけだかさや、

茨城　滑川　止米子

○足尾にゆきて

山高けれど草もなく、
淸き流れもけがれはて、
岩のみひとり聳えたち、
稲のみいりは少なにて、
民なやませしいくそ度、
すむ人なべて苛さめて、
飢にやせたる猿の、
あゝおそろしの毒害よ。
されどおもへよ此の山に、
深くうつもれあることを。
利のあるところ害もある、
あゝおそろしの害毒よ。
骨のみ高く肉おちて、
それにも似たるあはれやな、
世にも尊き寶こそ、
げにも浮世のならひかな。

横濱　寺田光子

○兄と妹

兄はやさしく語り出てぬ。
兄はやさしき少女子妹子
我ふく笛の音につれて
妹は笑みてさていひぬ。
我歌聲は低けれど
夕の磯にひゞくなり
くれ行く春の夕磯に
君歌はずや逝く春の歌
君が笛の音高ければ
いさ歌はなん逝く春の歌

山口　ゆかり子

○折にふれて

紫匂ふ夕づゝの
惱む思を靜めむと
濺れる風は涼しくて
折からもるゝ妻琴の
しらべは高くはた遠く。
淸き光りを望みつゝ
心も空にさまよへは
胡蝶よ何をか夢むらん
誰がなつかしき春色かや

越後　照霞

○友千鳥

名古の浦べに、
情もとみも、
よせては返す、
ちりて亂るゝ、
見ればこひしゝ、
昔むつびし、
せめては波に、
心づくしの、
とへどはかなし、
ちりてみとせと、
ちりの世の、
すてつるを、
しら波に、
友ちどり、
五とせの、
机じま、
言づてゝ、
浦うらを、
波のはな、
むせぶなり

叙事文

日本女子大學教授　鹽井文學士選

天

○あけぼの

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

有明の月が淡く低く木の間に傾くと、ほの〴〵と闇の幕が裂け初めて、希望の光りかゞやく曉の空は、下界に新らしい生命を與へて、こゝしばしはけがれぬ淸き氣が通うて居る。今しも夢より覺めしごと・うすもや立つた七峰は、あけゆく御空に色はえて、松は黑く瀧は白く、朦朧たる所にいふべからざる神秘がほのめいて、寺の御堂の棟に早くも朝を讃美する鴉の聲、夢うつゝの下女の耳には、心憎くも響くであろう。私はそと柴の戸押して、庭に出た。名も知れぬ小草〳〵に、きらめく露の玉は、さながら足駄の紅緒の色あせなんまで、足にハラ〳〵とこぼれるのである。ア、如何にも心地よい。で、私は鳥の歌にあはせ「見はてぬ夢が行方はいづら、わかるゝ峰のあの横雲か……」と、曉のうた唱ひつゝ、つめたき白玉ふみしだき〳〵、裏のさゝ川へ來た。臨めば水に消え殘る星の影三つ四つ二つ、そを碎きては結び、結びてはまたくだきつ、サラ〳〵と微妙の音を立てゝ流れる小川の調べ、ア、此處にも神韻か……。靜かに手水つかつて、みだれし髮をかいなでて居ると、淸い〳〵白百合の花一本、水のまに〳〵漂ひ來るのであつた。マーいづこの誰がみやび心ぞ、ささ川に花の運命をゆだねんとは、おゝ、丁度病み伏し給ふ兄さんが御ねざめわびしき枕邊に、かざして上げたら、如何に喜こばれるであろー。そうだそうだ、多分神樣が私にさづけ下さつた花に違ひない、斯く思ひ浮べた私はぬるゝもいとはず・件の花を捕へた。そして、岸邊にひざまづいて感謝したのであつた。仰げば夜は全く明けて、母屋の方に父樣の聲がする。

（雨評）　文またあけぼのの爽やかに生き〳〵としたる韻致あり。天とす。

地

○嫁ぐ宵の記

石神喜惠子

洗ひ髮の束髮を、高島田に結ひかへし重さ。唯もう譯もなく、人に顏見らるゝが耻しく、朋輩の方々學び舍の庭に、如何に噂し玉ふらんなど思ひ續けつゝ、きのふ迄つけなれし袴、名殘惜しく疊み居れば、襖靜にあけて、

　お孃樣、お風呂召しませ、

と乳母の云ふ儘に、誘れて湯殿に入りつ。お勝手の方には、たち働く男女の聲かしましく、何やかや指圖し玉ふ。父上のお聲も聞ゆめり。

浴衣姿のまゝ、母上の手招き玉ふ傍に行けば、お化粧は此室でと、早小母樣ひかへ居玉ふ。

上氣して、薄紅にほてりし頰へ、好まぬ厚化粧も儀式とや、小母上の仰に從ひつ、櫛笄、中ざし、前ざし、あとざし、房々とせる金糸、愈頭は重うなりつ。

御門の方には、幾度か腕車の止る音聞え、次の間には姉上らしき聲音起りぬ。

母上お廊下を通る足音忙しげに、一寸お顏出し玉ひて、

　妙さん、せかないで、ゆつくりなさい、姉さんも來たから、

といつもより早口に、

　もうぢき、お濟みになります。

と小母樣の言ふを聞き捨て、奥樣々々と呼びたつ、お玄關の方へ。

乳母が後よりきせかくる、友禪の長襦袢、白羽二重の二枚揃ひ、黑縮緬の裾模樣、厚板の帶きゆうと締まりて、着てゝろよう、頓に丈高くなりたらん樣覺ぼえて小母樣と乳母を見くらべつ、

乳母は横より後より、我が姿見上げ、見下ろし、笑みかたむけて、

　ほんとに、お立派におなり遊した事、お姉さまよりは、一だんお柄も大きうて、

と嬉しさう。

小母樣も片頰に笑みて、

　まあ一寸、うつして御らんよ、ほんとに、よいお嫁樣が出來ました。

と言はれて、愈きまり惡く、顏赤めつゝ、おづ／＼と鏡に向へば、われながら面かはりして振袖姿今更に。

折から人々のどよめき聞えて、お迎への來れるよと、たちさはぐに。わが胸、俄にさわがしう時めきつ、小母樣のうしろより、そとうかゞへば、打ちつゞく提灯の光りは、前の小川に映りて、

　妙ちやん、お前氣をおつけなよ、萬事にね、

と今し入り來れる姉は、わが肩を打ちつ、
お座敷の方、頓にさわがしうなりぬ、

＊　＊　＊　＊

數時間の間、妾は人々に擁せられて、家を出でつ、なつかしき父母に別を告げて。

せゝらぐ門の小川の流れは、わがこれより蹈まんずる女の道の、いとしげきを呼ぐが如、前に倍せる火影を水にうつしつゝ、腕車は遠く〳〵家を離れ行く。

（雨評）情景多少躍動したり。地とす。

人

○樂しい家庭

下谷區上根岸百二十五　太田あきつ子

庭の若葉は、清い美くしい月に照らされて、きら〳〵光つて居、折々訪れる風は、實に涼しくよい心持て、遠近には蛙の鳴聲が聞える、東京とは云ふ物の、もうもう極の隅、少し行けば、すぐ田圃なので、夜の靜かな事と云つたら、まるで都遠く離れた田舍のやう。

床の間の薄暗い方に置かれた蚊遣りは、盛んに白い煙を出してゐる。お父樣とお母樣とは、座敷の端近に向ひ合つて、さま〳〵の浮世話をしていらつしやる。兄樣は、椽側で手風琴を鳴らしてお出でになり、弟は燈火の下で本を見てゐる。妾はお父樣のお肩をもみ乍ら、面白い浮世話に耳を傾けて。

「有難う、もういゝよ、あゝさつぱりした」と、お父樣のお言葉に、手を止めて椽側へ出ると、螢が一つ、燈籠の下の笹の所に光つて。「あら螢が」と云へば、「姉樣どこに、僕が捕まへてやろう」と、弟は本を投げ出して、すぐ庭へ下りた。「孝一に捕れるかな、螢にや羽があるからちつと覺束ない」と、おからかひになるはお父樣。「およしよ、罪じやないか、可愛想に」と仰せらるるはお母樣。兄樣は、手風琴の手を止めて、只笑つて見てお出でになる。

弟はやがて、手を延ばして捕らうとすると、螢はふわり飛んで行く。「夫れ見た事か、矢張駄目だらう」と、お父樣はお笑ひなさる。弟はどこ迄もと追ひ掛けて行つたが、遂々、お隣へ行て仕舞つた。お父樣や、兄樣にからかはれるので、弟は口惜しがつて居る。

折りしも、上り列車が通る音。通り過ぎると、又元の靜に返つて。

兄様は庭へ下りられたが、白い浴衣の目に立つて、低く詩を吟じ乍ら、あちこち歩みを運ばれる。姿は椽側に坐つて空を見上ぐると、只一輪の澄んだ月が、恰微笑んで、この樂しい家庭を見守もつてゐるかのやう。

（雨評）何處となく樂しい家庭のありさまは見えた。人とす。

秀逸

○夏の朝

長門　大塲勢以

隣りの翁が植木つむ木鋏の音に、樂しき夢破られて、やをら起き出て、庭におり立てば、未だ明けやらぬ空に、殘月淡う、萬朶の曉星、幾度か急しげに瞬きつ。あたりは猶寂として、門田になく蛙の聲のみ、いと高し。

やれたる垣に露ながら、ゑみこぼれたる朝顔の數を數へつゝ、枝折戸出て、露けき小道を辿り、清き流れの邊りに出でぬ。冷き川風衣の袖を飜し、鬢の毛をなぶる心地よき、下ゆく水は清く涼しく、石にせかれて、神の秘め事傳ふるかと疑はる。

見渡す向は、朝霧深く立ち罩めて、遙かに見ゆる中津江の橋は、只朦として雲のかけはしの如し。川にそひたる小路を草刈る童の五六人、聲をかぎりに俚謡うたひつゝ、まぐさ、なぎ立て、或は束ねなどする樣の、如何に無邪氣にも、又神々しさよ。彼等の胸には、眞に平和の神の、宿り給ふらんとも覺て、そが尊き心の、永しへに汚されざらん事をいのりつ。

樣々の感想、泉と湧き出て、身は自ら俗塵を脫して、心仙境に遊ぶか、只夢の如く陶然として、自然の美に醉ひつゝある程に、東は漸く紅に、星影いつしか、うすれ行きて、月の光ほの白うなりぬ。折りしも、曉告ぐる鐘の音の、何處よりか響き來て、何處ともなく消えて行く、又無限の詩趣ならずや。

あゝ世の煩累に惱まん人、朝な〳〵此處に來り、神のみ手に抱かれて、汚れし心を洗ひ、豐けき趣味に浴せば、懊惱忽ち去つて、身の塵界にあるを忘れ、限り無き慰藉を得ん、げに靜けき此のあした、平和なる此の幽境。

やがて、かなたこなたの家々に、雨戸くる音、車井のきしる音など聞ゆるに、われも亦朝のつとめあり、いざ歸らん。しつとりとせし、裳裾からげて、小草ふみわけ立去る折りしも、何處よりか、えならぬ香の、後

を追ふ心地するに、思はず振り返れば、かたへの叢中に一もとの白ゆり、露をふくみて笑める風情、さても優しや女神、そのまゝの清き姿、折から、颯と吹きくる朝風に、おく露はら〳〵と香をのせて‥‥。

（雨評）優美に作り得たる文章と申すべし。思ふに、辭は既に成れるものあり。更に想の清新ならん事を工夫せられよ。

○夕暮の散歩

千葉縣上總山武郡成東町和田　植竹春霞

今迄西山の邊りから、幾千萬本となく、金色の征矢を射出してゐた夕陽が、緋縮緬をちぎつたやうな雲を遺して、沈まんとしてゐる。この夕、我れはそゞろ足の行くまゝ、郊外へ歩を運んで、夕暮の美景を賞せんとしたのである。見渡す限り。野も山も里も眩き夕陽の光をうけてゐる。一面の海、否、麥は、いま穗の出盛りで、綠の毛氈を敷き詰めたやうてある。折々、羽二重のやうな夕風は、さは〳〵と畑面をなびかし、恰度漣波の漂へる湖上の樣で實に平和な眺めてある。落ち殘つた、日の光は、垣に添へる道を過ぎ行く農夫の腰にせる鎌、肩にせる鍬に映じて、折々ぴかり〳〵とあざやかに光つて見える。遙向ひの堤を、駒引いて歸る馬子の、節おかしき卑歌も、塵にまみれた腸を洗ふやうな心地がする、又彼方の並木の木の間がくれに、ちらほら、束髮頭のいくつも見えるのは、茶摘みに行つた乙女の連中らしい。節床しい唱歌の聲も聞えてくる。此方の河畔を立ち出でたる、二三人の乙女は、紫紅の長袖を連ね、花籠に菫や蒲公英や、溢るゝばかりに盛つて、花に似たる顏には、悅びの色を顯しながら、戯れてゐる、其の聲清く空に澄むで、畔徑遙に歩み行く其の容姿の崇高く神々しさよ。遙彼方の柳がくれに、二三人の子供が小さい舟を浮べ、而も、日本の富士艦が帆を揚げた所だと、高らかに笑ふ愛らしさよ、やがて、烏が一羽、續いて二羽三四羽、奇麗な空を横切つて、北の方へ鳴いて行つた、だん〳〵と夜の樣は、我が里を始め四邊を、暗黑に包んでしまつた。愈々この世が夜神の全く占領地となるとともに、星は彼方此方と顯れ出づる。幽に見える苫屋の邊りから、犬の吠ゆるのもきこゆる。多分内で待つて居るだらう、早く歸らうと、家路を急ぐ道すがら、向ふの家の松が枝に、鏡の如き月が懸つて、隣の家の藤棚にさし込んだ其處に、赤いリボンがふらり〳〵として、眞白い腕を伸し

て、紫の露したゝる藤の花を手折らうとするのが見ゆる、緋色の袖口が、血汐のやうに、其の白い色にからんだ、藤花が折られると、露がほろ〳〵とこぼれて、うなじにかゝる、こと〳〵と、下駄音させて退いて、襟を撫てゝ、眉を顰めて、につこりとする。げにあどけない小女！吾れは一種言ひ得ぬ清高の感に打たれて、家に歸つた。

（雨評）文才はゆかしきものあり。筆に今一層の練習を待つものあり。

◎逍遥

石見國濱田　杉浦翠子

櫻と模様友禪染の小袖を脱いでオリーブ、グリーン、濃き薄きだんだら染めの羅と着替へた、女神は其麗顏に希望多き夏の光をうかべて、翠黛の眉は活々と丹花の唇は燃え立つやうな初夏の一日、友の郊外散歩を試む、町の盡頭の麥畑に肩を埋めて通り抜けると、此處は三瀦山の麓である、樹木枝を更はし葉を重ねて恰も鮮やかな綠の天幕の下を潜るやうで、其蒼翠の滴が友の君の白き頸白足袋のあたりに、ホンノリと青味を懸けて居る、處々天幕の破れ目から、華やかな太陽の光線が洩れて、ハット明るく、綠燦として光輝を放つ、汗ばんだ額を拭ひつ、洋傘杖に、九折なる坂路を登り行くと、道傍の叢から蜥蜴がかけ出すので、足が悚む。漸く頂上へ行て、芝生の上へ足伸ばして見ると、大空には一點翳せる雲だになく、東を見ればこは實に宇宙の大舞臺に瑠璃色の絹幕を引きしめた如き洋々たる青海原、太陽の光線は、幕の西方に反射して、白銀色に眩く、今にもそこから天つ舞姫が出現ましましはしないかと凝視して居ると不識眩きを覺えた、其は閃く御顏は仰ぎ得ずたゞプラチナ色に輝



最近東京女學生風俗（其十五）

き在す御日様であつた。而て絹幕の折々風に動搖する如きは日本海に蟠る大濤のそれである。友は三脚卸して寫生し始めたが、私は何のこの自然の絶美が寫されようと冷笑した。見よ、人類が有ゆる知能を絞り幾許の金を費した宏大の艦も海に浮べたら、一葉の流るゝにも價せず。蒼穹に瞬く星の一粒よりも、微なる者かなと私は無限の感に打たれる、偶然友を見ると半描いた繪の上に無意識の十文字を塗てる、豫想の如く意に叶ふやうに出來ぬのである、今度は一疋の蜻蛉を促へて來て熱心に寫生して居る。私は自然の美といふ西詩を小聲に口吟んだ。

（雨評）詞に花はあれど、筆まだ練熟を欠くものあり。

○梅雨晴

下谷區上野公園內　杉田繁子

天の川の堤やいかにくづれけむか、絕間なく降りそそぎ、さみだるる稚をかぞふるに、伊豫の湯下駄ならねど、およびもそこなはれつべうさへおもはる、日頃訪ひくる人のかれがれなるむぐらの宿のこのごろは、まして又の通路もたへたるに、物學ぶ窓は楓の若紫繁り合ひて、ひるもをぐらくいとさうさうし。されど、そやみだになければ、枝はらはんすべもなく、今日も雲のとつる空のみながめらる。庭の池水はあふれて、小笹、すげなど、水の下草となりて、雀の雛の翼もぬれて、わびしげに餌ひろふなるさまのあはれなり。中垣の梅の實、黃ばみたるが、ちからなく落ちくるに、うみしは我のみにてはなきかと、いささか心もやりて、さびしくもをかし。折しも、俄に風のあらあらしく吹き出て、物などとばし、雨さへうちまじれば、おそろしくて、とみに板戸をとざし、心やましく覺ゆるに、夕つかたになりて、西の空よりやうやうに晴れゆき、いとめつらかなる日影も匂ひ出て、里川の落ち合ふ濁水に、やなうつと人のあまた立ちさわぐ聲に、出づれば、ここかしこの梢、名殘の露したたる青柴に、夕日のはえて、あふぐみ空には、七種の薄絹棚引たらんやうなる虹の浮橋の懸りて、天つ小女も渡りなんかとあやしまるばかりに、えならず美くしきに、今は心にかかるうき雲も、ぬくひ取りしやうに、心地すがすがしうなりて、鳥のさへづるも何となう長閑にぞ、覺えてなむ。

（雨評）筆は整へりと申すべきのみ。

○水邊の納涼

和歌山市　山東香子

夜に入りて程經ぬれども、尙むしあつし。あふぎ打つかひつゝ、物の本など讀みもて行けば、蚊は顏のあたりを名のりあるきて、堪へ難く、ふしどに入れば、蚤はきぬの下を飛びあるきてねぶられず。如何はせんと案じけるが、やがてやさしき聞きなれたる聲にて、『山東さん、あつい事ね』との給ふ友ありけり。妾は悅びつ、『英子さん、英子さん』と蚊帳打ち上げて出て行きつ。散歩の事をうながさんとせしが、英子樣も同じ心になんありける。

涼しき方に行かんとて、二人あくがれ出でぬ。千草における葉末の露は、月まち顏なれど、飛びかふ螢の光りは、暗によりてしるし。漸く小路をたどり行きて、ある山川の邊に出づれば、岸を洗ふ水の音、水を渡る風の響など、いとさやかなり。しばしやすらはむとて、木の根に腰打ちかけ、あたり見まはす程に、東の山のあひより、月はなやかにさしのぼり、くまなく照らしければ、葉末の露は玉を欺き、水の面は黃金の龍を跳らしたらんやうにて、いみじく興を添へぬ。流れの急なる處には、岩を嚙み、緩き所には、石を抱き、淵に落ち瀨に上りて、晝夜やまざるは、人の身にもたとへつべし。あはれ、逝く人も、亦此理に漏れじと思へば、川風身にしみて、夜半のさびしさまた一しほなり。今は時刻いたく移りたればにや、木の間なる藁屋の窓を漏りし人聲は、繰る遣戶の響につれて、次等にほそり行き、犬の遠吠のみ、手にとる如く聞ゆ。あまり冷えなばあしかりなむとて、やをら立ち上り、二人にて、もときし道にひき返しぬ。いたく勞れたれば、蚊帳のまはり群る蚊、きぬくぐる蚤も物の數かは、曉り知らで眠りにけり。(おはり)

(雨評) 冒頭の蚊と蚤との道具をはたらかして、結末をつけたるところが、一寸面白と申すべきのみ

○梧桐日記

牛込區早稲田鶴卷町四一八　兒島登美子

露に濡ほひし若葉、今朝は甘き蜜汁わき出でゝ、蟻々たる蟻群、雲聚烟簇、我れ先きにと爭ひ昇り來る。眞晝、蟬訪れぬ、暫し堪へる間に、我が爲めに一曲を語る。

今宵螢一つ舞ひ來ぬ。されど、恨めしや、湯屋の煤煙

を嫌ひて、間もなく辭し去りぬ。竹坊、棒の端に笹結び付けたるを持ち來て、わが來客を捕へんとす。馬鹿な子なり。されど愛らし。

かくて、一夜を經て、心地よき朝、三毛猫の痛き爪かき立てゝ上りきぬ。あまりのにくらしさに、風吹き來る儘に、振々と搖げば、猫落ちんとす。

夕、あゝ、その夕、我れの露に湯浴みて、化粧終りし時、いと大きなる裸漢、すら／＼と猿の如くに上り來て、われはそが爲めに折り取られて、食堂に麥酒瓶に挿されて、飾られたり。

やがては死せん此の身、煩悶と苦痛とに迫られ、涙も王なすものを、あゝ悲しき哉、此の夕。

待てど螢は訪はざりき。

翌る日、東の窓の開かれし時、旭日はさつと、眩ゆきばかり此の身を照ししかど、我れは笑む事能はざりき、

其の夕、我れは益々萎れ行きて、慰めの言葉さへ聞えずなりし時、われは死期の近づきしを知れり。

ふと夢さむれば、小川の中に水の流るゝにまかせて、我は漂ふなりき。扨ては、此の身は既に捨てられたるなりしか。流るゝ事兩三日、或日川に沿ひて株打ち連らねたる岸に着きし時、我れは親切なる老人に救ひ上げられて、こたびは、木蔭涼しき池の汀に置かれぬ。危くも死を離れしと雖、秋、やがて霜降る秋は廻り來ん。嗚呼我れは不幸なるかな。

（雨評）想に筆になほ淺きふしをまぬかれず

○あけぼの

徳島市富田伊賀町　住友とき子

幸ある妾は、父母兄弟の安樂を氏神樣に祈る旁々、旭の美を眺めやうと、朝とく起きて家を出たが、まだ四時少々。遠近はゝつきりと見えない、只青い空の懷から、きら／＼と眼立つ星が、七ツ八ツばかりである。

妾は一丁ばかり辿つて氏神山の麓へ來ると、流れ星の樣に、す…つとはやく數中の級を登つて、ほつと一息。それから、こんもりとした杉檜の森の中路を、名もしらぬ鳥の夢を驚ろかして、爪先上りに通りぬけると、潔く流るゝ谷の小橋へ出た。其の水音は難攻不落のとりでを落した勇士の勝鬨の如く、又今日の天の晴快なるを賞するやうにも聞える。

更に、楓に挾まれた百餘の磴を踏んで、喘へぎ／＼頂の社へついた。けれども、月はまだ出ない。酌む御手洗で身を清めて、しらせのわに口の音も高く、本殿

を三拜九拜、木梢の露にか、首のあたり思はずもひやりとした。漸く振り返つて見れば、東天は薄紅となつてゐる。西の方に我れはがほにまたゝいてゐた星の影も、いつしからうすれてしまつて。

折りから、寺に撞き出す明の鐘、朝の靜けさを破つて、ゴーン……と潔く……勇ましく……心地よく……響く、

恰も生存競爭の開始を告ぐるかのやう。

刻々の中に。東雲の空は、深紅に——紫に……つひに煌々たる旭、美しう紀伊山系にゆら〳〵と登つた。すると森羅萬象は、啓示洽き日の神の恩澤に浴して、照り映やいてゐる樣、實艶麗。

此方の森からは、烏二羽三羽、カア……カア……勇ましう鳴きながら、日影に金色に輝いてゐる朝凪の海原の方へ飛んで行く……其邊、少さく見ゆる蜑小舟、その景、愚な筆にはのべがたい。否、叙すべき筆がないのである。

こんな内に、下の町中から、鷄の喔々たる聲が聞えて來た。その聲は妾の耳をかすめてすぎ去つた。が、又新しい聲が來るといふ風で、がら〳〵と雨戸を明ける音、車井戸の水を汲む音、など賑しくなると登る日の美觀は一層である。

「胸襟自ら開け獨立羽化白雲郷に遊ぶの思ひ」とは、かゝる快感をいふのであらうと、つく〳〵と感じた。

漸く心づいた妾は「はえある今日、この里、平和なれ」の告別の辭を殘して、刻んで下る二百餘級……。

（評）餘路は、なほ二百餘級の上らざるべからざるものあり

○歸郷の一日

本郷區妻戀町壽秋原方　澤　貞女

悠々たる郷園の一日、今や晩霞の間に暮れ行かんとする一夕、我は飄然出でゝ、冷かなる路草を踏みしだきつゝ、野水一條、昔しながらの音して流れゆくほとりに、足を止めぬ。

落暉全く西山に沈み、暮鐘一度起りて、四顧漸く暗く、深紅燃ゆるが如かりし山巓の彩雲、次第に淡らぎて、やがて白くやがて青く、又黒く、野歌一聲低く起りて、青葉を渡る夕風に消えゆけば、山も野も森も、亦いつしか影をゝさめ、村家の燈火、遠く近く數點かゞやきて、時に笑聲を洩らし、空なる星と共に、夜の平和を樂むに似たり。あはれ、此の平和の樂園。

やがて、團々たる十五夜の月は、彼方東山の巓に出で

ぬ。我れは父に随ひ、弟を率ゐて、高樓に登りぬ。月光隈なく照り輝き、清風吹きて、露華十里に渡り、茅屋森樹幻影の如く、山野の光景眞に一幅の墨繪に似たり。やがて、兄上も來られぬ、母とも續きて到れり。弟は、學校にて教へられし唱歌を、覺束なげに口許に、節をかしく謠ひ出したれば、我れも、久々のすさびにとて、琴を出して此に和しぬ。兄上は耳傾けつゝ、快げに母上と語り、双親笑をたゝへて、我子の樂むを喜ばるゝもの丶如し。長兄今遠く異郷にあり、今夜此月に對して歸心千里、矢の如くなる可し、老いたる双親が心頭、常に一點の懐となりて浮ぶ所のもの、又必ず這事にあらむか。

夜氣露を帶びてそゞろに身に泌む。仰げば、月は早冲天に高く上り、晴穹遠く澄みて、灝氣滴たらんとす。あはれ樂しき哉今宵月夜團欒。

（雨評）筆兀々として漢文くづしの如き嫌ひあり

○夕立ち

大分縣中津京町　矢　名　女

打ち續き暑さ酷しかりしに、今日は一しほ增りて、炎熱やくが如く風死して、氣動かず、緑りの葉も萎み、ほそく流るゝ小川の音もゆるく、なく蟬のこゑも、暑さに苦しむ叫びの如く、彼を見るにつけ聞くにつけ、一しほ暑くるし。

折りしも、心地よや、風にはかに吹きおろし、雲あわたゞしく走る。蟬の聲やみ、風鈴の音みだる。雲忽ちにして、人の如く、牛の如く、象の如し。すは夕立ちよと見る間に、黑雲にとざゝれたる空を、雷の音抑しだすやうに、西より東になり渡る。電光閃々、雷轟々、乾坤ために震ふ。忽ち、篠つく雨、沛然と横さまに降り來り、雨戸を立つる隙もなく、椽をうち、屋根をうつ。雷ます／＼轟き、雨いよ／＼降りしきり風またいよ／＼烈しく、電ます／＼閃き、凄じき景色となる。やがて、雨小降りとなり雷遠く去り、風亦和く。椽先きの手拭なほはたり／＼と窓をうち。うるほひし障子の紙、風の出入毎になる。……雨全くやむ。窓を押せば、風さわやかに、心地よく、西の山の端には夕日輝き、雲の歸るさまいそがはしく、觀世音堂の欄角より、天女の帶かとも見ゆる虹、天空にひきはへ、端は遙に北の丘に落つ

幾多の青巒奇峯、塵の外に洗ひ出され、死したる草も木も生きかへり、瓦屋根、わら屋、目に入るもの、

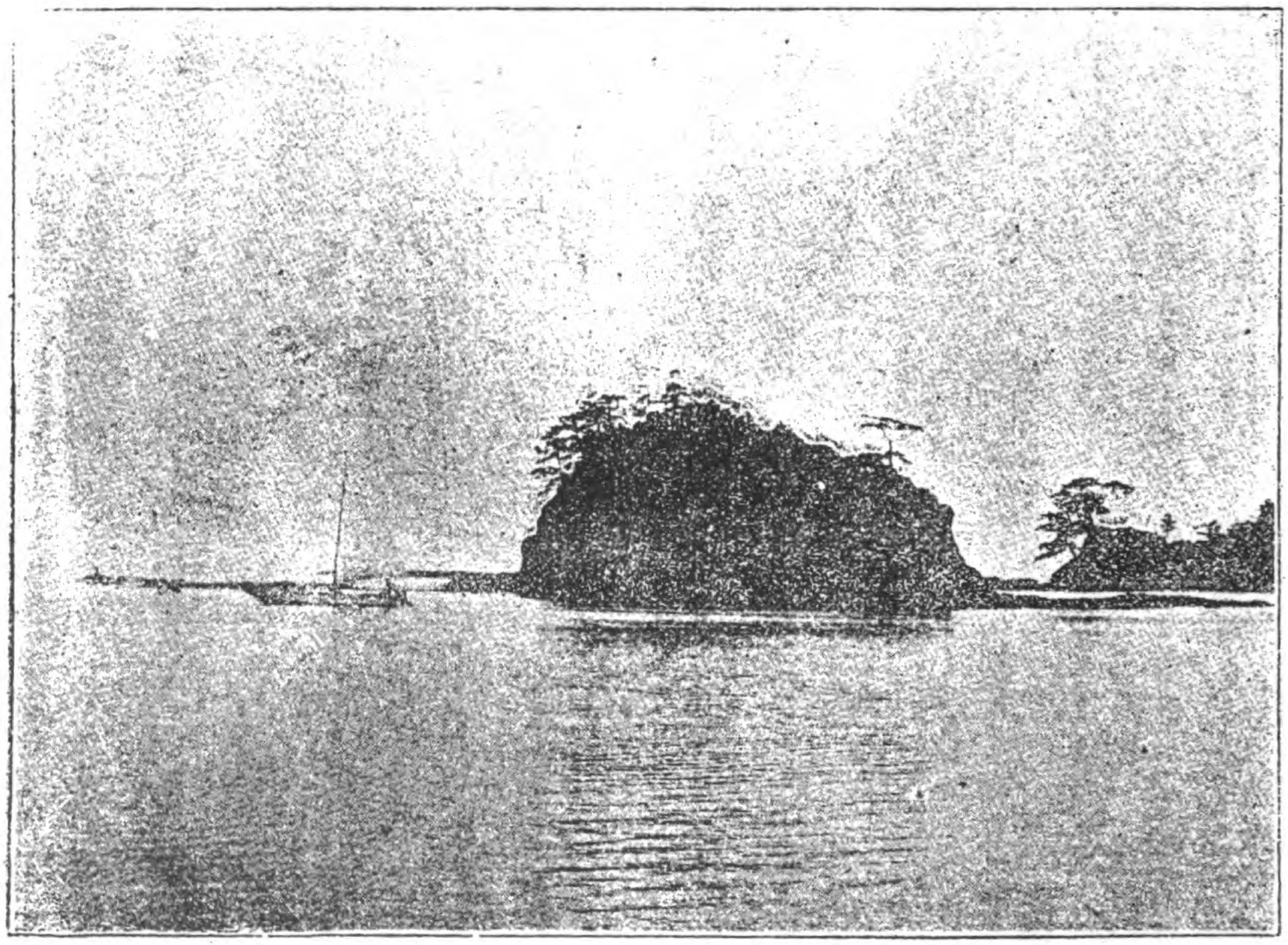
皆いさぎよしともいさぎよし。

（雨評）未だし〳〵

○あのね

神戸町元五丁目　きくえ

私ほんとに、面白い夢を見ましたの……、昨日の暁でしたわ。それがね丁度、森先生の躰操の時間で……、一生懸命に、徒手躰操を行つて居るのですよ、すつかり忘れてしまつて、順序も何も目茶で思ひ〳〵な事ばかり。ほらいつか。あんまり忘れやうが甚だしつて叱られた時がありましたね、丁度あの時其の通りなのあら點取りをして入らつしやるはと、誰れかゞ……えと驚いて見やると、成程先生は、手帳に何か扣へて居なさる、



紀州元島

おやと思ふと、をかしいのね、いつのまにか側へ行つて、一心に覗き込んでるんではありませんか。芳ちやん……八點……まあ。……菊樣は……おや九點、だと、敗けやしないかしら。私は私は々々と、目を皿の樣にして……あゝあつた、あらシ……シチ點、さつと水を被された樣。如何しやう々々、芳ちやんにさへ、敗けちやつたの、殘念だわ、せめて八點でてもあつたらと、不覺聲を出しますとね、先生が

誰が？ハツハツハ……そう周章てずに、よく見るさ。鳥居歌子樣は、それこゝに、それ九點、と仰つしやるのよ。下手だからつて、そん

なに、からかはなくつても、よくつて！と、口惜しさ一念で、早や目には、涙を堪へながら、怨じる樣に云つて、それでも一度見ますとね、アラッ…眞實！九點なの！。

いくら周章てるつたつて、程があると、吾れながらをかしいやら、嬉れしいやら。此の時こそほんとに、先生樣々と拜みたかつたですよ。が、それも、ほんの漸くでしたわ。此度はね、もしか、もしか、十點だつたら、十點だつたら、どんなに、鼻が高くつて、誇りかな顏が出來るだろうと、ホヽ、大變な事を考へたのですよ。

とね、不意に、身の程しらずめ…馬鹿者め…と、それは〳〵、思ひ出しても、ぞつとする、恐ろしい聲と同時に、身は數十尺もの高さから、取つて捨てられたやう

はつと吾に返つて、四邊を見廻しますとね、母樣がにこにこしながら、呼んだが起きない、ゆすつたが起きない、上布團をはねた、がまだ寢て居る…ので遂々御敷を引ひたのさ、さうとはよく寢たものだねと、御布團をたゝみながら仰いました。

（號評）末段の筆はよし。前段の筆は難澁なるところあり。

○朝明

名古屋市傳馬町三、菱佐方　宮脇とし子

目の覺めたが何時頃？。フッと消え殘る枕元の薄き灯影を吹き消すと、もう夜は隈なく明けてゐた。こゝら邊り町端れの、岑として、ものゝ音一つ聞えぬに、サッと、それがいかにも今更のやう。折れ込む外面の明りは劃然と、暗い、眞暗な室内に線をひいて。

每もの二階の欄干にもたれて、昵と露の小庭を見下すと、靑い靑い若葉の中に、優しう、それは可愛らしい朝顏の、紫が四つ、紅が七つ咲いてゐた。瞶るに、颯と、吹き起る朝風の心地よきに、ホロヽと含んだ露を滴す花は後をゆらいめて居る。

ズッと前の方を見ると、まだ太陽は上らない。こゝから僅三四町の、靑葉山はたゞボーッと。妾は又山へ行く氣になつて。

戸のたゞ一枚だけあいた、それで人影もない卯屋さんの表を、左へ折れると、もうそこらは細い細い草ぼこ道。ヒヨコ、親鷄、二三十もそこゝに散らばつて、餌を漁るに餘念も無い。

小氣味惡イ程しッとり露にぬれた草を踏で、一丁も

行くと、最うそこらは態徑の、丁度妾の腰まで位ひな、道も知れぬ程一杯に蔓つた山の登り口。山とは名のみ、低い〳〵丘てある。絞る程兩の袂をしとゞにして、登つた頃は、もう早朝餉の煙の立つが見えた、不圖氣の付たは遙か左り手、疎らに人家の少と見える……あれあれ、青い煙のスーと眞直ぐに立ち上る――あれが、日々妾の覺束なくも、神樣のやうな邪無き敎へ子を導き行く學校の、老いたる校番が炊く――それてあらう。四邊の綠は愈々濃く、無言の裡に、いひ知れぬ活動の韻のふくまれて。

（完）

（雨評）先づ〳〵の文と申すべし。

○夏の夜

駿河　山本倹子

『いとも心地よの夜にて候はずや、暫しの別れとは曰へ、又來ん夏は如何にかと思へば、今宵一夜を共に語りて明さばや。』

『賊に親しき我が君を捨てゝ、獨り都に上らん事、心惜ぅ思へども、此の事はかりは、我が身の爲め家の爲めなれば、止めがたく、さるにも、明日よりは君と別かれて誰れと語らん。』

『妾もさにて候よ』と睦まじげに二人の處女の影、二人とも年の頃は十五六なり。

『はや此處は濵にて候よ。如何に美しき夜に候はずや、一片の雲も浮ばず、さえにさえ、澄みに澄みたる今宵の御空、宛ら銀杏の皮をむきたらんやうに候はずや。』

『あの中天にかゝれる月の光り、さながら大きやかなる薔薇の花の如くなるよ。』

『如何に美しき夜よ、如何に美しき月よ。あはれ、君、彼のさえたる月に向ひて、別れの一曲奏て給はずや。』

『からかひ給ふな、君こそ妾の爲めに一曲を……。』

『否な君こそ……。』　『否な君こそ……。』

『さ申ふとても、つきじ。妾がつたなき葉琶、一人にては心恥かし。君がみ手をも添へて給はば。』

『合奏とよ！』さらば……。

月は益々清く。空は愈々澄み、萬里の空、千里の海、いと麗はしき鏡と云はんか、磨ぎたる如き海面、打ちよする岸の小波もれむたげに、磯邊は更げに更け行きて、今暫し伊豆の御瀬あたりに、二三見えたる漁火も、消ゆるともなく見えずなり行きぬ。

彼れ等の合奏も今や終りぬ。

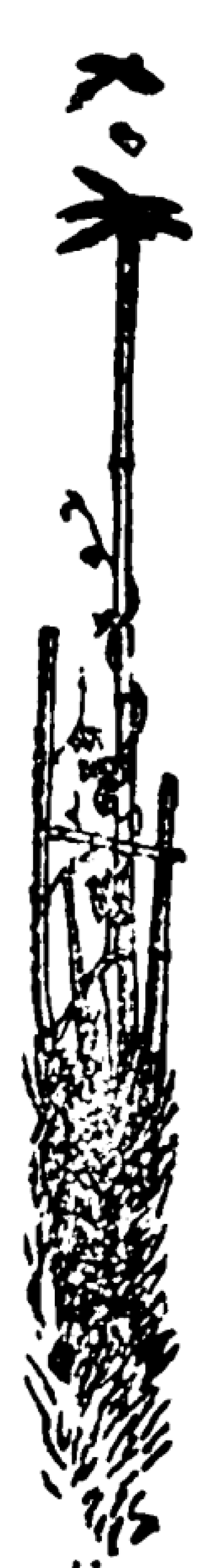
『君よ、月もいとかたむきむ。此處に一夜を語るともつきし。夜氣に浸されぬ中に、家に歸り給はずや。』

『さなり、家に入りて、又語らん。さるにても、今宵の如何に樂しかりし事よ。』

『妾も亦如何に嬉かりし事よ。』

『さるにても、明日よりは……。』

『さなり、君よ、妾も明日よりは……。』



短歌

佐々木信綱選

天

◎

手きづ負ふて還ると聞きて悲しくも
　嬉しくもまた君の待るゝ

群馬縣　吉田きみ子

〔評〕いひざまいまだしけれど、三句以下、まことさる事とおぼゆ。着想の人とことなりて、しかも情深きを採る。

地

折にふれて

越後　千秋子

はらくと櫻花散るこの夕べ
　父に別れて友にわかれて

〔評〕ゆくてに幸多からむ事を祈る。四句は母に別れこの方あはれまさるべきか。

人

神の斧に削りなしけむくしき巖の
　上にさきたる姫百合の花

靜岡縣小笠郡南山村高橋　松岡德子

〔評〕昨年の夏、鹽原に遊びし折のながめ、思ひいでられて

秀逸

故さと

下谷　太田らく子

四年ぶりかへり來りし故郷の
　花かはらねど人老いにけり

〔評〕花の木かげ、思ひ出多かるべし

◎

伯耆　伊藤春子

さみだれが淋しくそゝぐ夕窓に
　やせたる蝶のぬれていこへる

〔評〕結句いこへるはわろし。とまれるといふべし

◎

赤阪　河村ふき子

湯の宿へ通ふ三里の小松原
　夕日なゝめに蟬なきしきる

〔評〕二句の通ふといふ句猶あらばや

折にふれて

越後　太田てつ子

雨晴れて夕日涼しき竹塚に
　君と眺むるあぢさゐの花

〔評〕二句朝日てりそふ下句君と眺めんあやめの花を

○

兄君の柩送りて歸るさに
　小雨そぼ降り杜鵑啼く　信州　都筑薫子

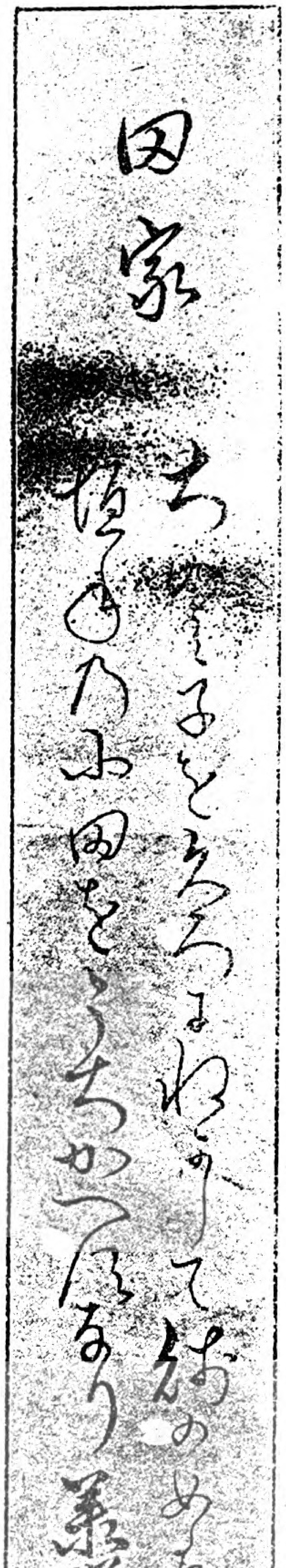
秋の歌の中より

燈籠の火影小暗き萩の扉に
　虫の音ほそく秋の雨ふる　越後　内藤晨子

○

なき母のもののたまはずゆめさめて
　明方さびし片破の月　大阪　田中常子

津輕承昭伯筆



折にふれて

やむ床に歌ほどかへす夏の夕べ
　さみだれほそく卯の花のちる　下野　尾花子

○

障子青くわか葉しげりて虻のなく
　南おもての晝しづかなり　上野　翠山女史

わかれ

雨けぶる刀根川添のおばしまにわれ笛吹きぬ君歌誦しぬ　愛知縣　紫琴女史

春夕　栃木　菅谷とく子

葉櫻のかげより出てゝかはほりの飛ぶ影あはし春の夕暮

秋田家　埼玉　渡邊きく子

さしれほす軒の杉垣もず鳴て秋さびにけり小山田の里

別れ　京橋　早坂さだよ

御いくさに召さるゝと聞きて勇みます兄の門出は泣かじと思へど

月夜散歩　愛知縣　榊原てる子

そゝろ歩く月の夕への涼しさに歸るさ忘るゝ川添の道

○　常陸　芳水子

風鈴のをとささ涼し夕立のはれたる空の夏の夜の月

○　福島　八巻なつ

夕ざれば螢のかげもほのみえて端居すゝしき川つらのやと

○　廣島市　荒木えい

雨ふりて音なふ人もなき庵の枇杷の下かげ夢あはき蝶

折にふれて　釜山　紫園都子

君とわが名ぞらへし星その一つ影見えぬ宵君は來まさず

折にふれて　千葉縣　中野きよ子

別荘の門をよぎればことの音のすみてすゞしき夏の夜の月

折にふれて　赤坂區　茂代子

やきてよと君のたまへとみなさけのこもる玉つさわれいかにせん

○　德島　住友とき子

行水に何をかゑがく青柳の思ひの糸もながく枝垂れて

○　日本橋　植松ひさき

白百合のつゆを硯にそと受けて君へ返しの文したゝめん　早稻田　小島仁子

○

われ今宵螢となりて閨の中に紛ぎれて入らん君捕へませ　武藏　兒島天津子

○

栗飯のうまさ思ひて栗拾ふわれのけなげに母笑み給ふ　日本橋　橋本辰

笛

夢の音洩るゝ籬の外に月淸し若き男子の笛をすさべる　東京　析江子

庭前に我植し花を見て

入草の花はちいさく咲きぬ共我そだてにし者と思へば　栃木　秀子

田植

さみだれに歌もしめりて新娶が一人さびしく早苗植ゑをる　越後　白菊子

友を思ひて

なつかしき君やいかにと忍ぶより袖の時雨の乾くまもなし　四ッ谷　山田錦子

折にふれて

取いでゝ見ればかなしき此寫繪ありし昔を思ひ起して　群馬縣　飯塚みき子

折にふれて

ねがはくば春の一日を蝶となりて君ます里にゆくよしもがな　山梨縣　渡邊その

後悔

一と年を長きものよと思ふまゝにあはれ花さく春はいぬめり　大阪市　杉田孤子

螢

闇の夜に弟の墓たづねんと立ち出てみれば螢むれとぶ　上毛　いくさ子

折にふれて

去年の夏戀しき君と遊びにし綠葉蔭に一人たゝずむ　小石川　細川とし子

窓新竹

春深みうつろふ花の淋しさをとりかへしたる窓の若竹　大阪　松本須磨子

○

日は午なり松原三里あへきくれは木かけ岩角人憩ふなり　大阪東區　田中千枝子

○

あなくるしあなしのぎがた此ころの暑ささくべき山かげもがな　大阪　杉本アイ子

○

夏の旅何よりことに嬉しきは岩間もれいづる清水なりけり

夏の夕　金澤　山上小夜子

宵やぎの糸垂れしげる庭の面に秋をもまたぬ風の涼しき　埼玉　塚田虹露子

○

浦々に釣りする漁の影消えて夕日をそけり岸の高樓　土佐　池川萍花

折にふれて

人しれず憂の涙ぬぐひつゝ笑みをつくろふ心苦しき　高松市　井上雅子

○

牛ひきて歸る土橋のたそがれを御空に一つ星の流るゝ　兵庫縣　白旗濟子

螢

いたづきの床にまよひ來て少女子の魂をさそへりふみづき螢　茨城縣　野口紫峰

月

故き人の死れたる宿の月見ればありし事ども思ひうかびて　大分　佐野玉江子

夏の夜の思ひ

かくれ家の籬のほとり玉しげく螢とぶ夜ぞ物思はしきかな　廣島縣　芳泉子

○

夜每〱宿る聖星の戀の情こりてやこゝに蓮の白露　武州　中村たえ子

○

風淸し月面白しいざ起ちて日頃手なれの小琴取れ妹　安藝國　中村東雲子

○

のがれ行くやみの鷹追ひて暗の雲井に高うからすとびとぶ　兵庫縣　三浦久子

○

夕榮えの雲はいつしか消え失せて三日月すゞし宵若葉山　豐後　梶原幸子

○

塵すての車に花の錦のせて春送るらし黃昏の市　小石川　和田きよし

友に送りて

夢かあらずうつゝとなりぬ宵のゆめさむれば嬉れし君がたまづさ　群馬縣　をみなへし

○

花に舞ふ胡蝶と共に遊びなん錦織りなす花の春野に　群馬縣　荻野優子

○

月を見て叉月を見て思ふかな失せにし兒は今や何處にと　常陸　酒葉しづく

時雨して軒の雫の玉すだれふき入る風のさても涼しき

折にふれて　群馬　里の夕暮

はるかなる森にてくしき音するは春の女神の小琴なるらん

別れ　岩代　芳子

わかれてはまたあふせなば松かはの月すむ里に数ぞよまなん

五月雨晴　神奈川縣小野雪枝女史

五月雨ははや晴わたる池の面の菖蒲かをりて夕風の吹く

夕ぐれ　埼玉縣　秀子

むら里の小雨淋しき夕ぐれを高嶺おろしの松風の音

○　陸前保志とく子

ゆりかごにうまゐせる子の愛らしうて神ならねどもたふとかりけり

浦夏月　上總鈴木舟波

樺山伯爵令夫人常子筆



潮あみて今まで人の遊びつる浦の遠あさ月になりゆく

朝新樹　千葉縣紅顔子

今朝見れば春は流れて行水にうつる若葉の影の涼しさ

○　南總實川詰子

夏の日の夕べ涼しく黄昏て遠くきえ行く柴笛の聲

○　小石川鈴木敏子

花に歌ふ小とりのこゑに夢さめて今見し君をほゝゑみにけり

折りにふれて　小石川大石久子

さ夜深て月の光りも沈みかち寐れぬもつらし物思ふ身は

○　淡路紅桃女史

霧深きびわの湖分けて行く舟や浮世の外に行くらむ

○　神戸高井菊江

ひろかほにやさしく蝶もはれつるべくむ人絶えし浦の靜けさ

○　牛込高橋まき子

旅にして見るぞうたてき花茨故郷の路にさも似たる哉

○　埼玉縣山下さと子

露しげき夏のあしたに咲き出でし赤あさがほの色うつくしき

撫子　廣島和知廣子

むらさめのつゆのなごりか夕風に玉をまろばす撫子のはな

○　上毛松村秀子

月の國に渡りて行きて兎等に餅をばつかせ吾れ食はなんか

夏月　下谷杉田繁子

綾瀬川きしべのあしのふしのまもやどらですぐるみじかよの月

○　盛岡恒子

薄ものゝなびくかまゝに螢追ふ若き人みし夕月夜かな

折にふれて　石見國杉浦翠子

なつかしや面ざし似たる順禮の子逝きし我子を七つとかぞふ

○　上毛美津多満

泉水の辺に茂るくさむらにいと涼しげに松虫のなく

○　岩代千葉砂子

いや深き君が情の身にしみて胸にあふるゝおのが思ひは

男の子　茨城縣近津白菊

皇軍の勝つたび毎にすこやかにふとりてそだつ我が子愛しき
甲斐　武井奐津子

夏の日出征兵士を思ひて
夏の日を如何に過させ給ふらん來る年毎に思ひますなり
岩代　松翠女

○
うつし繪の君かすがたを見る毎に戀しさいとゞ增さりけるかな
大阪　品部幸枝

○
前栽の繁みに夕べ水まきて月まつほどの興多きかな
大阪　田川稍

○
松一本ばさとかげさす池殿に笛の音すみて月傾きぬ
麹町區　桂花

出京の前夜
あすの日のたゝ嬉しさにいく度か地圖くりひろげォッチ眺めて
靜岡　たか子

夕月
雨さりて呉竹ゆらぐ夕まぐれ月をかすむるかはほりのかげ
相模　山口春子

夕涼
へだてなき友がいほりを訪づれて今し海邊の夕涼みかな
肥前　辻川はる子

なき兄を思ひて
なき兄の手植の榊茂れども今は手向の花となりしか
小石川　服部けは子

○
朝夕を茜畑のつぢかひに思ひもあらず夏のはつ風
文子

閨
病む母のみとりにふけし閨の中藥の香高うたゝ雨の音
豊後　矢野靜香

折にふれて
なになれば常は興ずる我が笛の今宵は愁ひに泌みて泣かるゝ
長崎　大久保烈子

折にふれて
思ふこと筆にまかせて書く折りは長き卷紙短くぞなる
宇都宮　增田いつ子

○
故郷のたよりまつ夜の月ふけて遠きみ空に鴈鳴きわたる
宇陽　しののめ女史

歸郷
布ごろもうらはづかしく歸る身を錦きてとや人の待つらむ
豊後　小池ちよ子

師の君を思ひて
ひんがしの師の君こひし朝夕にたかき御聲を聞く心地して
富山　ちすい子

山吹
池水に影をうつして山吹の峰よりこぼれ今さかりなり
名古屋　中平文子

○
詩集とりて欄干ちかく立し時躑躅にしろく小雨そぼりぬ
廣島縣　藤本俊子

折にふれて
たちのぼる朝げの煙たなびきてえがきし事のけしきなりけり
愛知縣　田島周子

夏燈
其のまゝに影そしらめる涼しさの月にそむけしまとのともし火
岐阜　江春愛子

勝鬨
空も海もゆるぐとばかり對馬沖どよめきわたる勝鬨の聲
磐田　鈴木智

戀
きぬ〴〵の戀ならねども庭鳥のなきて別るゝ横雲の袖
佐世保　横山愛子

○
北に見し四とさの春は若かりき嫁ぎし君よたゞ幸あれな
神田　舟木久子

夕顔
歸り見れば荒れに荒れたる竹垣に今を盛りの夕顔の花
麹町　重田靜子

卯の花
みいくさに主の君は召されゆきて咲くや卯の花雨のひろ庭
越後　藤本とめ

○
廻廊に若き御僧の影消えて緋桃散るなれ春の夕ぐれ
下總　中村由

○
この月をこの松の本のこの枝に誓しとゞめて君を待ちまさん
大阪市　八重子

兄の戰死せし日に
去年の今日斃れし兄の偲はれて夏なほさむき朝風ぞ吹く
奈良縣　葛城しづ子

螢
うち集ひ聲ふりたつるをとめ子に光あびせてとぶ螢かな
下總　小島芳子

○
戰國の田植たすきは赤けれど寫るわが顔やゝやせにけり
備後　市岡まさ子

折にふれて
五月雨や窓うつせみの憂き思ひ君に語らで山はとぎす
神奈川　佐久間芳子

梅雨

縫ひさしのひとへさ衣ぬひ終へて湖月ひもとくさみだれのまど

ある君に代りて　牛込區　三上得女

たらちねの御親の夢や今いかにふけ行く夜半の月まどかにて

夏の夕　長野　飯塚ぎん子

さりげなく夕立はれて虹のわのうするゝ空にいりひにほへる

○　高崎市　狩野美枝子

はるゝかと見ればまたふるさみだれの空さだめなき昨日けふかな

蝶遊花　本郷區　鴇澤良方子

人訪はぬ都の櫻に來る蝶は都の花の歸へりなるらん

早苗　宇都宮　金澤保子

早乙女かいさみて唱ふ聲きけはあきの實のりも知られけるかな

更衣　宇都宮市金澤保子

東久世通禧伯筆



きならしゝ綿の衣も今日のみを思へはつらき心地こそすれ

夕立　宇都宮市金澤保子

なる神の音は雲井と思ふまに早わか宿も夕立の雨

旅先より　神田區　山本富美子

旅立ちて日數は未だ淺けれど數積りゆく君を戀ふ歌

暮春　東京　望月たかれ

ちる花をさそひつくして夕くれの山里さひし春雨のそら

月　紀伊　木村いて

其川も其の夜の月も變られど君世を去りて我は老いにけり

○　備後　長谷川みどり

つきさえて草木も眠る此夜半に淋しさそへて梟の鳴く

○　安藝　翠月女史

月影は松にかゝりて夜はふけて枕邊寒く雁なきわたる

○　伊豫　吉田須美子

草深き賤山里も若葉して軒端に近く時鳥啼く

蛙　秋田　さゆり女

さなぶりのうたげもはてゝ人ちりて夕のあめに蛙なくなり

紫陽花　下總　伊佐岡澄子

開きなば君にさゝげん紫陽花のおもひは仇か風にみだれて

秋の歌の中より　越後　内藤翠夢

反古張りの窓は淋しう開かれて萩ふく風にほつれ毛寒き（舊作）

○　在福岡　さき子

名も花も浮世のものはしら露の風を待ち間のかざしなりけり

卯花　神戸　上田輝子

時ならぬゆきかとばかり思ふまで枝もたわゝに咲ける卯花

螢　千葉縣　すみれ女史

夕風になびく柳のかげ見えて川邊すゞしく螢とぶなり

寧齋氏をいたみて　愛知縣　平野周子

麗しき詩歌の國の花をこひて歌まき持て逝し君かも

櫻を手折りて友の許へ　伊豫國　胡蝶女

君みよとたづれて折れる櫻花ちりにし色と思はさらなむ

○　駿河　石神喜惠子

ほの暗きあかしのもとゝ糸とれる母のおもわの老いませるかな　尾張國　犬飼平子

郭公

夕月夜ねられぬ夜半の手枕にひとこゑたかくほとゝきすなく　滋賀縣　橘富美子

月前蛙

なるこひく里の童のあとたえておほろ月夜に蛙なくなり　羽後國　鈴木しゆん

斥候

こひしさに今宵はしのぶわれならずなくなわがこま今しばしだに　陸前國　藤野はな

亡き友を偲びて

君逝きて机の上の淋しさよとへど答へぬうつしゑと文　秋田縣　松田欧子

述懐

世の中は何を現とさしていはん花も紅葉もあはれひとゞき　茨城縣　井坂治子

夏

空晴れて暑さゝけやる方もなき折しも盛る夕立の降る　神田紫葉女史

○

くれなゐの紐頬にじむ田植笠かの日かの里かの里たゞなつかしき　鹿兒島縣　齋藤ひで

樹陰夏月

むら／＼にもりくる影の凉しきは木の間の月に風やふくらん　豐後國　衛藤春子

うつしゑ

手すさびに友のうつしゑ取出てゝ又今更になつかしき哉　栃木縣　淺野しげる

吉野山

吉野山花の昔を思ひ出て葉櫻かくれほとゝきす啼く　千葉縣　小川文子

○

家を出て十年今に樂ならず哀れ今年も秋暮れんとす　越後國　小林菊子

祝捷

樂の音のいさましかりし高樓は凉しくなりて夜も明けにけり　德島市　織村蕗芽

○

林雨のなごり凉しき橋はの上に夏をよそなる夕風のおと　大阪市　垂柳女史

蓮

皆人は愛づれと老の我身にはかなしき蓮の花の露かな　美濃　碓井邦子

○

山寺の池のほとりの藤の花鯉浮き飛びて眞晝靜けき　四備　紫明子

○

まどひては悟りさとりてまたまよひはてしなき世と我はさとりぬ　伊豫　八重子

螢

たえかねて妻戸をあけて欄によれば螢ながれて消えんとせず　巣鴨村　佐藤露子

○

五月雨に憂き知らぬ身も偲はれてはじめてもろき吾が涙かな　丹波國　柳原いか

○

春夏にかゝれる岸のふじ波はいづれ劣らぬ色にさくらん　千葉縣　榎本志津子

○

漕ぎ下る小舟かすみて青柳の堤一すぢ小雨そぼふる　常陸　滑川止米子

○

桑摘みの少女子一人たゝずみて暮れゆく夕べ美しきかも　若狹國　井上艶子

○

白薔薇の花の香爽う室にみちて戀に悶えの詩人若き　大阪　工藤鈴子

○

銃さげて細き畦道たどり來れば蓮花つむ子は妹うとにして　越前國　藤井美代子

○

遠近の木々の瑞枝淡く濃く心地よげなるながめなりけり　千葉縣　鵜澤花月子

河上落花

吉野川峰の櫻のうつりきて瀬々の埋木花咲にけり　埼玉縣　岩井あい子

懷古

春風に駒いなゝきて若武者の鎧の袖に花ぞ散りきぬ　埼玉　渡邉きく

鷄

いへつ鳥曙告げて鳴きわたる勤めぬ我ぞ愚なりける　小石川區杉浦なでしこ

折にふれて

いさきよく花のことくにちりませとおくりし文のこゝろしきかな　大阪市　西部むめ子

○

今ははやかたみに殘るいとし子のちゝ戀ふほどになりにけるかな　能登　池野いさみ子

○

君が家は清き川ぞひ月淡し今夕暮れて葉櫻そよぐ　千葉縣　小川申子

○

渡守の螢火細き夕まぐれ岸の柳に螢飛びとぶ
○　　　　上總　白井賢子
さらぬだにつれなき夢の草枕醒めてさびしき片われの月
蒲田の菖蒲園にて　　　　橫濱　寺田光子
蒲田にはまだ早けれど中々に人靜かなるがうれしかりけり
折にふれて　　　　靜岡縣　ふさ子
きえのころ此かたわれの月かげを何所の里に君見ますらむ
○　　　　信濃　佐々木紫柳子
とこやみに夢よりさめし幼子の枕邊近く朝顔咲きぬ
薔薇　　　　山口縣　佐々木菊子
蕾ながら友の許にや送らまし手折るうばらの花の一もと
春旅　　　　豐後　廣瀨あき
春旅に行手證みて道遊し嵩手とれもし心あらば
雨中の菫　　　　群馬縣　樋口とき子
降りしきる雨もかすみて春の野の花の菫は萠てけるかな
遠征の武夫　　　　大阪　つゆ子
矛とりて敵に向へる束の間も二世を契りし君忍ばるゝ
鏡　　　　神戶　輝月女
朝夕に寫す心はくもりなきかゞみのおもにあらはれにけり
月　　　　千葉縣　揚谷女史
二つなき月の光を見る人の言葉の花や千々に咲くらん
折にふれて　　　　芝　潁川とき子



大河內子爵夫人
圖子筆
（德川慶喜公女）

雨はれて川べに立てる靑柳の下に友よぶ白鷺の聲
○　　　　新潟縣　鍋門すみ子
ながき年別れし友の歸り來て共に眺むる故鄕の月
月　　　　紀伊　木村ひて代
燈火は風に消されて高殿の奥まで月になりにけるかな
○　　　　陸中　黒澤美江子
思ふまじ見まじとすれどなか〳〵にもの思はする君が繪姿
○　　　　三河　霞淺女史
朧夜を薫ゆる湯の香に醉ひまして欄に月見る君面若さ
夏　　　　京都　磯野美紀子
曉の女が菅の小笠をかたむけてさなへを植うる時は來にけり
旅行日記の中に　　　　石見國　めぐみ
斷腸の思想を吹くか里の子の草笛悲し旅の欄干
○　　　　兵庫　柳田のぶ子
太刀とりて詩琴をもらす人わかう甲板上靑く月さゆる夜半
○　　　　奈良　竹田菫子
ほとゝぎす鳴く一聲に駒とめぬ今宵打入る武夫三十
不如歸　　　　筑前　村山枝夢
ほとゝぎすなくこゑ每に夢さめて世になき妻の怨みとぞ聞く
○　　　　名古屋　玉置廣子
おもひあまり磯邊の砂にかく歌をけし行く浪のこゝろありけよ
螢　　　　伊豫　曾根岩子

ぬば玉の闇路をひとりさまよへば螢おひ行く乙女子みたり

○　札幌　杉山よめな女史

などかくは花につれなき春雨のなとゝひ降りてけふもまたふる

夏　八王子　永瀬らく

のどかなる春はいつしかくれにけりひとしほこひし山と小川と

我詩の當選せしを喜びて　金澤　大地波子

何となく只何となくうれしくてまたもひもとき我歌誦しぬ

折にふれて　伊勢國　松本しげ子

いひしらぬ惑にうたれて淚もやらぬしつけき夜半をとふほたろかな

○　長門　繩田愛子

海士の子等さりてあとなき夕渚舟唄たかく鴎飛ぶなり

若竹　栃木縣　高橋はな子

おのづから直きは古き習ひとて唯一筋にのびる若竹

郭公　千葉縣　原田千代子

郭公聞つと告し柴人を尋ぬる山のしをりにぞせむ

水邊柳　千葉縣　關はな子

緑たるゝ岸の柳のかげ見れば水の底にも春風ぞふく

軍人　長野　川邊千枝子

御軍に召されて行きしますらをは出てし湊にいつ歸るらん

○　群馬縣　今井房子

夏姫の小さき息吹やふれにけむ朝つゆけき白百合の花

○　上毛　安藤女史

はゝ君が一夜をいれてぬひくれしこの夏衣今ぞきにける

祝捷に日の丸形のあんどん行列　茨城縣　倉金とく

名をしみ命惜まぬ武夫の赤き心を照らすともしび

蓮　福井縣　高柴小靜

女院の夏行し給ふ大寺の池の蓮の朝月夜かな

夕　金澤　森井せき子

彦爺か歌はかすかに夕くれてまき場のあたり牛の聲きく

詠史　神戸　宮本瀧子

捧げもつ御衣の袖に宿りけむ筑紫の海の有明の中

○　豐前　大竹花子

あやふみつ池のほとりの花菖蒲きる手弱女のはきもあらはに

月夜　大和　橋かほる

花賣りが身の上ばなしうけうりて君泣かせたりあたら月夜を

薄暮卯花　群馬縣　樋口猛子

夕月の影は何時しか暗そめて時を笑顔にさける卯の花

桑摘女　上毛　梅園女史

桑みつる籠を脊負ひてつとひゆく里の少女の俚歌おもしろき

○　鹿兒島　ゆき江

小夜ふけて小笹ふる子の影もなし螢むれとふ川つらの里

怠惰なる友に　茨城縣　高野岸子

吾れのやの前の小川の水車うまず廻りてめぐりてうまず

○　長野　安孫子天紘子

春や二千野に呼ぶ人の聲絶えて花みな白きユダヤの夕べ

○　愛知縣　平野樂子

行く春を思に惱む君のこと雨に撲れし白藤の花

夏の歌　淺草　松浦綾子

庭の面に咲姫百合の香をしたふ蝶を子猫のおひ巡るなり

○　富山　櫻木ひさ子

花も見つ水も渉りつ春の野をいつしか過ぎて君を訪ふ

○　大分縣　西萩子

さと音して水に落ちたる白百合にひ鯉の浮きて月に笑みぬる

折にふれて　讃岐　菫子

更けて行く大路靜かに雨やみてつぢうら賣の聲かすかなり

浦の夕立　名古屋　玉置廣

みるが中に淡路島山かげ消えて夕立さわぐ須磨の浦波

卯の花　小倉市　池永きよ子

月夜はにそれともわかす卯の花の咲きみたれたる草のいほりに

未聞時鳥　日本橋　橋本はな子

しのひ音もありやとかへし夏ころもうらみはあらぬ山ほとゝきす

寄竹　鳥取　上山千重子

ゆがみなく思ひのまゝにのびつるはいとも目出たき今年竹かな
首夏夕　泉州　天堀美涙子
打ち續く蔘畑三里たそがれて靑葉の中に鄙歌の聲
水邊山吹　長門　大橋勢以
行く水に岸の山吹影見えず花に棹さす春の舟人
夏の夕　美濃　宮部俊子
あちこちに螢飛びかふ夕川を琴の音のせて下る小さ舟
夏の夜　美濃　大野秀枝
夏の夜の凉けき小橋に佇めば肌打つ風のいと心地よき
待郭公　香川縣　妹尾定美子
ほとゝきすなく夜をまちて玉章を都のともにおくらまほしき
○
くれそむる淺瀬に立てる鮎釣りの材かとまこふ夕の凉しさ
和歌山縣　森本千代子
摘茶　尾張　星月子
打むれて摘むや少女のほゝ笑みに茶畑三里歌うるはしき
○　伊豆國　古見彩子
五月雨の小やみをまちてたそがれし墓の樒の螢さびしき
○　神田　柏木常磐子
折りさしゝ君がかき根の玉椿文机の上に落ちてくづるゝ
○　上毛　河内とめ子
雨かすみ空もいつしか暮れはてゝあたり寂しく蛙なくなり
吉野山にて　奈良縣　かほる子
散る花をいさぎよしとて見あげたる十字の白衣ことに氣高し
歸鄕　相模　川崎靜江
かやり火の下に歸省の物語り未だつきなくに時鳥なく
○　伊豫　柿熊子
夢にて清國の帝にまみへしとて
願ふともかたき謁を唐國の帝の夢にあらはしましぬ
螢　和歌山　山東香子
露しげき稲田の畔をひとりゆけば靑き夜風にほたる流るゝ
初夏　長門　梅田糸子

ぬぎ更へし衣手輕しこの夕べ須磨の浦あたりさまひて見む
折にふれて　姫路　中川しほり
ひやゝけき世のもてなしを歎くにも先づたらちねの母ぞ戀しき
○　岐阜縣　千葉露子
雨の夕風の朝に人知れず我が袖ぬらす戀の道哉
○　上毛　田所若葉女史
たそがれて松の木影に彳みて君のかなづる琴の音を聞く
日本刀　紀伊國　矢田部つれ子
あらわしの羽ふきなにそとものゝふの太刀風はやみうちかへしけむ
○　名古屋　佐久間てい
亡き父の手植の白百合咲きにけり思出多き春の夕べに
夕立　伊豆國　加藤滔子
晴れ渡る空に凉風通はせて玉だれかくる夕顔の宿
春の夜　雲州　白すみれ
おぼろ月光かすかにふけゆきてわかき血汐はなかれなんとす
彌彥山へ旅行のとき　新潟縣　古澤みさほ
鳥うたひ花咲き匂ふ野に出てゝ心長閑に日を暮しつゝ
夏の月　福岡市　高松ひで代
雨晴れて露散る庭の木の間よりもれくる月のかげのさやけき
○　兵庫　柳田のぶ子
秋高く馬肥ゆ頃を君征きてひとりはしゐに月を見る哉
○　福岡縣　牧をと子
破れ寺に尼が誦經の聲絶えて庭の牡丹の雨にくづるゝ
○　駿河　山本とし子
斯くあらん斯くこそあらめ敵の艦擊たれつ沈みてはてぬ
月　埼玉　ほたる女
つはものが夜營のゆめや千々ならしみ空にあはき月かげを見て
月　上根岸　さかへ子
侍ちわびし君歸りまさず小夜ふけて思ひ出て多き夜半の月かな

抒情文

日本女子大學教授　鹽井文學士選

天

○春の野（若き耕女となりて）

伊豆國田方郡三島町字長谷　加藤溜子

ボカ〳〵と暖かな、春風に身を任せて、くたびれた鍬の手をとめて、恍惚と見るともなしに、自然の風景を眺めて居ると、天國に誘はれたやうに、樣々の嬉しい事、面白い事樂しい事、愉快な事が、一時に湧いてくる。そして「この廣い世界に、私程幸福な者は、あるまい」胸のどつかで、こういふ聲がする。かと思ふと、なほ更嬉しく、樂しうて〳〵……。

おゝ、彼處へ、立派な袴をつけて、絹の蝙蝠傘をさして、車に乘つて行くあの人でも、内輪が火の車であつて見れば、ハテ何が嬉しかろう。秋のは成る程、品は粗末な木綿ではあるけれども、御母さんの暖かな情け深い心が、こもつてゐるのだ。チリン〳〵……オヤ、自轉車だ。あんなに紳士然としては行くが、あれで、不義理な事もすれば、無慈悲な事もするのだろう。あゝ、實に世の中は樣々だ。身にかなふ程の仕事には、人には負けず精出して、無理な慾には、一切見向きもせねば、誰に恨まれるわけもなし、不義理な事をした覺えはなし、不足と云ふ事は何もない心安さ。雲間を凌ぐ玉殿も、萬里に亘る黄金のうてなにでも、雨も降れば風も吹く、蝸牛の殼の樣な伏屋でも、御日樣はお照らしなさる、御月樣にもすてられず、花も咲けば、鳥もうたふ、あゝ面白い世の中だ。

浦々と立ちのぼる霞に包まれて、すみれや、土筆を摘みながら、如何にも樂しさうに遊んで居る、アノ小兒等でも、ゆく〳〵多少の苦みはあるであろう。けれども、私は今になるまでも、何の苦勞もない。アレ〳〵高く青空に、うたふて居る、アノ、告天子も、よそ目には、さながら嬉しさうに見えてはゐるが、あれでも何か、思ひはあるであらう。花に眠り、露に醉ひ、色美しう鏤められた、羽のかろらかに、飛び廻つて居る蝴蝶も、何が羨ましい。上を見れば、限りもない。下にも亦下はある。そして、多少の苦勞は、誰れでもあ

る。かう思へば、實に私は幸福者よ。かう肥料もやり、かうして土をかけてやれば、麥は自然とのびてくる、豌豆は、花咲いて、實が出來る。同じ色でも、汚れた世間の黄金よりは、菜の花の方がヨッポト美しい。かう私の顔の向く處は、それ、山も笑顔で、櫻も桃も笑うて居る。ほんとに私は幸福者よ。

オヽ、もう大分休息んだわ。ドレ〳〵仕事にかゝらうか。けれども、世間の人々は、私が今の身の上を、あゝ何と、見てゐるであらう。

（両評）思想に奇抜なるふしあるにあらねど、優美なる樂天の趣味はあり。筆よくその想に伴ひて自然の筆致を得たり。

地

○五月雨

静岡縣小笠郡南山村　松下德子

青梅の實若葉の蔭に肥えて、夕風そよ〳〵と渡る時白藤の花、冷やかに地上に落ちしも、夢となりぬ。杜若の早きは萎み初めて、美しき今朝の雨に、牡丹も崩れぬ。芍藥も散りぬ。薄暗き迄窓を掩へる新綠、天蓋の如き藤の傘、紫の筆の穂にも似たる菖蒲の蕾――あゝ五月雨は將に來らむとすなり、田園の友、此の頃消息を洩して曰く、

「――豌豆の花盛りなり、短冊形の苗代、青色水を出づること五寸。小川の邊り、螢も飛べり。君よ、新綠影裡昨夜杜鵑の聲を聽く。オヽ、此の雨催ひの風、五月雨は將に來るべし」と。

吾の記憶は新になれり。まこと、卯の花くだし、初夏の新天地を洗うて、月の夜に水鷄の戸を叩くを聞き、軈て曉の闇に杜鵑の初音を洩れ聽く頃、五月雨は靜かに音づれ來るなり。而して、將に巣籠らむとする蠶に桑を與ふべく、五月雨を濡れちる葉を軒端につりて乾すと度々なりしよ。

余は、五月雨を懷ふ毎に、湖畔の詩趣を追懷するを禁ずる能はず。余れ嘗て細雨肅々として、新衣冷かなるの日、恍然として浦の湖のほとりに立ちしとありき。實にや、黄梅時節家々雨、湖畔一帶模糊の裡に包まれて、右を望めば清洲が濱、土浦の邊、淡として無からむと欲し、左を顧みれば、聖靈、湖來の空、濛として夢の如し。獨り紫匂ふ富士は朦朧たる優姿を、影よりも

淡く、有耶無耶の空に現れしめぬ。薄墨も一刷毛撫でたる雨中の湖上、夢幻より出でゝ夢幻に入るが如き白帆の影。此方なる松原がくれ、雨より出でゝ雨に入る行人の姿。今猶髣髴として、眼前に浮び來るが如きを覺ゆ。

來れ、五月雨よ。而して余れをして、思ふがまゝに歌しめよ。思ふがまゝに、その詩美をたゝへしめよ。しかもわが病勢やゝ募り來つ、余れは田園に靜養すべく餘儀なくせられたるを。

（兩評）何んとなう詩歌の掬すべきものあり。地とす

人

○雲のなげき

和歌山縣海草郡和佐村　木村ひで代

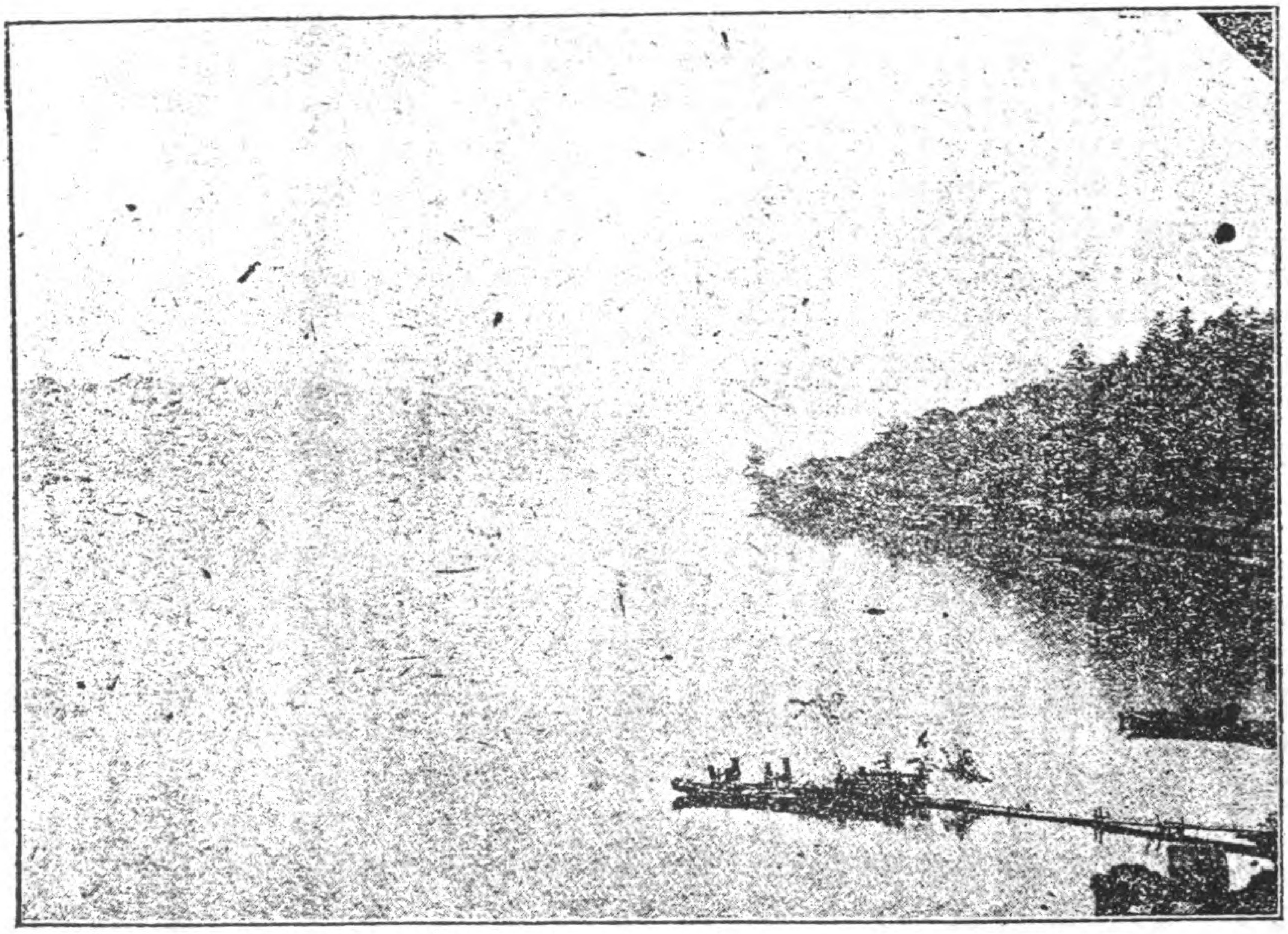
高き富士の峰も、一條の横雲なかりせば、其の高さを減ずること、若干ぞ。廣き琵琶の湖も、そこに模糊たる一帶の淡雲なかりせば、其の廣さを挾むること、そも若干ぞ。

遠き神代、尊き命に仕へ葦原に下りしより、世々に薄らぎ行く人情は、吾等の定まれる住居もなくて逍遥ふも、夜々に泣く涙の露をも想ひみて、只管に罵るこそ、あはれ悲しくも怨めしき極みなれ。思ひ起せば、去年、はや春の色も消えんとして名殘り深きに、出づともなくて野邊に逍遥ひ、そこはかとなく樂しむ中に、あゝ忌はしき五月雨かなと罵られぬ。かくして、春は吾等の悲しき胸を想ひみて、消え逝きて、夏とはなりぬ。思ひ依らぬは人の心ぞ。何時の間にか變りけむ、厭ひ厭ひし雨を、ほしほしとて、朝な夕なに呼びのゝしるとは、如何なる理ぞや。吾は心ならずも降り下らぬ。されど、あはれ、秋の紅葉と共に、又しても人の心は變りぬるか。霖雨〳〵と呼びのゝしりぬ。

されど、吾は不甲斐なくも留まりて、夜な〳〵空逍遥ひぬ。又も人は、あゝきたなき雲よ、眞澄の月を破ふなど、あゝ、人はかく迄無情なるか。吾れに若し一の手あらんか、打ち散らして胸を晴さんを。されど、如何せん、思ふに任せぬ身なるを。やるせなき身の置場なく、靜けき山里に歸りしに、こゝも亦いつか濁りに染みけん、罵しる聲いと喧し。賴む里迄濁りて、せんすべなきまゝ、あちこちの空流るれば、又しも人は云ひぬ、曇れば晴れ晴るれば曇り、賴みなき秋雲よと、

あゝ如何せん、痛めど、悶せど。

思へば、我れ、うら〳〵と霞む春の夜、月に影して梅花の香、櫻花の錦色を、一入まさしめぬ。越路に急ぐ、群に後れし孤雁を、我が身の邊に匿して、無限に詩趣を人に與へき。燃ゆるが如き暑さに、動物は死に草木は枯れ、世界は丸く大なる團子ならんとせしを、いきがへらしめしたるも吾なりき。寒さ嚴しく、終日庵にたれ籠めて、氣も心もうちふさぎし折り、鵝毛も如く輕く淡く飛び散りて、時ならぬ花を咲かして、慰めしも、我が藝なりき。夕陽沒して蒼々たる夕空の邊、あるは眠れるが如く、



日光中禪寺湖

虎の怒れるが如く、千態萬狀殆ど名狀すべからざる絕景、松なき松島を顯しゝも、我がわざなりき。されど、花よりも月よりも愛せらるべき吾は、かへりて惡まれて、多くの功も、皆泡となりにき。

あゝ、吾は、情なく仁なく、冷かなる俗人を、頼まんとせしは痴なりき。過ちなりき、吾は唯、心珠の如き、長へに濁らざる、詩人を頼むべきなるに。

（雨評）嘆くをやめよ、雲。汝がなげきは、優美なる此の詩人の筆によりて。あはれに知られたるを。人とす。

秀逸

○歸鄕

大坂高津十番町
谷澤竹次郎方　竹中春江

○女學校卒業の光榮を負ひて歸りゆく我を乘せたる汽車は、今しも我が故鄕に近づきぬ。幼ななじみの里、綠り滴る林の端に、ほの見ゆれば、心そゞろ躍りたち、黑烟勇ましく走る汽車も尙遲き心地す。お、お、今、其の勞ゆるみぬと思べば、早や驛につきし也。

金剛山の頂に殘りし夕陽も、今は入り終えて、其のほとり、沸き立つ五彩の雲波は、華かに映じつ、端唄ふし面白く歸り行く農夫、姉樣被りにいさましく裳からげて村の小道を行く乙女、草を背に夕霧かくれ行く小童、さてははるかの村里にかしぎの烟立ち昇る樣、なつかしとも今更に淸く見られて、實に詩人ならんには、しばしにて、我れは靜間川の畔にきぬ。潺々たる淸き流れ、今も昔に變らじよ。五年前、親しき里を後に戀しき家を去り、都に上らむとせる時、靜枝の君と共に泣きしは……おゝ此あたりよ。其の時、一尺餘りなりし若柳は、世の風雪をしのぎて、我が身の丈程にのびたり。さるに、あはれ、そが長五尺にならば、又會はむと約し給ひし彼の君は、……あゝ今や世に在まさゞるなり。都の空に日々、君健かなれと祈りしを。さても、君は我れとの約を忘れ給ひしか。柳は夕風にかや〳〵とさゝやきて、共にあはれを語らん如。かすかに響く夕鐘の音……おゝ如何にあはれなるよ。

悄然、川の小橋を渡れば、綠りの小道は我が故里に通ぜり。おゝ、此の畔よ、八重子の君と若采つみしところ。月淸く風凉しき秋の夜「行く春」の賦を虫の聲に合せり、延代の君とそゞろ步きし所。

今、八重子の君は遠き里に嫁ぎ給ひ、延代の君は父母と共に東の都に移り住み給ひしとか。短き五年の間にも、世の遷り易きの多き事よ。噫昔の親しき友、今は四方に散りぬ。あはれ、明日より誰れをか友とせむ。

おゝ、早や我が家の背戶にきぬ。父上兄上母上が我が歸りを喞し給へる聲聞ゆ。うれしや、今より我れは又樂しき故家に暮さんなりと數步は夢現。

（雨評）一步一感、なつかしき歸鄕の情景あらはれたりと申すべし。

○磯のわかれ

(一)

赤阪新町五丁目四十一　河村ふき子

あゝ砂白うして松青き桂が濱邊、かつては此處に、君と回り合ひて、喜の涙に袖絞りしが、今宵は情あつき君に送られ、此の身を遠く去らむとす、あはれ果敢なき人の運命よ。

愛の眼に見かへれば、紫の夕霧はうすく、遠の海に垂れこめて、暮れ行く沖に、孤帆の浮ぶも、さびし。

(二)

あゝ思へば、三年は、餘りに短かりき。月明らかなる、かの夜、靜かに迫る玉藻の薫り慕ひつゝ、此の濱邊に始めて君と睦びてよりは、胸の血潮くしうも搖ぎて、甲岩の上、あるは磯馴の松か根のほとり、共に世を語り、人を觀じ、時に妾が胸を告げまゐらせて、君の胸臆をきくも、いと樂しかりしが……。

あはれ、思へば、果敢なきは人の運命よ。

(三)

黄昏の色はやゝに迫り來りて、白き砂、青き松、皆一樣に灰色の靄の中に包まれつゝ、若蘆の間より見ゆる、漁家の灯またゝきて、和ぎたる海原には孤帆の影だにも無し。

をゝ、別るべき時は來たれるなり、

「さらば、君よ、暫しの間は見るを得ざれど……」

妾は涙に塞る喉を絞りて、かく云ひぬ。

「をゝ、幸くてあれ、さらば君！」

「さらば……」

涙と共に、あつき手と手は放たれぬ。

(四)

あゝ妾今、この懷かしき磯邊を去りて、何日かまた、砂白く松青き桂か濱邊に、君と語らはん、思へば果敢なき別れなるかな。

涙にくもる眼あげて、ふと見かへれば、暮れ行く磯邊に、朧ろげながら、妾が後ろ姿を見送り給ふは、今お別申しゝ君か、をゝ、幽かに響く口笛の節の亂れよ。

(雨評) なごりは、天に海に限りなき磯の別れに候かな。

○故郷

鳥取市鍛治町五七　上山千重子

故郷といふ字は、見もし聞きもし書きもするが、扨て、其の字の眞味を究めぬ私には、別になつかしうもつら

くも感じないが、いよ〳〵其の眞味を會得する機會が來た。それは外ではない、近日東都に遊學する事となつたので。前途の希望を夢見つゝ、ひたすらあこがれた其の日は、明日とまで接近した。さすがに胸がときめいて、起つたり居たり、なつかしい茂子樣から御餞別とかいうて、桃色の絹ハンカチーフに「またあふ日まで主よともなひ給へ」と讃美歌の一節、うす墨句はしてしるされたるを、おめぐみ下さつた時、思はずも熱い涙がはら〳〵膝頭におちた、うやむやの内に日は暮れて、遂に出發の當日となつた。何となく涙のみこぼれて、門出を祝うて下さる御杯を持つた手が、あやしうもふるへる、さて、幾十輛の車をきしらせて、市街はづれの松原まで來た。此處で下車して、御見送り下さつた人々に、御あいさつ申上げた時の心、生れてからはじめてのつらさであつた。折りしも、小雨がしと〳〵煙の樣に降り出した。ア、之から、叔父樣と二人で、あたゝかき父母の膝下を離れて、初旅の途につくのである、我が心は千々にみだれて、うしろ髮引かれる樣。やがて、松原がかすみ、市街がかくれ、茂子樣と遊びなれた久松山も、うすもやに隔てられた其の時、ア、私は初めて故郷の味を知つたので……。夕暮やどりについて、おばしまによりつゝ、片破月を仰いだ感、しみ〳〵と指もて掌に、故郷！故山の空など書した。オ、月よ、心あらば彼方の樣をうつせ。

（雨評）はじめて感ぜられたる故郷なつかしの眞味、げにと存じ候。

○あゝ運命？

兵庫縣　大谷みつ子

草深き知る人も稀れなる片山里に、生ひにしこの身がうち續く不運不幸の境遇、薊の露だにもみ心寄せ給ふ人のありやなしや。

かたるに胸塞りて、言葉出でず。しるすに禿筆ためらひて、動きもせず。……さるにても、何故この身は斯くも痛ましき運命なるよな。

五とせの春は父に逝かれ、六とせの秋は母上に旅だゝれても、幼なき弟はあどけなきに、あばらやの檐ふく風のつれなさよ。

父母のゐませし頃に、少しはものの貯へもありしかど、日和の雪と消えゆくのみ。あまつさへ、想ひ出してもぞつとする、こぞの冬の末つがた、風もはげしき眞夜なかに、これも天のさだめにや、思ひがけなき火災に……叔母の悲鳴も、妾の哀哭も、弟が叫びも、空しう焰に卷きのまれて、燃え失せぬ……。妾の袴も弟の美はしき軍服までも。

叔母のすゝめにて、とある庭に文學びしが、それさへ停むるの止むなきに至る……。とはなさけなき極みならずや。花のあした、月の夕べ、とも〴〵に學びつゝ眞實の姉君と思ひ慕ひしわが友は、不圖病魔にをかされ、果敢なくも山櫻のみだれ散るころ、歸らぬ旅路に逝き果て給ひぬ。

ふりかゝる不幸は、あくまで妾を泣かしめ、湧きくる不運は、とこしなへに妾を悶えしめてつきせじか。

幼きときに父母を喪ひ、僅かの家財は烏有にきし、親しき友はみまかりぬ。

ゆかりある叔母さへ、今はよそ〳〵しう顧み給はず。かたばかりのあばらやに、薪を手折りて、そのひ〳〵のほそき煙をたてんとするに、繊弱き腕のまはりかねつ……晴れまなきけふこの頃の五月雨に炊ぐべきものゝなきがまゝ、くやしや、木の實に飢を忍ぶ。妾はさのみ思はねど、としはもゆかぬ弟の飽きてさへねだるころなるに、ひゞに窶れゆくいぢらしさ。

（雨評）佗しく悲しき境遇の情、思ひやられ申して候。

○ちぎれ雲

東京麹町區飯田町六丁目　重田春子

長き袂を翻す夜風、肌寒う雲はびこりし空の、薄墨色にも、物凄き間より、星の三つ四つきらめける、そゞろに夜の淋しさ、身にしむ許りなるに、今宵しも、我は冷やけきおくつきのもとに、靜かに眠りさませる君を思ひ出でゝ、堪へがたきまで心は千々に亂れつゝ、あゝ思へば、魔神の無情の腕は、君が一家にのみまとはれしか、そゞろにも、哀しさやるせなき。青春の齡を負うて、逝きませし姉上の悲しみ、未だ失せざるに、又君の訃に接せむとは、思ひがけざりき。

あゝ君が顏は、春の東雲の如く、君が笑は旭に匂ふ山櫻の如かりき。されど、そははかなき夢に通ひし、人の俤よ……。然も、長なへに胸に殘れるその俤を、如何にかすべき。

溫き日影うけて、運動場に語らひし時、いかで知らん、今日一人斷腸の涙そゝがんとは。その玉の御手より、我手にと、美しきカードたまひし時、いかでか知らん、今日この悲しき報にあはんとは。心のみ、只重う沈みゆきて、夢はなか〳〵に結びもあへず、夜深うして獨りなく時、闇を忍ぶ軒の玉水の音と共に、とけて流れて、我がこの心の、いかばかり幸なき、君がおくつきの邊さまよひけん、休みもなく、憩ひもなき、オゝ、この我が悲しみ、君が許へぞ通ふらん。うす暗迫る夕暮の淋しき愁ひに、今や夏は酣ならんとす、はかなき

夢のごと浮ぶちぎれ雲は、あはれなる死の影浮べ、凄くまたゝく星、そは返らぬ昔の姿をあらはせり。え堪へぬ追懐と、悲哀の情にやをら立ち上りて、遂に君がおくつきに我は至りぬ、累々たる墳墓、幾百の魂をこめて、静かに暮るゝ天王寺畔！……好ませ給ひし卯の花一枝、手向けて、さてぬかづけば、君がみ姿ありありと見えて、あゝ抱かんとすれば、只石碑のみ冷かに立ちて、そこに答ふるものとてはなし。遖々たる我涙、拂へども〳〵止めがたし。再び打つ拍手に、白き花は小さうゆらぎて、はら〳〵とこぼれつゝ。長き太息つきて空を仰げば、あゝはかなや、恨をのせて、ちぎれ雲は西へ〳〵と……。

（兩評）恨みをのせてのちぎれ雲、腸を斷つものありといふべし。

○湖畔の夕

伊豫喜多郡久米村字久洲　土居優香

あはれ、美しの入日よ。いつ來て見ても、美しの此の丘よ、入相の鐘、淋しきひゞきを、湖上に傳へて消え去る時、濃藍の浪をたゝふるかなた、水天連なるところ、綵りぎぬの如き綾ぐも起り、金波銀波亂れて、千古一輪夕陽は、除々沈み行かんとす。

見よ、渺茫たる湖上、華やかなりし夕雲は、消えて跡なく、暮の色見ゆる水のおもを、歸りくる白帆二つ三つ、そが中よりもるゝ舟うた、淸くすみて、靜かなる此の夕の天地を、專によそほふなる、あゝ如何に幽立の境ならずや。

向ひの堤を、牧童に引かれて、一疋の牛、懶げなる身を、遲々たる足にのせて、たどるを見る。鎮守の森に夕がらす鳴いて、星かげまたゝきそむれば、夏草しげる堤の上の白百合の花に、おく白つゆのいとも淸きよ、あゝ美しの里やな、長なへにかれざる、自然の愛の泉をたゝふる此の湖のほとり、鍬を手に紅塵ふかき世をのがれむかな。

（兩評）評者もまた同感に候。

○わかれ

愛知縣　紫琴女史

（一）

いざ、さらば、なつかしき妾が鄕！船は動くよ、梶音輕く……潮來出島のまこもの中にあやめ咲くとはしほらしい……。日は靜に暮れそめて、淸見寺の晩鐘、

かすかに、熨斗せる如き、不二のふところ雲晴れて、天城はかすかにほゝゑみ洩せり。

（二）

『おゝ、さらば、さきくておはせ。』友の手はのばされぬ『おゝ、さらば、妾が友。』妾が心はそゞろ亂れぬ。

今日しも、われは、なつかしき十年の故郷を去らむと程遠からぬ汀のほとり、あかぬ別れに泣きしなり。

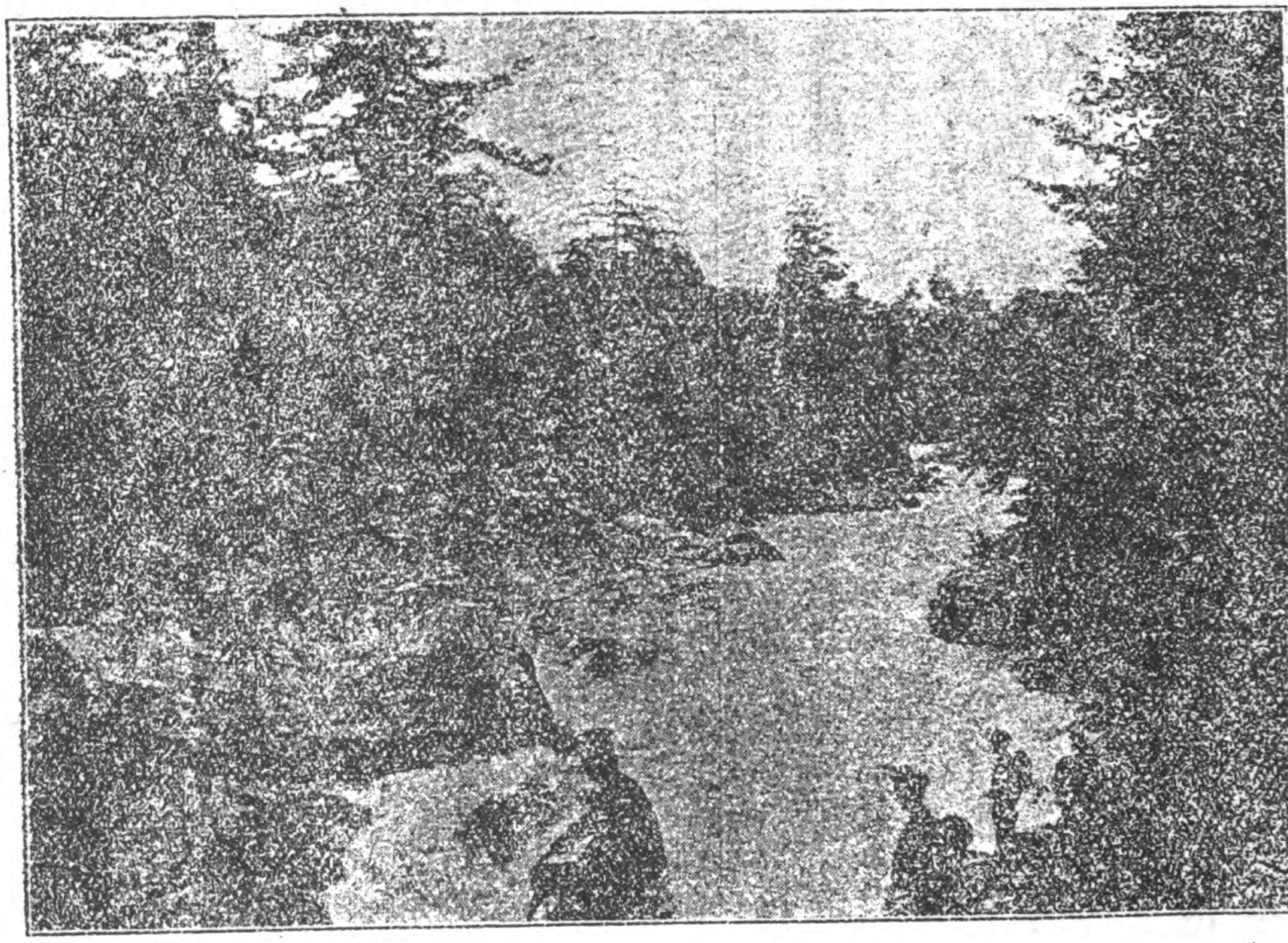
『おゝ、さらば、我が友。』

『おゝ』友の聲は、いともふるへてありき。

波の音、梶の聲、友の影は早や見えずなりぬ。

（三）

あゝ、なつかしきわが郷、あかぬ眺め、美くしき景!!



日光含満ヶ淵

春は汀の潮汗狩、夏は冷しき磯の風、秋は高嶺の月の影、冬は富士の雪の姿、いづれ劣らぬ眺めは、如何にわが心を慰めしよ

あゝ、思へば、彼の砂白き磯は、星清き春の夕べ、友と二人貝拾ひし處にあらずや。彼の松青き島蔭は、月明らかなる春の宵、笛吹きつ棹さし處にあらずや。思ひは馳せ、影はうつり、なつかしき、富士も、早や見えずなりぬ。

夜を更けて、見かへる沖の小島のほとり、漁り火の影うすく、黒ずみたる岬の端、松間にすさぶ笛竹は、さても聞き馴れし調べよナア。松風の送る琴韻か、波のさゝやく水聲か、里の童がた

はむれか、あらず。みなあらず。戀しき友が手馴の曲よ!!?

（雨評）別れの涙は見え申して候。

○別れし友（二友へ書信の一節）

西備 紫明子

思ひきや。過ぐる彼の地の一日は、遂に君等と永久の別れのはじめならんとは。

年々歳々花相似、歳々年々人不同。思へば、去年の此の頃は、○○の君と朝夕むつび語らひて、鄙の寂しさも暫し忘れてありしを、今は早や、互に山河相隔つる身。又來ん年やいかならん。

我も人も行末や圖り難く、朝に心を行雲の彼方に馳せ、夕に身を流水の行方に委す。曾ては笑ひ、別れては悲しむ、これまた人生の常觀。

我れ遠く故郷をはなれ、山水明媚の境に住す、茲に十有餘年。時に望郷の念にたへざる事、なきにあらねど縁ありてや、久しく此の地にとゞまりぬ。他日第二の故郷を辭して、晴天淡き故山の月を眺むる時、思ひは必ず、此の里なる友が身の上に及ぶべし。其の時○○の君はいかに!。

頼もしくも、△△の君が抜山蓋世の氣焔高く、我れ等をして、轉羨望にたへざらしめしも、あはれ、昔の夢とならずや。

願はくは、其の時、ともにともに、遺憾なき經路を追懐するを得ん事を。

（雨評）結末の一語面白し。筆はなほ錬熟を欠くもの多し。

○峯の松

長門豐浦郡生野村椋野桐山方 梅田糸子

慕はしき峯の松、たのしきまた悲しき峯の松よ。

夕暮春雨晴れて、うす黒き雲の緑の空にきれ／＼たゞよへる頃、露繁き若草をふみ、けはしき坂になやみて、妾は屋後の山にのぼれり、なつかしき君の家今一目みんとて。峰の松にたよりて、遠山を眺むれば、山や谷や一望に緑かゝりて若草もゆる、あゝねよげなる雲雀の床よ、麓の畑、麥ばかりなる中に、二所三所、なたねの黄なるが交りて、いと美し。

妾が住める村を見下せば、ぜばき谷の底にして、貧しく憐れなる里よ。谷を流るゝ水の音とう／＼とひゞきつゝ、あゝ寂しき聲よ。かくて君の妾をすてたまふを知りぬ。妾はこれ野中のあだ花、文字なく教育なき者如何でか君に。

過ぎし年には、この山頂に君と蕨を摘みし事もありき、それも今は夢。青葉の茂る頃、君は才智容貌共に秀で

給ふ藤子の君と、華燭の式をあげ給ひぬ。

零落のあまりとは言へ、いゝなづけ空しく反古となりて、如何でか人に合す顔のあらむ。不運の孤兒、今多年住みなれし貧しき里を出でんとす。あはれ峯の松よ、永久に緣にして、わがなき後の故郷を飾れよや。

（雨評）今一層筆の工夫を要する文にて候。

秋の囁

神田紫葉女子

秋の夕暮、稲田を渡る風の音、人燒場の烟のそよぎ、それを、小高い丘のベンチに腰を下して眺めゐると、腸は凍つて、自づと涙ぐまるゝ人は、茲に人生を觀じて天下の秋に泣くのである。

尾花の露にぬれて黄昏の殊に白う小萩の水にこぼれて、あはれは更に深いのである。ぐるりと植木を竝べた棚を見て一めぐり、稲荷神社の傍まで來た。自分は此の處の黄昏を愛するので、此所に來た時は、一種の瞑想が胸を打つて、潮の如く寄せるのである。天地、萬物、廣大無邊の所、人生の樂欲、死生の境界、功名と云ひ富貴と云ひ、將た戀と呼び愛と呼ぶもの、吾人が低き理想の及ぶ限り、狹き觀念を以て、自家の哲理に耽けるのである。

薄暗い夕暮の幕は落ちて、明なる月夜の世界の下に、鬱然たる自然の堂宇に、身を置いた我れは、眞如の淸い光に胸を照して、落ち來る夜露の一滴に咽ぶのである。往く人もなき田舍の草道、詣づる人もなき神の廣前、夜は宵ながら寂寞として居る。御手洗に沈む月影は人生のある物を、自分に敎ふるのではあるまいか。折節、若い村の男女の二人連、この木の下蔭に立つて、老杉の根方に腰をおろした。兩人は若い戀を語つて居た。聞けば果敢なき戀であつた。けれども、彼れ等は戀の永久に圓滿ならんことを願ふてゐる。兩人は手を取りかはして泣た。やがて起き上つて。悄然と淋しい影を地に映して、社段に跪いた。そして、神よと叫んだ。

此の光景をうかゞつた自分は、微々たる人の子の憐む可きを思うて、悵然とした。そして、自分も神よと叫んだ。夜は森として邊はいよ〳〵靜であつた。

◎思ひ出多き呼子の笛

釜山港　池田都子

英姿颯爽たる君の寫眞は接する毎に、君が昨春先發隊として出征し給へる砌、三旬餘の日をわが家に泊り給ひし當時の有様が、あり〳〵と偲ばれて！

噫！君、姓は瀨戸山、――少尉なる職を帶びて。今は最う亡き人の數に入つて仕舞はれた。戰死……實に名譽なる戰死を遂げられたのである。

けれども、名譽の戰死なる語の裡には、多く、否、必ず必ず壯絕で又悲慘の意味が含まれて居る。悼惜の情に堪へないのである。

思ひ起さうとすると、痩がたなすらりとした身に、武裝して立ち給へる凛乎たる御姿、輪廓の正しい顔、隆い鼻、締つた口元が、髣髴として目の前に現はれて來るので有る。寡言で沈默な人で有つたが！

然し、最早や夢で無くては會ふ事は出來ないのである。それよ、恰度出發の前夜であつた、家内一同竭きぬ名殘を惜み乍ら、聊か心ばかりの太白を擧げた。君と伍長一等卒の三人の君の前途の武運芽出度かれと、妾は何がな餞別にする品もと考へたが、大低の物は整うて居ること故と、遂に呼子の笛を三個、心ばかりの印に贈つた。

出征し給ひし後も、折々の文にて、數度の會戰に未だ微傷だに負はせ給はざる由聞きて、只管天祐の厚きを喜びつゝ、呼子の笛の運命を樂しんで居たに、實に晴天の霹靂？十一月十二日〇〇方面の大激戰は、遂に――終に――花々しく君を……！

馬蹄の塵に！阿修羅場裡の鬼と！化し去つた……慘！拔群の勳功に、君は沒後、功四級に叙せられ、中尉に進級した。寔に死して餘榮は尙ほ赫灼たるので有る。

かくて、腥き嵐は尙ほ、滿洲の野に荒むで居る！

呼子の笛!! 汝は今、朝な夕な絶え間なき職務に勞して、天晴れ名譽に斃れたる主人の首に掛けられたるまゝ、荒野の泥に穢れて終まつたのであるか？

あるは又、心ある他の君に拾はれて、再びその高き音に誇りつゝあるであらうか？

若し主人と共に穢れしならば、其の傍に今昔を語りて、不滅の靈魂を汝は聊か慰めつゝあるのであらう！

再び拾ひ上げられしならば、新らしき君の爲めに、日影仄の暗き木の下道を忍びて、近寄る敵あらば逃さず其高く澄みたる音もて、沖天に嘯きて味方を戒めるであらう！

噫、思ひ出多き呼子の笛よ！今は何處に如何になりつゝありや？

瀬戸山の君は再び返つて來給ふ事はない。

○兄さん

信州　都筑薫子

「一寸、石垣さん、學校の歸りがけに、渡邊さんと何か爭つて居た、馬鹿見たいな男の方は誰れ。」

「アーー、あなた御承知ぢやないの。ソラ、渡邊さんの兄さん。」

「ア、アノ、白痴とか人の話の、マア。」

妾が一夜城山公園に散歩に行つて、葉櫻茂りのうす暗ひ辺りの石に腰を下して、川中島の夜景色に見惚れて居ると、駒下駄の音も輕く彼方へ歩みながら、妾の兄さんの噂して過ぐる者がある。ハッと思うて、早鐘打つ胸を押し鎮め、木の隱れに透して見ると、それは妾の同級生、石垣さんに七尾さんのお二方であつた。

嗚呼、此の二人の噂、それは、實に妾に取つては、腸を剜らるゝこうつらい悲しい事なのである。

アヽ、兄さんは將して白痴なのだらうか。然り、兄さんは文字は如何様なものかを知らぬ、物理、道德、數學の何たるを解せぬ。されど、盜みするを知らない、偏けるを知らない。人を笑はせる事こそ知れども、人を怒らせ人を泣かせる事を知らない。又、如何樣な恥辱を受けたとて、洪笑一番、之を嘲視するをしない、人喜べば笑ひ、人悲めば又泣く。さるを、人皆呼んで、白痴者と云うて居る。嗚呼、將して兄さんは白痴者であらうか、否、否、否、妾は決して之を馬鹿者とは云はぬ。妾の兄さんを馬鹿者と呼ふ者こそ、眞の馬鹿者ではあるまいか。即ち、妾の如き、金錢を濫發して學校の門を潜れども、親に慰安を與へ、人に不倫ならざるやうにするを知らない。而も自稱して馬鹿ではないと云ふて居る。是れが馬鹿でなくて、他に馬鹿が何處にあるだらう。

嗚呼、世の人は誤解して居る。怜悧と馬鹿の區別を知らない、‖‖‖‖など思ふにつけ、妾の心は千々に亂れ、天使の如き兄さんに、顔を合せるのも、恥しくてならないのである。

○親の心

伊豫　吉田須美子

軍人遺族慰安の爲めにとて、過ぐる夜、嶄新なる高聲蓄音機を、金剛寺て聞かす事に成つた。村の者は珍らしい事とて、吾も吾もと、さしもに廣き本堂も立錐の餘地無き迄。或は軍歌に或は落語に或は俗歌に、何れも面白氣に樂しく笑ひさゞめきつゝ聞ける中に、只一人年若き婦人の何思ひけむ、顔を兩袖にて蔽ひ乍ら、さめ〲と泣いて居る。こは不思議と樣子を尋ぬれば、婦人はやをら其の面を上げて曰ふ樣、私には今年六歳になる男の子が一人有ります。其れが何の因果か、お恥かしい事乍ら、性來の啞者て有ります。噫今日は文明の世の中とて、器械すらも斯樣に自由に物を云ひますものを、私の子は人間と生れ乍らと思ひますと思はず涙がこぼれまして、折角お慰みの中を、汚らはしい涙に濡らしまして、眞に濟みませむと斗り、わつと泣き伏して仕舞た。今迄どよめき渡て居た廣間は、俄に水打た如く寂として、又一言も曰ふ者が無かつた。



俳句

巖谷小波選

天

青簾虹見る人の洗髪　武蔵國鶴見町　岩田たか子

［評］虹の麗人の瀟洒、青簾の動かぬ景なるべし

地

紫陽花にふしわり蝶のむくろ哉　尾張國東熱田玉ノ井　星月女史

［評］着想新しく詩趣津々

人

青柳や女もすなる渡守　丹波國南桑田郡稗田野村　柳原いか子

［評］宛然歌麿、廣重の合作を見る如し、又曰く、以上三才女流の作家として一層妙を覚ゆ

秀逸

明易き瀬を獺の漁る哉　新潟　臼井安子
日盛やしばらく雲も行き止り　小樽　梶水仙子
遂に逃げし螢や楠の頂きに　奈良　竹田久子
つばくろに少し置くくじり哉　信濃　帯刀まさへ

涼しさや去年は水に逃げた家　武蔵　牛村三重子
蜻蛉や大公望の竿のさき　武蔵　岩田たか子
夕立に急ぐ黄門主従哉　麹町　加藤とよ子
愛らしや日傘の下をゆく日傘　淺草　松浦綾子
天の戸のあいたやうなり五月晴　蝶子

草屋根の古きに松の落葉哉　山口　安平政子
薔薇の花牡丹の花にくづれけり　伊豆　古見彩子
烏の巣も無事なり寺の構へ内　赤坂　村上綾子
貸艇はれて小波青し神の池　金澤　森井せき子
綵の宿の蓑干す垣や花糸瓜　福井　高柴小辭
學院の小路や螢飛ふ　伊豫　曾根岩子
釣床に書窓の詩集繙けり　岐阜　田中たつ子
夏の月ヴアイオリン引く二階哉　伊豫　白蘆女史
古寺や佛の前に虫の聲　千葉　中野きよ子
夕顔に近き灯や新坐敷　三河　霞女史
月落ちて庭は卯の花月夜哉　駿河　山本俊子
御洗の水あふるゝや萩の中　和歌　飯野より子
卯の花にそぼるゝ雨や祇王綠　三河　柳原菊子
月に手の屆くまて取る田草哉　下總　小島芳子
葉がくれに遲櫻見えて瀧の音　日本橋　植松ひさき
咲きつ散りつひまなきけしの畠哉　廣島　靜代
刈殘ろ麻背にあまり子規　麻布　戸澤ゆき子
春の野の日露に擬すや生徒軍　千葉　森久子
名月の二階にこぞる女かな　大阪　杉田とし子
水盤に金魚おどるや午さかり　小石川　服部ゆさ子
夕日斜め野には雲雀の聲ばかり　日本橋　橋本たつ子
五坪の庭なこそりて若葉哉　埼玉　貫井秀子
提灯と秋に虫を聞く夜哉　兵庫　山木梅子
音もなく柳の下を春の水　紀伊　木村たけ子
島原に緋牡丹さげて小傾城　陸中　浦井松子
すれ違ひ日傘つぼめて土橋哉　横濱　原きむ子
時鳥一聲なのろ明の月　淺草　石原薔薇子
公園の禁札よむや夏の月　周防　浦子
麥の穗や風にうなづく畑の畷　岩代　齋藤翠子
下闇や天狗出るてふ鞍馬山　大阪　吉川八重子
薫風や自轉車轢く田舍道　陸中　黑澤みえ子
田植唄笠の白きは嫁らいし　ちてふ

消息文

日本女子大學教授　櫻井文學士選

天

○親しき友の許に

越後長岡町　前崎照子

いふまじと思へと今日の暑さかなといひけん樣、げに堪へがたき折柄、いかゞ在しまし候や。およひ折りてまち渡らせ給ひし御兄君、漸々御歸岡遊ばし候由、其の節は不在の折とて、御出迎へにも參らず候ひし事、惡からずお免し給はりたく候。日々、花も實もある御物語り、さこそ御賑々しき御事と、推し上げ候。たしか、去年も今頃かと存じ候ふ。河風涼しき御館の高殿にて、御兄君が、御得意の竹の調べに、誰れしも心ひかるゝ君が御爪音、曲も床しき繪の島、餘りの樂しけに、心も空にあくがれ出でん斗りなりし事の、思ひ出でられては、中々におさへがたく候を、しらせ給ふ樣に、兩親は、例年の如く、かの出湯にとて參り、跡は無人にて、いと淋しく候へば、もとより河添の御住ゐには似るべくも候はねど、さりとて、又折々は音なふ山嵐の捨がたく候を、いかで、竹御持參にて、御兄君共々、御こし給はずや。何の風情もなきやどには候へども、待ちまゐらするは、わらはのみにも候はず。兼て度々、御兄君が御ほめ言葉たまはりし軒の松も、久々にて、調べ合せんとまち居り候半を、涼やかなる御湯かたの袂、かるやかに御運ばせのやう。夕月のほのめく頃には、かの小犬を御むかへとして、つかはし申すべく、ひたすらまちまゐらせ候。あら／＼かしこ。

（兩評）消息文としては、練熟せる筆の跡、慥に見え申して候。天とす。

地

○兄上の歸省に托して妹の許に

芝西應寺町六十番地　白木菊子

花の下に立ち暮らし、緑りの木蔭に座し明して、日毎夜毎に祈りし其許の願望叶ひて、大切の／＼兄君には、

愈よ三年振りにと、數多き思ひにかられ給ひて、矢も楯もたまらず、今行李調ふる最中に候、今が今まで散々其許に談まれし報ひには、やがて兄君のいまさぬ後明日よりの淋しさ偲び出で、中々に思ひ當りて、胸の血汐をしぼり候。新橋のプラットホームに消え行く朝霧の裡に、悄然と無限の思ひをこめて妾が悲しう送りまゐらする列車は、豐かなる竈の煙り濃き故山の夕べに、其許が歡喜の涙を以て迎へ奉るのそれよ…。

此度は父君母様の御墓に詣でゝとの給ひしにつれて、何卒妾にも代りてよろしくと申上げし言葉の奥には、一人に只一人の兄君懷しく、いとゞ離れがたき思ひせられて候ぞや。

蒸暑き塵高き都の有様などは、思ひ出多き舊き吾が家のあたりを、優しき溫かき其許の愛の手にひかれてさまよひ給ふ兄君の御口より、涼しき泉となりて湧き出で候はんに、せめては只一つの御願ひ、妾にも亦となき兄君に候へば、此后尙もお慰め申し上ぐ可き餘地を殘し給はれと、切に／＼に祈るにこそ、　かしこ

（雨評）趣向に一寸淸新なるところあり。詞に文才も見えたり。心に可憐の情もこもりたり。地とす。

人

○歸省すると云ひ越したる姉の許へ

神戸元町五丁目　高井菊江

なつかしき姉様、戀しき姉様。よくこそ歸ると仰せられしよ。

とう／＼此の休みにも御歸へりなき事かと、悲しうて悲しうて、昨日まで泣いてばかり居り候ひし。

今朝は門の小川にも、裏の小山にも、御心の程を話しやりしに、御仲よしのせゝらぎも、松風も、嬉しいとさゝやき申し候。

一刻も早く姉様の御顏見たく候故、其の日にはあの土橋の邊へまで、白（犬の名）と一所に御迎に參るべく、御納戸の矢がすりに、淡紅色の帶しめたるが、あの柳の木陰に憩ひ居らば、それは私にて候間、其時には姉様より御聲かけ下さるゝ様、今より御願ひ申し置き候まだ／＼申上げたき事候へども、夜も更けたれば、早く寢て早くうれしき夢を見たく、先は之れにて筆とめまゐらせ候。

戀しき
なつかしき姉様へ　　妹　花子より

（雨評）情可憐に、文才も多少見えたり。人とす。

秀逸

○兄様の戰死を友に知らす

兵庫縣明石東本町　白旗清子

優子様。今聯隊から兄様戰死との電報が。

昨日見るともなく、ふと、手箱の菫を見ましたら、優子様、色があせて居ますの、あの美しい色が……。あの清い色が……。私は驚いて、とうぞ兄様におかはりがない様にと、夜もすがら、神に念じて居ましたかひもなう、とう〳〵戰死……。いつも優しくして下すつた兄様が……。あゝ、異郷の骨と化して……、私、きつと兄様は、勇ましく〳〵御奮戰なすつただろーと、其の姿があり〳〵目の前に……。かね〳〵今度の戰には、生きて歸らぬ此の身、必ず譽の骨となつてと仰つた、其のお言葉に露違はず、實に兄様は滿足でしよう。本望でしよう。あゝ優子様、私もう悲しみは致しませぬ。何も御國のため正義のためですもの。女々しく泣いたりしては、兄様の妹として、ほんとに、恥しい事です。だが、優子様、野邊に菫は咲いたとて、誰と樂しく摘みましよう……。月影清き秋の夜を、誰と樂しく眺めましよう……。あゝ、父母もなく、あまつさへ、賴みに思ふ兄上にも別れし、此の拾小舟、お察し下さいね。

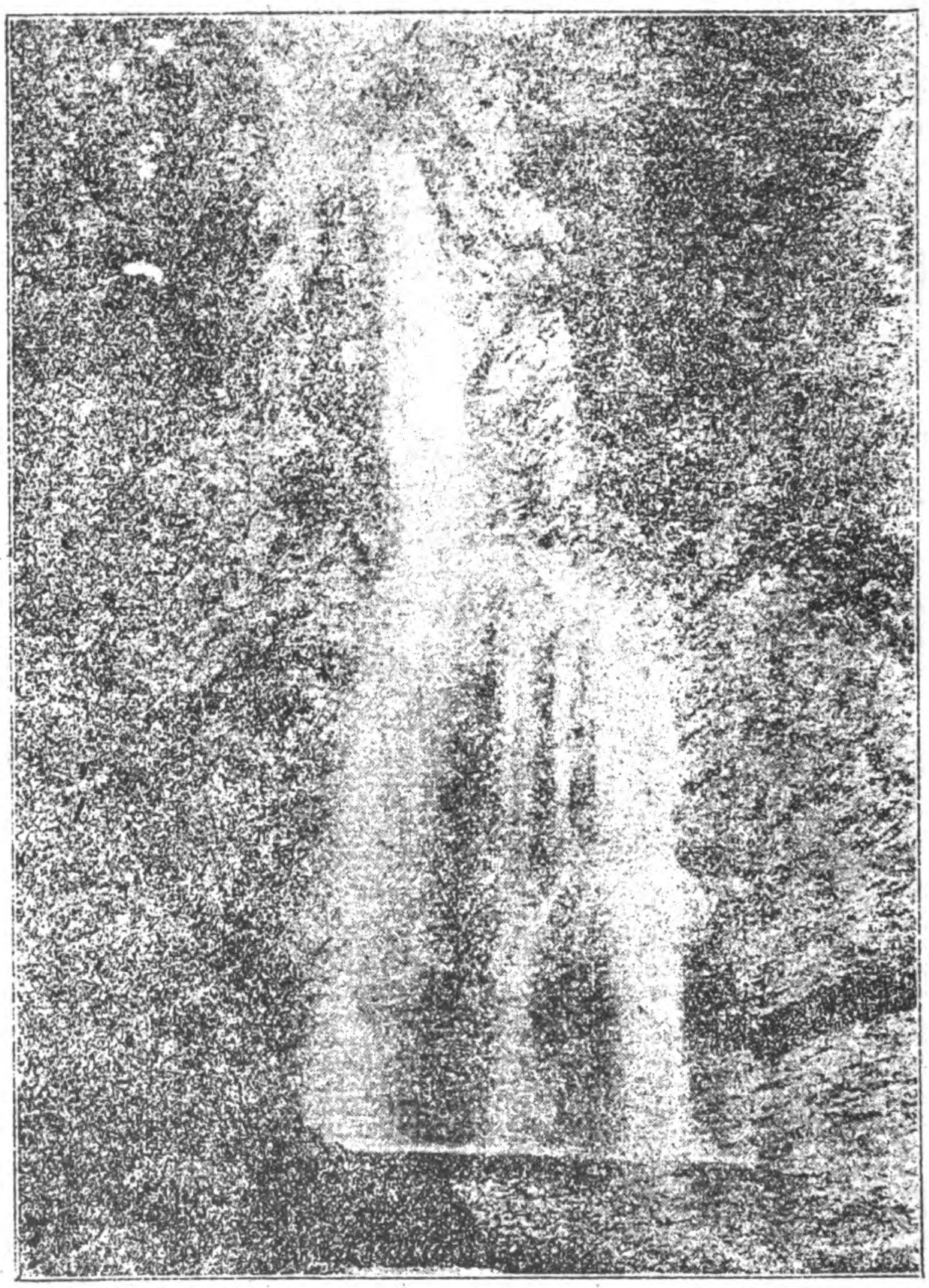
（雨評）末段の數節、千鈞の力あり。

○都の友に寫眞の取り換を乞はれしに

上野國富岡町下町松尾方　翠山女史

御ふみくりかへしくりかへし申して候。斯くまで仰せられ候を、差上げざらんには、必ずつれなきものと御憤りあそばされん。さりとて、今斯くあさましき田舍人に成り果てしを、御覧に入れんは、いと恥しく、如何はせんと思ひためらひ候へど、有りし其の頃、ともどもの學校がよひ、朝夕も洋傘さしかざして、日燒を厭ひし、その時の我れにては無きさまも、おしはかりいらせらるべきを、見苦しとて參らせざらんは、却つての失禮にや當り候はん、都を去りしより以來、知らせたまふ通りの家のさま、父さへ、筆を鍬にかへて、

夫れまでなさらずともと、人さまに色々と止められ候ても、いやいやその手すぎよとて立ち働き居り候中を、絹はんけちに顔ぬぐひても居らるべしや。白粉などは最早幾月取り出でずや候はん。早う都にありける日、田舎人は何れも年齢よりは老け形なるがをかしなど嘲り言ひ候ひしが、誠に人は處がら、郷に入りては郷に御座候。此處らあたりには、二十歳を越して、肩揚の娘もなく、三十女に緋ぢりめんの襦袢の袖などは、かけても見らるゝ事に候はず。いさゝか縞のあらきを着候ても、やがて人の見とがむるさまに候へば、ひたすらくすみ入りて、今日此の頃の姿の有様、御覧じたらば驚きや遊ばされん。随ひての面ばかりは、今参らする寫眞の上にも御覧じ下さるべく。左もあらばあれ、思ふ心は其の昔にもいとゞ増りて、忘るゝよしなく戀ひしのび奉るなれば、よしや此のおもかげの見苦るしうもあれ、是れによりて厭かれまつるやうの、輕らかなる御交らひには候はぬ物をと、思ひかへされ、斯く淺ましきを御覧に入れ申し候。人ごとに送らふはよからぬ事と、いつも御許さまの御教へなれば、かゝる事にも猶背くまじと守り居るにて候。いで、其の御取りかへをも、早々賜はり給ひてよ。此方のみ徹すは、御人よしとも申しがたければ。かしこ



青森縣中津輕暗門瀧(一)

（兩評）細やかにしとやかなる中に、多少の才氣も見えて、整ひたるよし。

○かんご婦となりて戰地に赴く

德島市富田伊賀町　住友とき子

先つ日は情あつきみ心もて、遠つ方まで御見送り下され、こよなう嬉しう、御禮申し上げ候。

松青く、砂白き津田の海濱に、鳴り響く汽笛とゝもに、をしき袂を分かち候ふとき、妾は「離別は憂きもの愁きもの」との言の葉は、胸の血潮のたぎりよりか、思はず口に迸り出て申して候ひき。

君國に盡す爲めの門出とは知りながら、住み馴れし故鄕に別れ、慈愛の父母の膝下を辭し、親しき友どちに離れ、何時また故山の地をふむべき、いつ、なつかしき人々に顏合すべきなど、そゞろ膓を斷つ思せられて候ひき。かくもはかなき想ひより、ふと我れにかへり候ひしときは、入日はいつしか灰色の雲に蔽はれ、松原は見えず、海の面は暗うなり行きて、いとゞ悲哀をまさしめ申して候。あはれ、これより幾重の汐路をこえ、何時めざす地には着かむとする。など案じつゝ千鳥のねむられぬ夢の中に、今日未明此地(佐世保)につき申して候。

今宵此の筆染め候ふ折りしも、雨細うふりいでゝ、虫の愁譜もたえ〴〵に、何となう心亂れ、涙と共に書き候ひしなれば、筆明かならぬ所は、推し量り給ひてよ。明朝目的地に赴く事に候。餘の便は彼の地より。

あなかしこ

（兩評）文整ひ、筆に多少の花も見えたり。

○戰地にある叔父君の許へ

薩摩日置郡日置村　伊東幸子

御別れ申し上げてより、いつしか、春去り夏來りて、綠の木梢涼しげに、そよ吹く風も、いと心地よき時節と相成候へど、御地あたりは、暑さ甚しく御座候由、御叔父上樣には、如何御暮らし遊ばされ候や、御伺ひ申し上候。私にも健かにて、日々學びの道を、いそしみ居り候へば、御心安う思召下され度く候。さて、承り及び候へば、み國の軍も、戰へば勝ち、攻むれば取るの有樣に御座候由、數ならぬ身も、人知れず、喜びの涙にむせび居り申し候。何か心計りの、奉公もがなと思ひ居り候へど、はかなき家政の綱につながれて、思ふ樣の事も出來申さず、然し先つ頃、五月雨ふりし

きる折り、門口の田に、早苗を植ゑつけ置き候ひしに、近頃生き〳〵と、生ひ立ち候へば、出來秋をまちて、はづかしながら、軍資の塵にも奉らばやと、考へ居り候。御叔父上樣にも、定めし君の爲め、はた、み國の爲めに、目覺しき御働きなし居られ候御事と、蔭ながら、御喜び申し上げ候。御愛息鐵郎樣にも、御變りなく御達者にて毎日征露軍歌や、いくさの遊び事に餘念なく、今頃は驚く計りの御成長にて、いと愛らしき御樣子に候。先夜は冴やけき月の光を浴びつゝ、豐子樣千代子樣などと、彼のいつもの小橋に涼み居つ、あどけなき鐵郎樣を取り圍みて、月を眺め、唱歌を歌ひ、果ては、御叔父上樣の御噂に、夜の更くるも覺えず佇み候ひき、末筆ながら、追々暑さも相増し候へば、折角御身躰御大切に、國家の爲め充分御盡力の程偏に祈り上げ奉り候。折しも、いぶせき小屋の内に、一入冴え入る十六夜の明き月影仰ぎつゝ、あはれ、血腥き滿野の邊り、背嚢枕に天幕の中より、此月眺め玉ふらん御心如何にと、思へば、そゞろ御地の有樣などの胸に畫かれて、さすがにゆかしくしのばれ申し候かしこ。

（兩評）先づ〳〵きこえたり。

○親しき友の許に

大分縣宇佐郡高家村　山中千年

日をふるまゝに、いよゝ御なつかしさのたちまさり行くは、我れながら遣瀨なくなん。さても、御別れの朝靄こもりたる小川の岸に佇みて、いと白き涙の間より、見送らせ給ひし其時の御面影、まだまぼろしに消えやらぬに、月日に關守なく早や夢のまに年さへ改りて、青葉がくれと相成候處、如何御暮し遊ばされ候哉、絶えて御伺ひ申し上げず、おわびの言の葉も侍らず候。さりながら、これとても、さら〳〵御忘れ申しての事ならねば、御ゆるし下されてよ。さて、妾事も其の後無事第十八航海も恙なく終へ候間、御安心下され度く候。初めの程は如何しても時々船暈を感ぜしが、其の後は誠に達者に御座候。さて、此度は、比較的患者も多數ならず、且つ何れも輕症なりし故、日をふるまゝに好結果をあらはし、此頃は全癒の者も續々有之候。我等は彼我の別なく博愛看護するが本分に候へば、益々熱心に親切に盡す精心に御座候。はじめ日本の國境をはなるゝ時は、何となく戀々の情にたへず候ひしかども、今日は左樣の心は失せ申して候。然し航海中月清

き夜など、獨甲板に立つ時は、御地の空なつかしくて、此の清き月を我が友はいかにながめさせ給ふらんなど、時ならぬ時雨に袖ぬらし申して候。今此の書を認め候時も、かの南むきの部屋の机にもたれて、此の手紙を讀む人の面影の、目の前に見え候。

（雨評）これも先づ〳〵きこえたり。

○友の許へ

東京市麹町區飯田町六丁目　重田春子

月日の小車は廻り〳〵て、はやも別れ參らせてより、三月はたちて候。あゝ並びし机に數へ草つむは、餘すの今に比べては、猶嬉しうも候ひしものを……。君と三日よ二日よ一日よと御手とりてわびしも、別れし後我が生涯を通じて最後なるべき一教室に、庖丁もつ手のふるへ烈しう、折柄の「お鮨」の献立に、椎茸もち給へる御手握りて、其の儘片隅に相抱きつ泣きし、オヽ其時！我が涙の君が白き割烹服をぬらしたるに淋しき笑みながら「この涙の永久にかわかざるやう」と宣ひしを、君よ忘れ申さじ。あゝ思へば〳〵、其頃の懐しう候かな、卒業式ありし日、離れじのかたき誓ひに居並びて撮りしうつしゑ君の左手と我が右手と固く握れるまゝを、ようも寫し候ひし。さはれ、こもる無限の友情は、うつし得べくも候はず。只かたみの胸にのみ……。オヽ、何も〳〵夢の如くに候かな。撫子の薄紅あせがてにこの机をかざる我が室、細き灯に朧ならずも君が御俤、身に迫り來て、拙へがたう、御面大きやかなる半身の君が御うつしゑ、この胸にこの胸に抱きて、さてぞ筆を走らせてのたどり書き、あはれ、御筆の匂ひに、この情の子を笑ませ給はれな。かしこ。

（雨評）才氣は見ゆれど、筆に練熟を欠くふし多し。

○都の友へ

（病床より）愛知縣　紫琴女史

あはれなつかしき君よ！浮世の小車は廻り〳〵て、波靜かなる夜毎の月に憧れしも、早や昔と相成りて候。

思へば、彼の夕べ、別れの夕べ、旗雲の美しく靡ける彼方、空しき碧落を指して、妾が心は如何に悶えにけむよ！亂れにけむよ!!爾來、夕燒の野に立ちて、一鳥の影遠く、空しき彼の天上に入りて、その影早くも夕雲の彩なる中に隱れし時、妾が涙點の戰くことよ、妾が眼瞼の瞬くことよ！月の夜の逍遙、木犀香ふ高樓に、君が妹この琴ひき給ふ折り、君が調べに似通ふとて、袖ぬらし、事もいくそ度。君よ、一夜萬籟寂として、獨り遣水に歩を移り、岸に飛びかふ螢を眺めて、昔の夢は思ひ給はずや。空や蒼く、水や冷かに、遠山の紫色褪せ行きて、近き峰の端、沈む夕日に色つきそめ、水鶏の聲、水を流れ岩を滑り、極靜に香る時、君よ、故郷戀しと思はさずや。さらば、君よ、わがいたづきの息衰れと思さば、一枚のうつしゑ送りてたべ。

猶申したき事は、涙の眞砂子の數盡きれど、今は筆とるも、懶ければ、

さらば。

○夏菊を贈る文

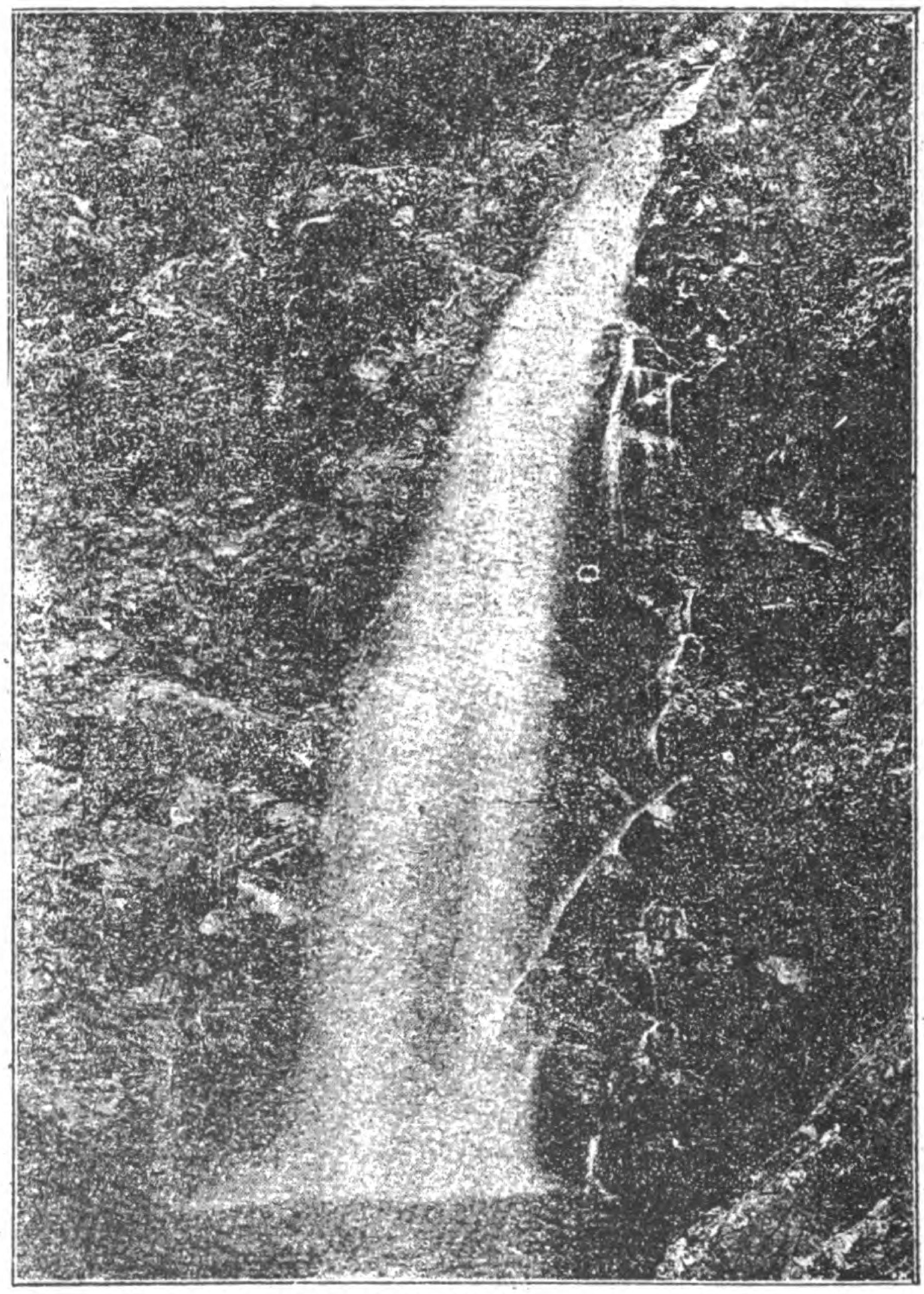
千葉縣　榎本みどり

かれて庭園に培養し侍候菊の花、昨日頃より一輪二輪咲きそめ申して候。その形、その色の、さだかにはわかられども、分り候ひしものよりは、なか〳〵に興味多からんと存じ、一束差し上げ候。すべての事、知れ渡たりしよりは、知れ渡たらんとするときこそ、興味も多けれとか申し候よし。殊に蕾二つ、右のを御許様、左のを私とたとへつらんには、こよなき慰みかと存じ候。中にも、右なる蕾は、一しほすぐれて、いと大きうなりをれば、咲きつらんには、いと〳〵みごとなる花になり候はむ。兎にも角にも、朝夕、御いつしみ下さらんには、限りなう悦ばしく存じまゐらせ候。私も學の道のかへるさに、立ちより、其の樣をながめ候はん事、何より樂しみにて候。親しき友達の間柄とて、失禮をもかへりみず、かくはものしまゐらせ候。いくへにも御ゆるし下されよ。

あなかしこ

○混蟲採集に友を誘ふ文

茨城縣　小泉拾粲子



青森縣中津輕暗門瀧(二)

げにや流るる月日、君と深き夏木立の蔭にやすらひながら、學期試驗の恙なきを祝ひ、またの逢ふ瀨を期して、盡きぬ名殘りの袂を別ち候ひしは、昨日今日とのみ思はれ候を、指折り數ふれば、はや一月の前とは相成り申して候。

無限の思ひを君に遺して歸鄕してよりは、朝には淸き小川の靑柳のかげ漏るゝ馬子の追分節を聞き、夕には風凉しき千町田のあちこちに節面白き乙女の田植歌を耳にすれど、親しき君の侍られねば、あはれ樂しとも愉快とも思はず候。

あゝ、君と共に袖を連れて、此の天然の活畫を眺め、自然の音樂を聞く事ならば、如何に樂しき事ならん、愉快の極みならんと、日々想像をのみ畫き居り候。

折りしも、思ひ浮びしは、過ぎつる日君と語りあひしかの昆蟲採集の事にて候。幸ひ此の頃は天候もよく候へば、二泊位にて、かの昆蟲の巣窟としてうわさ高き筑波紫山の邊りに採集かた〴〵御旅行なされては如何に候哉、今頃はさぞ美しき胡蝶、蜻蛉、蟬、其の他あらゆる昆蟲は、容を飾り、羽をならし、聲を淸めて我れ等を待ち居る事と察し候。

尚二學期よりは、動物教科書も、昆蟲類の處より初まる事に候へば、一

方には學問のたすけとも相成り申すべく、何れにしても樂しき事と存じ候まゝ、一寸御誘ひ申し上げ候。かの親愛なる君子、政子の君にも、至極御賛成なされ候間、君にも勸めて御同意遊ばさるゝ樣、切に願ひ上げ候、かしこ。

○髮の結ひ初めを祝ふ文

廣島　荒木ます

御玉づさ、今も枕頭を飾つて、麗々しく拜し居りらし。亂れ髮の落ち落ちて、それさへ一日一日と色艶も失せて、はや一月に餘り。此先いかになりゆくべきにやと、不幸の吾身を想ひつゞけて、涙の乾く時もなく、只管うらめしくて、世にもあこがれ候ひしに、一夜なゝめならぬ天の樂につれて、唯ならぬ香薫り、片手に美しき刺繡かゝるよと見しは、夢にてもなく、姉妹も只ならぬ御許樣の髮の結ひ初めを耳に致し候ふ、嬉しくて〳〵、病もおこたり、早うみ髮の花髻が見たく候ふ。げに昨日までは、十五年ごしの、黑髮たらして、リボンの飾を召させ給ひし雛姿の、すらりと擧げて、初めて新蝶々を結ばせ給ひしよし。昨日に變る今日の乙女姿、いかに麗しく候はん。あゝ七日〳〵は永きものにて待ちこがれ候ふ。今にも散らんとする白百合のあはれを吊ひ、二人して樹下をくゞり、池畔をめぐりて、むつびをかはし、日頃の妾のなやみを打ちかたり、御許樣のみ髮の美を頌ふ時、いかに嬉しく嬉しき日を迎へ得るならんと、お約束の日曜の來るのが待遠くて、日曆一度に三四枚もはぎたく、一日すら千秋とかなしみ居り候ふ。

○故鄕の姉に送る文

越中　諏訪芳子

人の心の常とは申しながら、故鄕遠くはなれ、他國に參り候ものは、花を見月をながめ候につけて、故鄕のこと胸に浮び出候ものを、まして、私しの如く父上母上樣の御膝下をはなれて、遠方に參り候身は、一入の事にて、此の頃の如く、白雲なせる花は、あとなく散はて、靑柳の糸つたうて落つる春雨の音絶え、垣根の卯花咲き出て、あくがれし人々の心も、やう〳〵にしづまりて、四方の景色も、なんとなく物哀れにて、よしなき事思ひ出てられ、そゞろに故鄕戀しう覺え候ひては、夜半の夢にも、姉上樣の御傍を離れず、常に打ち案じ居り申し候。御隣の姉樣は、此の春を如何にして過され候哉、定めて御無事御暮らしの事と存じまゐらせ候。去年の春、姉上樣と共にながめ候ひし庭の櫻桃は、早や散り候ひぬらん。申す迄ても御座なく候へ共、追々と暑さも相增し候事なれば、若し惡しき病にもかゝりたまはぬ樣、御身大切に遊ばされたく、御叔父上御叔母樣も妾し事も、いとすこやかにて、日々怠りなく出校仕り居候まゝ、御心配下さるまじく、此度の試驗にも無事及第いたし候。之と申すも、情ある師の君の御引きたては申す迄もなき事に候が、一つに御姉上樣の御惠の及ぶ所と存じ、今一入はげみ候はんと、肝に銘じ候。又、同じ級の人々は、皆親切に御つきあひ下され、一方ならぬ御引立にあづかり候まゝ、何の心配も御座なく候へば、是れ亦御安心下され度く候。尙ほ父上樣や、御隣の御姉上樣に、この文の事、心ゆくやう御傳へ下され度く、別紙は此度の試驗成績表に候へば、父上樣にも姉上樣にも御覽下され度く候、かしこ。

○旅先より友へ

土佐　池川萍花

かく迄、御留め給ふを、强ひて旅立ち候姿み、松尾坂へ取りかゝり候頃より、いよゝ、空暗う相成りいつしか、小雨そぼ〳〵と、降り出て候故、しばし、木蔭の苦はらひて、憩ひ候に、谿間に聞ゆる老鶯の音、木の間に見ゆる日向洋、常ならば、腰折の一も浮び候はんも、今はなか〳〵に、獨り旅の物淋しく覺え候。

空模樣、いつ晴るべくとも覺えれば、亦立ち出てゝ行く程に、上衣しとゝに濡れて、足の運びも、たど〳〵しう、漸う〳〵城邊へ着き候節は、雨歇みたれど、いみじう疲れ候へば、一夜を此の地に憩ひ候。

宿は見晴しよき處に候へば、をちの高山峰つゞき、さながら一刷毫の屑、山の裾は雨煙りたなびきて、渡川下る筏士の歌、ほのかに聞え、實にや長閑なる鄙の里、君が筆もて、寫し給はゞ、いかばかり、美しくもありなん

明日は、宇和島迄參るべく、今宵まだ早くより、臥戸に入り候も、初旅の淋しうて寢もならず候まゝ、かくは、第一信申上候。

短篇小説

廣津柳浪選

地

○愛の泉

小石川久堅町七十四　奈美木翠子

「マア奇麗てす事」

閑靜な山手の、とある眺望の佳い病院の一室、雪かと計り眞白な寢臺の上に、枕を肘に支へて半ば身を擡げ、今、見舞に來た同窓の友雪枝の携へてゐる白百合の花を嬉しそうに見守りつゝ斯ふ謂ひましたのは、數多い學友の中で一番仲の好い美千子です。

過ぐる栗の花咲く初夏の頃でした、苟且の病で床に就いたのが始まりて、病氣は段々と重くなる計りで熱さへ加はつて來ました、折惡しく恰度故郷から永年疾床にある老母が此頃の暑氣に別して衰弱たと言ふ報知に尠なからず心配しまして、此暑中休暇には是非歸省れるまでに癒りたいと焦心ればあせる程病氣は募る計り、遂々枕も上らぬ樣な重躰に陷てしまいました。頰は落ち面は青ざめ、全然昔の俤はなく誠に傷はしい狀態をなしました。けれども美千子は、今迄壯健でゐると計り思てゐる父母に、入院しましたからお錢を送つて下さいと謂ふのは如何にも忍びないので、如何かして早く癒したいと思つてゐましたが、雪枝が大變に病氣の上や又色々を心配して吳れるので、兎に角此處に入院たのです。それからと言ふものは、醫藥の効もありませうが、雨の日も風の日も日に幾度となく訪はるゝ雪枝が溫い情けとに依つて追々快く、今日此頃はもう庭の内の散歩位は平素と少しも違はない迄になりました、雪枝の喜はどんなでせう。て今も雪枝は學校から戻るや直ぐと出直して來たのです、

「眞箇にいゝ花ヂエ」

「あなた百合の花お好き？私も大好き、お庭に咲いてゐたのを、あなたにつて今母さんに頂いて來たのよ、是れへ挿しませう」と暖爐の上の萎みかゝつた撫子と取り替へて、

「大變にお顏色が好くなつてヂエ、お氣分は如何ですの？」

「有難う、もう大分快い方ですけれど、時々頭がこう壓し付けられる樣で　それに未だ眩暈がして……」と俯向けば、油氣こそありませんが、昔ながらの澤々しい黑髮が肉の落ちた頰に亂れかゝりましたのを、雪枝は熟々と見てゐましたが、ホッと細い溜息を吐きました。それもその筈です、此暑中休暇には秩父は奧深き所に老いたる美千子の母を共に見舞ふと固く約束したものを、それですのに今此傷はしい姿を見ては思はず泪ぐまれるのです、てうるさそうにそれを掻き上げるのを見て、

「うるさいでせう、一寸結んで進げませう、その方がいゝでせう、さつぱりして、」

靜かに背に廻つて自分の櫛を取り丁寧に撫で上げ復の席に就きますと美千子は首垂れて眼には泪さへ浮めてゐるのです。

「美千子さん、あなた又何か考へてゐ在るのチエ、それが惡いのよ、折角快くなつたのに、つまらない事など心配しない方がいゝわ、又病返しでもしたら……」

雪枝の眼はもう濡むでゐます。

「エヽもう止しませう、けれども餘りあなたの御親切が……勿躰ない樣で……」

「アラッ、又そんな事を、お友達ぢやありませんか、此位の事當然だわ、それより一日も早く癒す樣になさいよ、そうして二人で故郷へ行きませう、故郷の山には澤山百合が咲いてゐるでせう」

美千子は熟々雪枝の面を見詰めてゐましたが、細々と瘠せ細つた手を差し延べて雪枝の右手を確り握り、濡んだ眼からハラ／＼と雫を落し、

「雪枝さん!!何時迄も仲よくお互に力に成りませう」

永き夏の日も漸々黃昏れて庭の茂みから涼しい風が一しきり吹き起りました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから十日餘り後でした、多くの人が賑やかな熱海や大磯に遊ぶのを他所に、雪枝と美千子の二人は言ひ知れぬ嬉しさに充ちて、山青く水清き物靜かな秩父の奧に美千子の母を訪ねたそうですが、其所には盡きざる愛の泉が湧いてゐるでせう。

作者はこれで數回當撰したやうだが、全く小說を書く手ごゝろを能く調へて居るので、趣向に眼の着けどころが、今一段新しかつたらと思はれる。兎に角、作者が用筆に忠實な點は本篇百合の花を挿す處に「暖爐の上の萎みかゝつた撫子と取り替へて」とある一節でも知れる（選者評）

人

○歸り路

周防國都濃郡德山町
香烟　樂井康子

「昔の貴女の樣じやないわ。」と、じッとさげすむ樣に見入つた淺子、年は廿歳で眼醒むる計り大柄の浴衣に、パッとした紫の袴の裾を、綠涼しい木陰の風に煽らせて、時々、口元に無限の冷笑を浮べては高く空を仰ぐのが癖である。

「エ然う、全然百姓の娘の樣になつたでしやう。」君代は微笑で、破れかゝつた銀杏返しのほつれ毛をかき上げて、無心に手拭と一所に取つた赤い襷をいぢる。

手織木綿のぢみな堅縞の單衣に、メリンスと唐繻子の腹合帶、夏の日にも焦げぬ白い脛を惜しげもなう、青草に埋めて身を斜に、杉に凭せて居るので。

暮近い日光は此丘——一本杉を照して、南に枝の張つてるのを、根方から斜に長く北の方に影を刻んで居る。

丘下には平和な風——塵埃もなく人間の爭ひもなく平和な氣で滿たされた、小田村の茅屋が靜かに處々、青く光を有つて水田——青田の中に浮んで居る。

「否、然う云ふんじやないけども……何だか恁う……今の境遇に滿足してなさる樣だらう。」

「滿足？　エヽ滿足して居ますわ。何もそんな滿足してるからと云ふて、怪しむ事ァありませんもの。」

「エヽ？　じや……心から滿足して——不幸とは思は



金魚賣〔天賞〕神戸市相生町四丁目一五一　木田しげ子

ないの？。」

「ハア。不幸處じやない。幸福だと思ふて居ます位なんだから……それでね、今思ふと、東京に居た頃が、つ全く夢の樣なの、田舍！、田舍つて一口に云へば、まらなく、何でもない樣だけども、人の心に虛榮と云ふ事もなければ、從がつて競爭もない、平和な――淸い四邊の事物に感化されて、妾は、眞の幸福と云ふ物は、平和にあると信じてるわ。今聞えてる水の音――蟬の聲だつて東京じや、あゝ可く水音――蟬の聲でも本統の音色は騷々しくて容易に聞わける事は出來ない位だもの。だから妾、小田の方が甚麽に面白いか分らないわ。」

「然うだろうか……妾なんかには……。」

「矢張面白く無くて？」

「…………。」

＊　＊　＊　＊

君代が平和だと云ふ夕の小鳥の聲に促がされて淺子は丘の麓で別をつげた。

久し振な、遠路をも厭はず夏休みを幸ひ、昔日の友を訪ふて、話したり話されたり、靈妙な詩界に遊ばふとの豫想は正反對に、田舍と都會生活の比較說を聞かされた樣なもんだと、シツトリと濡ふた青田の小徑を俛だれて力なささうに步をはこんで居る――と

岸……打つ浪は……繁々と……

美妙な調子が何所からともなく聞こゆるので思はず知らず、身をちゞめると心を引つけられる樣に感じる夕日はサツと黃金の彩を、自然の上にあたへる。すると淺子の胸に急に虛榮に滿々たのが恥かしい樣で……君代の身が羨ましくなると共に、目前の不平もいつか去つて、なつかしげに振返ると、淡やかに掩はれて、立つて居る君代の姿が幽かに見とめられる。

暑中休暇に歸省して田園の美を感じ、舊友の滿足を喜ぶのは誠に心持のよい話で、今少し、書放しを愼んで、力を入れたら申分の無い作になつたであらうと思ふ。（選者評）

秀逸

○うら表

赤阪新町　河村ふき子

影淡き瓦斯燈に、田原と記されたのを一寸仰ぐ樣にして、其儘冠木門を入つて行つたのは、年頃三十七八の華奢なステッキを持つた、鼻眼鏡の男である、

ガラリと格子戶を開けて、二三度訪ふてみたが何の答

もない、二階の方では、まだうら若い女の笑聲が洩れるので、先生少し憤然とした顏付！

『誰も居ないんですか！』

少し聲高に云ふと、今始めて聞ゑたと云はん許りにトン〳〵階子段を下りて來たのは、二十一二のでつぷり、肥ゑ太つた下女である、

『田原君は御在宅ですか』

『ハ宅でございます』

『そんなら木村が參つたと申して下さい！』

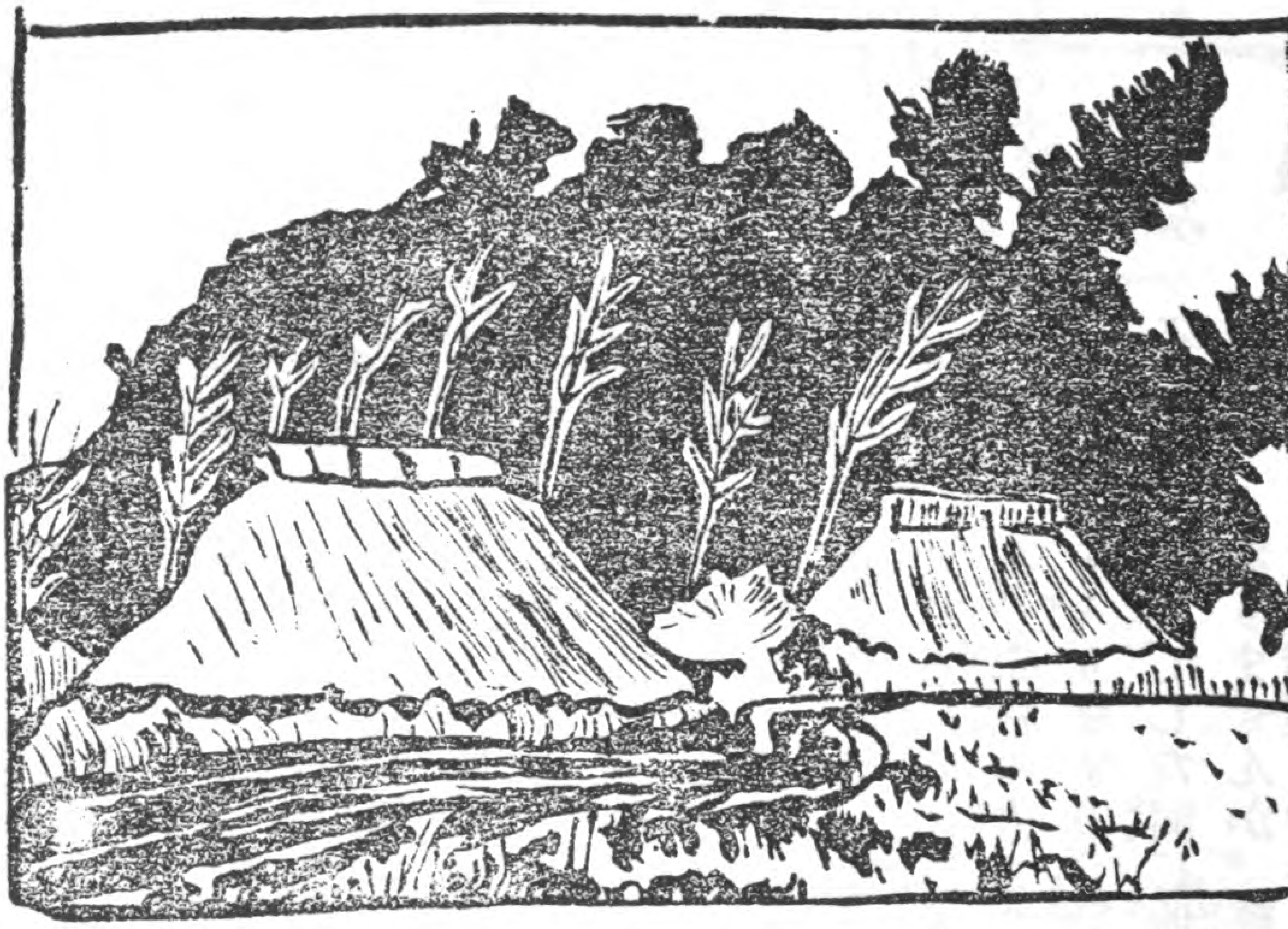
『はい』と其儘下女は立つて二階へ上る、暫くすると

『ウンそうか、是へ通せ』

『でもこんなに取りちらして有つては』

『何に、搆うもんか』と主人の聲がすると、

『さあ、何卒』と二階から聲が掛かる、鼻眼鏡先生さらばと許り、玄關口から二階へ上る。



鎭守森〔地賞〕　麻布區仲ノ町十四緖方　大手たけ子

八疊の室、西手に床の間を設け、應擧の山水の幅が掛つて、置物の虎は今にも唸り出しさう、南窓は明けられて涼しい風が軒傳いに吹く、据洋燈の下に胡坐かいて、酒臭い呼吸を漲らして居るのは、主人の田原清吉である、火鉢の向ふへは正宗の空瓶三本！

『あ木村か……』と輕く。

『何か用事か、左樣ぢや無い、まあ久し振で一杯やり給へ』と醉後陶然と云ふ調子で

『全躰、今の長官で御座い、やれ局長で御座いのと、風上に立つ奴ほど、氣にくわぬ者はない其の癖役に立つ人間は百人に一人だ、君の方でも『富』の解釋が出來ないつて、酷く面喰つたと云ふ會計課長殿も居るとか、は、、、、馬鹿〳〵しい、僕は公の場所では、至極眞面目だが、家に歸るとすぐ此の通りだ、何でも人間は

公私の場所を區別しなけりや、到底立いかん』
と酒の空瓶を眺めて、
『是あれば、浮世も何のそのだ、俗務に負はるゝ人間は、何うしても公の場所に立つた時と、私の場所へ立つた時と、別物に仕なければ不可ん、君も左樣だろうは、、、、まあ一杯遣り給へ、醉つて局內の人物を片端から輕蔑してやらう‥‥』
主人が滿々とついだ盃を、客の木村貞夫快よく受けて呑んだ
月はいつか檜葉の垣に登つて、窓から滴る樣な光を、投げ込んでいる、
此の二人こそ、○○省內に於て、誰知らぬ者も無い、精勤家を以て有名な、田原淸吉であるのだ、八釜敷屋を以て受の惡るい木村貞夫であるのだ。

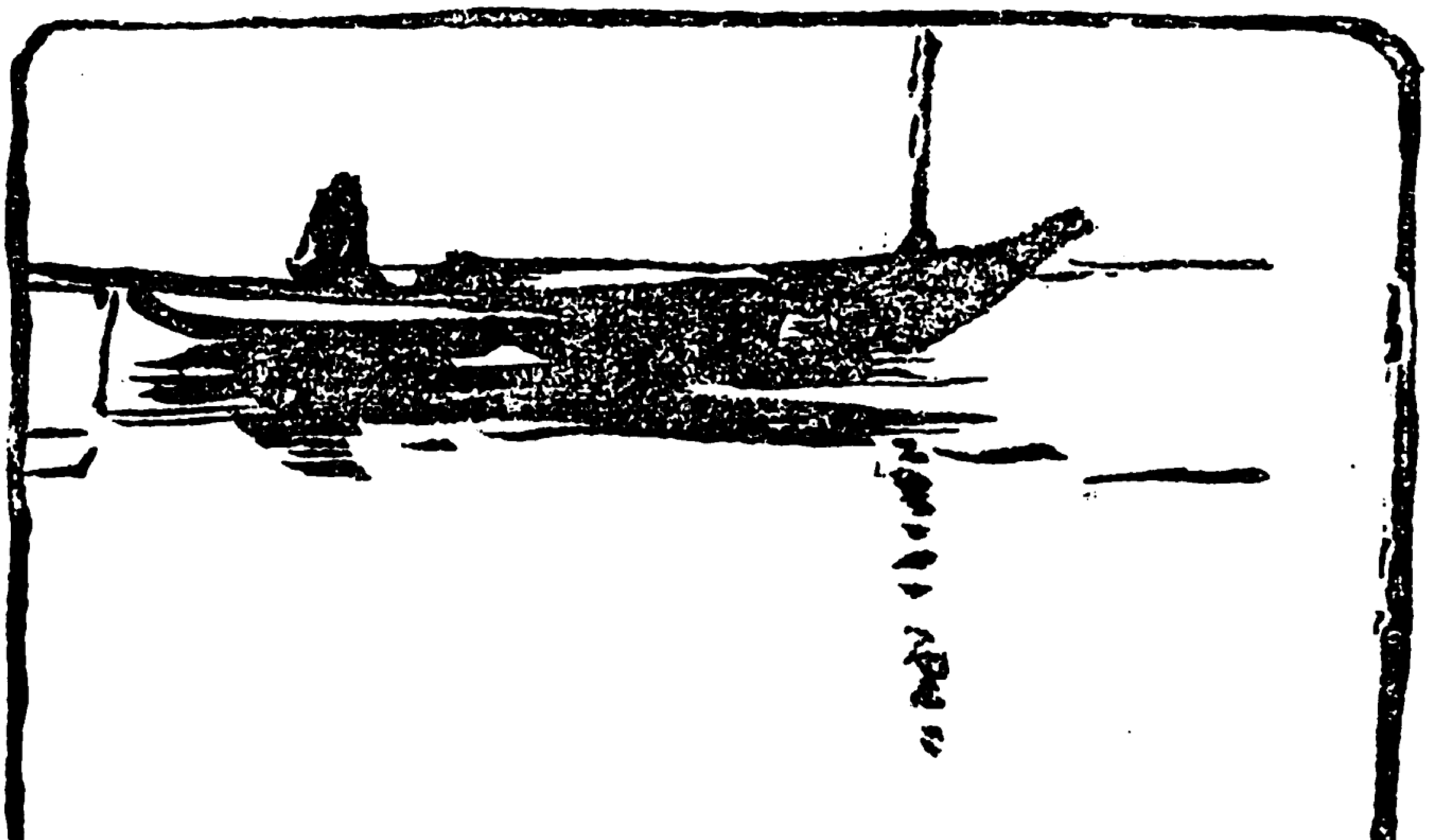
敍事が多きに過ぎて、本文の主となる處の短かつたのは難てあるが如何にも勁人氣質の一面は此通りてあらう、本誌の小說としては、寧ろ珍しい材料て、花やかてはないが、作者の小說氣は決して沒すべきものてない。（選者評）

○女記者

名古屋市　あざみ女

『其頃もう盛んに地の新聞で討たれてた通り、私の通學た學校なんかは本當にもう、それは思つたよりひどい墮落の仕樣で、それが貴女、單に私共生徒ばかしぢやなくッて、敎鞭を執つてらつしやる、その方からして、もう何でしたもの。
同じ級で姊妹よりも仲のよかつた露子さん——名丈申しますが、しかしそれも什だか分りません——その露子さんから、或日伺つた因果話が酷く私の心をひきましてね、始めて筆を執て原稿紙に對つたんて。それそれ名や筋を細工してね、何でも四五十枚も書けましたか——不圖其麽心が起つて大膽にも來春匆々東京から發刊するといふ雜誌の『文藝』の懸賞小說に應募しました、それが貴女、意外にも二等に當撰したぢァありませんか。又その評が中々でして‥‥嬉しとよりは吃驚なんて。今も其作を繰り返してみますに、自分ながら思ひ切た作て、極端に戀を謳つたものてムいます。
これと同時に露子さんからは郵便で絕交狀が來るでせう。學校の方では友の秘密を賣たとの影口が度々耳にも入りますの、居堪まらんで退校すると、さあ、私と許婚でした同じ地の某から結婚の破談を云ひ込だぢァありませんか。驚きましたのね、その方とは小い時からお友達のやうな仲らい——而し、許婚とは僞りの戀だ、破談は私の望む處だつて申しますと、頑固な父の

ことですもの――翌日私は一通の書を置き去りにフイ、、んです。と家を出て終いました、無謀の極でムいますわねえ、懸賞で得た僅計しの金を持て遙々上京致しまして、第一に訪問したが文藝社です。此の身を見上げ見下して意外の面地も無理はムいません、やつと其時十九に成た計しの子供なんですもの。仔細を語つて何か使ひ道があればと申しますと、其處にかの小說の撰者も居合せて、貴女、躰よく跳ねつけたんでせう、可い耻ざらしをしたんですよ。それから惱みに惱んだ揚句の果が、名は申しませんが或大家の門へ泣きついて、やつと門下となるとが出來ました。外の其家にゐらつしやつた三人の門下生は皆な男の方で、ある夜誘はれて〇〇敎會へ參りましたが、お宥し下さいまし、私は戀を知る身となりました。それは音樂學校の生徒さ



舟　〔入賞〕　紀伊海草郡和佐村布施屋　木村ひで子

その戀は成立して、四年の間同棲しましたが、遂その方は腦病で亡くなりました。貴女、其後の私は最う語るに忍ひません、種々と流れ流れて、今では此麽情けない、田舍新聞の記者の一員……。聞けば露子さんは、早もう今年五歲を頭に三人のお子持、私の約婚でムいましたその人は、年若ィ妻を殘して今は遼東の野に起臥してゐらつしやるとか……。女の新聞記者だなんて、今の私を他では隨分何とか云つて居るやうでもムいますが、誠につまらないものですわ、而し田舍は田舍丈、其丈氣樂でムいますよね。

はなか〳〵撰者（選者評）

女記者の身の上話、小說と云ふより、一種の諷刺談として諸孃の一讀を望む、撰者

○白百合

名古屋　中平文子

「よ姉さん、言つて頂戴な、貴女この間私を眞實の妹の樣に思うと仰つたでは無くつて、夫に左樣な秘密だなんて薄情いわ」

下も上も白布を覆うた床の中に同じく白のくゝり枕高くして、臥つてゐる廿年餘の、頰は瘦けたれど、病に色は拔ける程白く、切長の眼元に痛く愁を含んだ、凄艷の美人の手を取りながら、斯う云つたのは、十七八の氣高い少女である。

「雪江さん、有難うよ、つまら無い私を那樣に……死んでも忘れはしませんわ、あゝ其御親切に對しても、私決して謂ふまいと思つて居たのだけれど、……雪江さん……私はね、何うせ、最う二三日中に死ぬ身なんですからね、せめて最期の思出に皆言して——言して死なして下さいな」と言ひ終つてさめ〴〵と泣いたが軈て起直らんと爲て、浮良々々と又倒れた。

「あ、姉さん、お起なさるの？」

突と枕邊にすり寄つて、骨軌る肩に手をそへると、油氣失せて、轉た冷な亂れ黑髮が、ひやりと手首にこぼれた。

「何大丈夫よ」と艷然笑ひながらも、早や咳入つてかつと計、水色の絹手巾に時ならぬ紅の花をさかした、吁、是だもの、今朝迎へた醫學士が見ぬ前に、眉顰めて此夏はとてもと云つたのも、無理ならぬ事と思うと、雪江は又も、胸懷かれるので有る。

「雪江さん、此樣に爲て下さる貴女に……實に濟ま無いけれど、許して下さい、思ふまいと思へば思ふ程尙……私はね全く煩惱の犬に追はれてゐたのよ……吁、胸が痛くなつて來るからもう止しましやう、此上は何も言ませんから、雪さん是で皆察して頂戴」

是と言つて、內懷から取出した、紫のふくさ包、雪江は手早く取つて包を解いた、と、中から出たのは、一枚の寫眞とハイ子の詩集で有る、雪江は是がつ？と不思議く思つたが、寫眞を見てあつと計り驚いた、法科大學の制帽制服を着した、好男子の立姿、そは誰ッ、雪江には最愛の兄、否近き未來に良人となるべき保科芳雄其人であつた、

「房子さん、貴女の病源が是ですつて？姉さんては貴女は彼の兄を……」

「雪江さん許して……」と計り房子は雪江の膝に泣伏した。

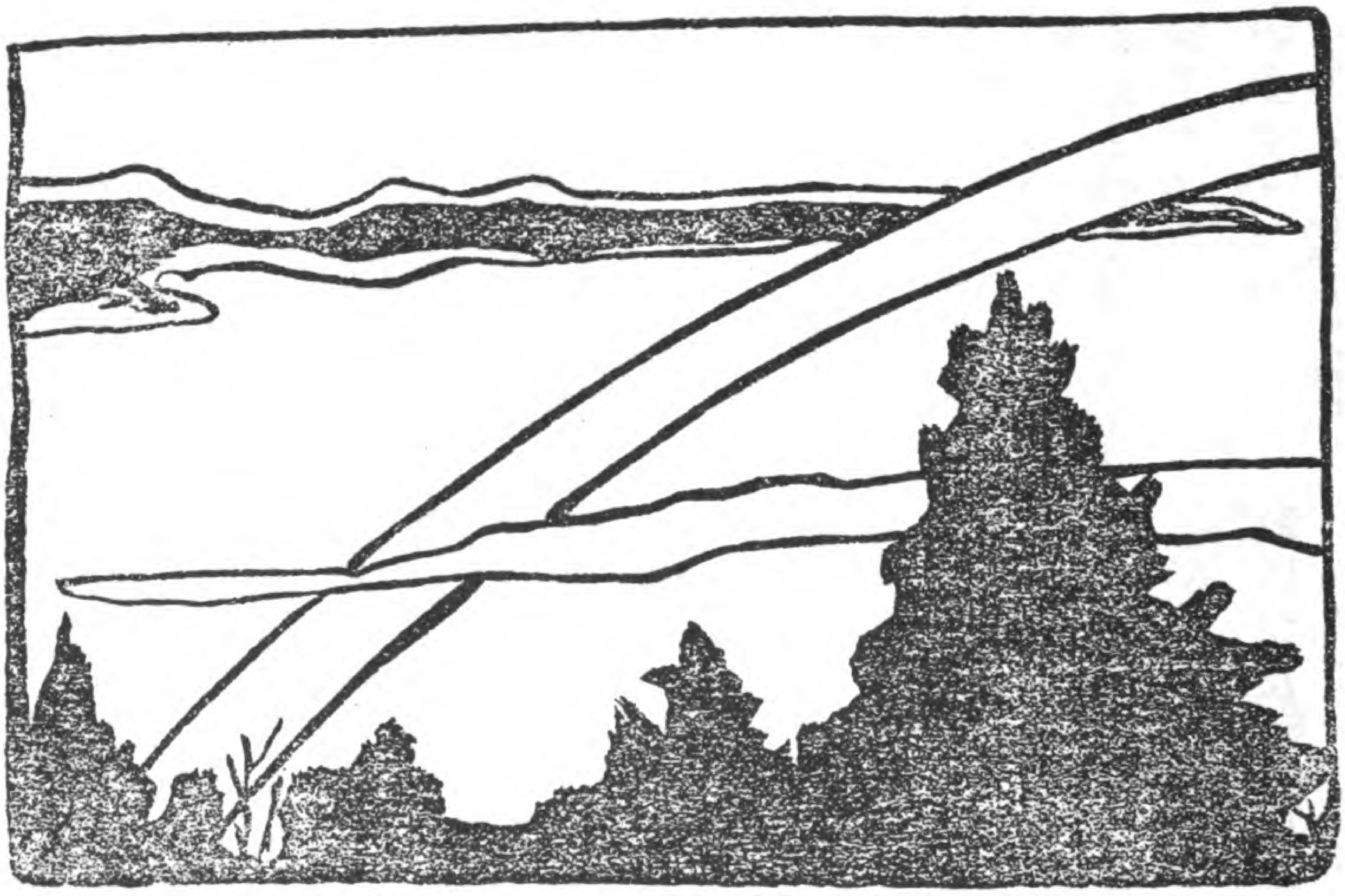
流石優しき雪江の瞳にも、只ならぬ色がさつと晃いたが、そは暫、過ぎし日いたく好めると聞いて、兄が送つたハイ子の詩集、吁其詩集、寫眞の主の爲に我無二の親友は明日にも死の國にいつて仕舞ふのか、吁それも我ある故と思ふと、瞬間、雪江の瞳には前よりは一層清く優しい光が輝いて來た。

「姉さん御安心なさい、私兄に左樣いつて必ず貴女のお志を遂げさせますから、否私の事なんか宜ござんすわ、私は貴女が早く快くお成りなすつて、私の眞個の姉さんになつて下さる事が出來れば、最う那樣な嬉しい事は無いのですわ」潔よく言放つて、そむけた雪江が面輪の十八の若き眉の曇……吁そは終生再び消ゆる時は無かろう。

房子は「雪さん!!!」と計雪江に犇と取縋つた、而して二人は言葉も、涙も無いのであつた。

恰度其時邊の花瓶に挿してあつた白百合が、はらりと一輪落ちて、高い香が馥郁と二人をつゝんだ。

（幾度も見た趣向で新しくはないが、あはれに書きなされてある、「十八の若き眉の曇……あゝそは終生再び消ゆる時はなからう」一語、深刻を極む（選者評）



虹〔賞外〕　兵庫縣住吉村　山木梅子

○姫百合

大阪南區　つゆ子

「お父さま、まことに申し惡うございますが何卒あの事ばかりはお止めなすつて下さいませ。」と涙を流して頭を垂れたまゝ、から云ふたのは當家の娘高子である、火鉢の正面に悠然と座つて顋を撫でて聞いて居るのは主人で、郡長を務めて居る。

「今更何を改つて云ふのだ、俺が宅へ妾を入れたとて

何もお前等が喧しく云ふ必要もないぢやないか、また芳から何か敎はつたのだろう。」

「否、妾お母さんから何も敎はりはいたしませんが、妾だつて他人から色々と云はれるのが辛ふございますし又お父さまからそのような事を爲すつては下々の人までがついそれを見習ふて……」

父は少し顏色を更へて、

「見習ふたつて別に差支ないぢやないか、畢竟俺にそれだけの力があるからするのだ、日々うるさい務ばかりして居るものは他に快樂をもつて命の洗濯を爲なけりや續くもんか。」

父の無謀の言を聞いて高子は呆れ顏に、

「道理はそうでムいませうが、萬一お職分にでも障りは」

「ナニ、職分に障る、馬鹿らしい、フヽン、此郡ばかりが日本ぢやあるまいし、何も子供の知つた事ぢやない、お前は默つて居れ、」と語氣は益々高まつて來る、

高子は流るゝ涙を拭ふて尙も語をつぎ。

「そう仰しやらずに何卒、お願でムいます」

「エイッ、いつてい奴、默つて居れと云へば默つて居れッ」

畢生の勇氣を出して父を諫めて一言の下に叱り付けられ悄然とわが室へ歸つて來た高子は机に身を倚せ掛けたまゝ、種々の事を考へてその小さき胸は千々に亂れて止まぬのである。——

吁、父上は何故にかくも道ならぬ事をなされるのであろう、聞くさへも忌はしき蓄妾、あれで一郡の長たるものゝ行と云へようか、況して今その妾を宅に入れようとは、……それでなくとも惡評は、尙ほ一層度を高めて、遂には身を過られるような事になるであらう、昨日も學校で先生がそれとなく父上の事を罵られた、その時のわが心はどれ程辛かつたか、やさしい母上はどれほど心を痛めて居られるであろう、人なき折々は泣いて居られる、常から弱いお身にもしやお障りでもあつたならばどうせう、之も救ふの方法はたゞ父上のお心を改めしめるより他にない、と云ふてどうしてそれができよう、今日少し云ふてさへあのように怒られたではないか、尙ほ此の上に强ひて諫めもしたならばそもどうであらう、もう此の上は小さき折、母上から敎はつた昔咄に慣ふて、この身をなきものにして諫めよう、さうしたならばよもや父上も……それこそ最もよき方法である。と云ふてもし妾が死んだならば、母

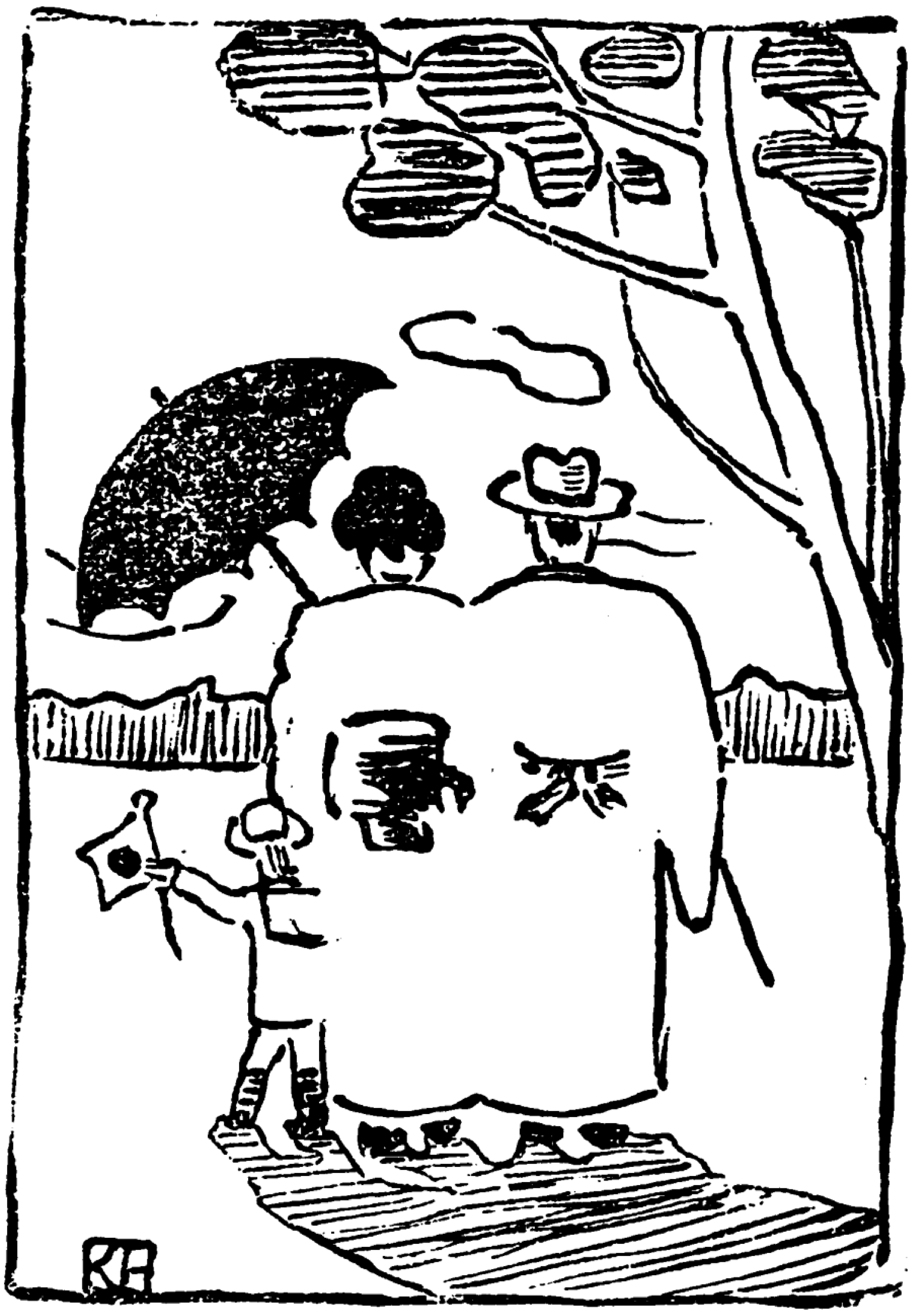
上のお歎きはいかばかり、尚ほ此の上に憂の數を增しはせぬか、然しこれによつて父上のお心が改まるような事になれば又安心もなされて、その悲しみも少しは薄らぐであらう、一つは母上のお心を安めん爲め、一つは父上のお身の爲め……先き立つ罪は深けれど、何時盡すも孝は孝、み親の爲とあれば露惜まぬこの身、今宵こそこの身を捨つべきの時、ア、死なう。——

死なうと決心した高子は辛ふじて墨すり流し、はふり落つる涙を拭ひ拭ひ、ようやく一通の遺書を認めた。

高子は或る里川の畔から身を投げんとする時、後から走りよつたる一個の黑影、危ふく抱き留られた。

＊　＊　＊　＊　＊

その後、高子の父の行は斷然改まり、その家庭には花が咲き、衆人の尊敬も加はつた。



日曜日〔賞外〕　麻布區霞町　廣津和枝

別に奇拔な趣向も求めず、ありさうな事をすらりと綴つてあるだけが、一種女性的觀察の人を引きつける處がある（選者評）

○飛鳥川

神田區　大澤隆子

『若し貴孃は花子樣じやあなくつて、如何も餘り能く似て入らつしやるから……』夕昏の色迫る日比谷公園の白銀の細線迸る鶴の噴水の汀で令孃は、青葉蔭のベンチに身を凭せ思ひに沈める美人の潰し島田首ぬぎ浴衣の意氣姿に目を睜つた『おやッ靜子樣！』彼方も亦驚の眼で見遣り、眞實にお久振りだわねえ、何だか夢の如ですわ』と嬉し氣に云つて、ふと其しどけなき服裝を見顧り乍ら恥しさうに差し俯向く。『花子樣其後貴孃はどう遊ばして、眞實に私逢ひたかつたわ。』靜子は最早淸しい眼に白露を宿し懷し氣にすりよる。『靜子樣お懷しくつてよ』と彼女も潤み聲で『月日の立つのは早いものねえ、お別れ

して以來最早一年の餘になりますね。お話しするもお恥しい現今の境遇‥‥あゝ去年の春樂しい前途の希望を胸にゑがいて、伯父と一緒に出京したのは、實に終生の誤りでござんした、思へば貴孃もお好のあの東雲の曲、（淵瀨定めぬ飛鳥川、變れば變る世の習ひ人の身の常なさ‥‥）と無心に奏てましたが、今となれば自己の上を歌つたのではありますまいか。あゝ伯父は見掛によらぬ冷酷無情の腹黑い人でした。兩親に死別れてからは只一人杖とも柱とも賴みにして居た兄が戰死を遂げましたので涙に咽び唯々途方にくれてゐた私に花やかな都の光景を聞せて心醉せ、兼ての望み通り女子大學に入學てやるなどゝ云つて喜ばせ、甘々と年端の行かぬ私を欺し吉野家祖先から傳つた財產を橫奪し其でも飽足らずに私の身躰迄も浮む瀨のない悲境に陥し入れたんですもの、靜子樣嘸おさげすみ遊ばすでせうが私は三筋の糸をかきならし浮れ男の機嫌きづきをとらねば成らぬ賤しい〳〵藝妓に賣れ了ひましたの。表面で笑つて心で泣くとは現今の私の身の上でご在せう。如何に世間見ずの私でも有繫に伯父の惡謀を悟つた時は實に口惜しく腹立しくて兩の袖をかんだまゝ身も世も忘れて泣きました、如何に悲歎いたとて誰が慰藉めて呉れませう。地下の御兩親樣は私のこの淺猿しい姿を何と御覧遊ばすでせう。せめて兄でも生在てゐたら‥‥懐しい故鄕にゐた頃は學校でも諸孃に羨ましがられた程貴孃とは大の仲好で相互に喜も憂も分ちあひましたものを、あゝ今は‥‥？斯樣思ふと堪らなくなつて、常も幽靜な此池畔へ來ては、ほら貴孃とよく行つた白百合の咲き亂れてゐる丁字ヶ池の汀紺碧の水面に臨んで綠の夏草を褥として詩集を繙いたり、月の淸い夜はヴアイオリンを彈いて諸共に歌つたりした戀しい當時を追想ては花の如な貴孃の面影を幻とゑがきあの頃は兄も居て‥‥などゝ思ひ浮べてはせめてもの心遣りと致します。思ひ切つて情けない有樣をお知せし樣と思つた事も幾度でしたらう。雖ど自己の身を顧みるといかにもお恥しくて終氣怯れがして姉妹も及ばぬ程親身にした貴孃にさへ打明け兼ねたので在ます。靜子樣、御免遊ばせ今迄の失禮は幾重にも、鳥唄ひ花が咲いたとて何が樂しいてせう何が面白いてせう私には皆涙の種星の如に輝てゐた希望は花とちり雪と消えて私の胸には唯煩悶と懊惱とがある斗りです。あゝ憂世はこうしたものでご在せう。今更伯父を恨んだとて追附きません皆私が愚な斗りに斯ちなつたのですもの

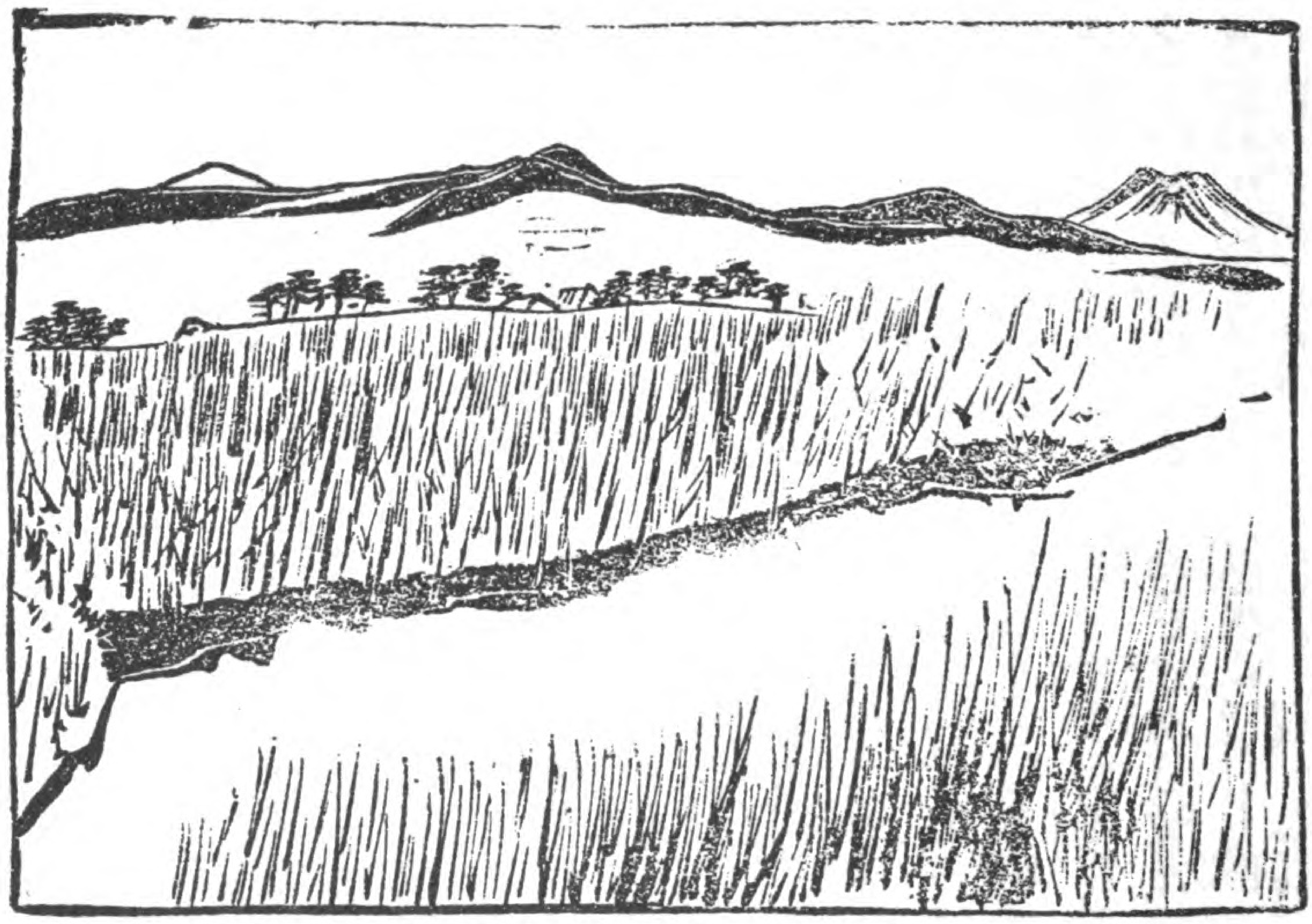
私が至ぬからこそ欺されたんですわ。此頃ではもう自暴自棄女の身のあられもない御酒を煽つて我儘三昧、泣いたり笑つたり怒つたり鬱いだり：：まあ此樣事を申上て貴孃は嘸阿婆擢女と爪彈き遊ばすてせう蓮葉女とお嫌ひ遊ばすてぜう。雖ど――心ばかりは過去と變らずに淸いつもりですわ』斯う云つて花子は淋しく笑つた。

日比谷公園のベンチに於ける一片の物語りとしては、あまり。こみ入り過ぎて、わざとらしいが、又之れ一篇の悲劇、花子の物語の間に善く彼の性情を表はして居る。(選者評)

○しがらみ

鎌倉　磯崎あさ子

『貴女お寒かなくつて？』十七八の美しい海水帽子が匍匐つてる十八九の品の好いのに、燒ける樣な砂をかけ乍ら、一寸首を傾げた。



麥畑〔賞外〕　越後吉川村　長戸敏子

『否え、一寸も』と沖の白帆を恍惚と眺めたが、『一寸く何て好い月和でせう、妾氣が爽々するわ』と柔しい眉を一寸昂げた、後の松が磯臭い風に面白い音を立てゝ居る。『貴女先刻のお話ね』と匍匐つてるのが居突に海水帽を見上げた。『えゝ』と海水帽も雫する後毛を掻上げ乍ら横になつた。

『一體妾にお願だなんて、甚麼事？え文字樣』

『別に何んでもないんですけれど』妙に言ひ淀むで赤くなつた

『貴女餘りよ、妾に別け隔てなんかして』

『あら、怒つたの？え俊江樣、ちよいと堪忍して頂戴よ、妾其麼氣て言つたのぢや無んですから』

『さあ何ですか仰有いよ、妾貴女のお願ひなら何でもきくわ、否え眞個よ』

『まあ眞個？急度かえ、だけど妾何だが羞しくつて』俊江は推し得たりと樣に揶揄半分。

『貴女、妾分つてよ、ね當てゝ見ませうか、え、好い方がね…ほゝゝ出來たんてせう』と覗き込む。

『あらつ』と口籠つたが、双手を顔に當てゝ砂に突俯した。綳れた鬢の間から見える耳朶が非常に赤い。

『さ、早く仰有いな、妾に出來る事ならきつと骨折るわ』海水帽の文子は嬉しさに莞爾して。

『えそりや貴女が何して下さりやきつと…』と言ひかけたが急に氣を替へて『妾皆言つちまふわよ、笑つたり何かしちや厭やよ』

『誰が笑ふ者てすか、貴女も餘程變ね』

『え、變よ是れが變にならずには居られないわ』と言つたが我乍ら端ない言ひ方にハッとして、周章てゝ。

『貴女の御存知の方よ、分らないつて？そら重雄樣』

『えゝッ』俊江はギヨッとした。初は自分の耳を疑つたが然し文子の重雄に戀してる事は事實であつた。

『妾此頃はちつとも寢やしなくつてよ』眼は濡れてる

『まあ其麽にまで…』と之も眼に露が閃めく。

文子の戀人が重雄！と聞いた時は、自分の戀の敵だ！と思はれて、少からず厭な感じをした俊江も今は文子の心を察して、寧ろ憐れてならなかつた。

文子と俊江とは同窓の友、今では眞身の姉妹さへも及ばぬ程の中てある。俊江が父に連れられて避暑するについて文子も誘れたのだ。

七十何度といふ暑さが毎日續た八月の初旬、俊江の從兄の重雄が試驗の重荷を下すと直ぐやつて來た。

重雄は廿才の上を二つのキリッとした青年で家は其日から陽氣になつた、が併し文子のみは反比例に益々沈むて行くのであつた、蓋し文子は十七にして初めて戀の如何に甘きかを稍知り初めたのが、爾來二旬溢るゝ思ひの包み切れず今日しも俊江に切なる思ひを明かしたのてあつた。

俊江とても同じ思の彼に優る共劣りはしない、口にこそ出さね、擧動にこそ見せね、忍ぶ戀路のつらさ儚さを小女心にしみ〴〵と、此二年に嚙みしめた今、文子にかくと打ち明けられて、一時は驚きもし怒りもしたが、文子が不常の氣心も思ひ遣られて、出來るなら此戀を成功させたい…といつて自分の戀を捨てるには忍びぬ。…否々自分は戀の虜とはなつても奴隷とはならぬ積り、潔く思ひ切つて…と、

『文子樣、妾引受けてよ、安心して被入い』餘り聲か

高かつので、文子はどきまぎしたが。
『えッ眞個？』文子は俊江の手を犇と執つて泣いた。俊江も張り切るゝ思ひの、今は不覺の涙が溢るゝのであつた。沖を白帆が夢の樣に通つて行く。

此スタイルの如き小說、最も多く選者の許に來り取捨に困ることもある、此篇の如きは比較的垢拔がして居る。(選者評)

○夜半の鐘

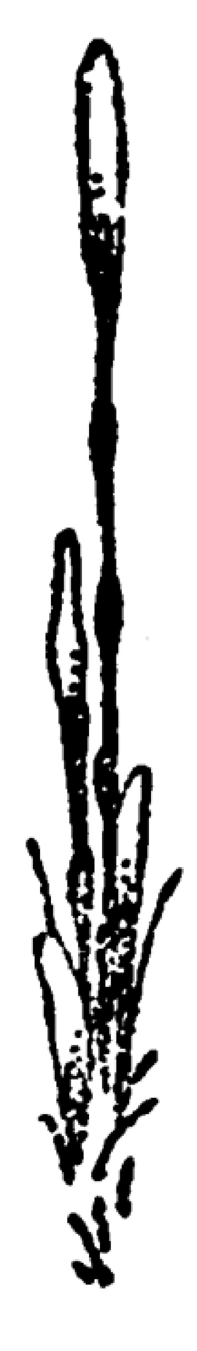
栃木　春野花子

或る淋しき町端れに寺あり此寺にいと大なる釣鐘ありて夜の十二時に鐘をつき寺のほとりの町に時を知らすなり今しも寺小僧時を告げんと外に出て空を眺むれば一面の黑雲今にもなにかでゝくるやう、かすかに見ゆる高き堤岸に長高く色あをざめ髮はみだれ手足は糸の如く實に此世の者とは思はれぬ女が來たる樣子にて其女小僧の前に來て「小僧さん御前今夜この鐘をつくのかい」といとひくき聲にてとへば「はい私はこれをつく番であるから今つこうと思ふて出てきたのです」女いたく困りし樣子にて「それではつくのか吁だめだ」と獨言を云ひ居たりしがしばらくして「御前御願だから今夜一晩つかないでくれないか私の夫は仔細あつてアレはるかに見ゆる牢屋に居る今やこの鐘をあいづにくびをとられてしまうのであるからどうぞつかないで下さい」と泣きながらの願ひ
「御前さんの話はわかつたがわしがつかなければわしがひどい目にあいますもしこの鐘がならなければ此近邊の人はいつまでも仕事をして居る御前さんを助けて多くの人からうらみをうけるからつかないわけにはいかない」「あそれではどうしてもつくのか」とあつちこつち步みいたりしが固く決心せし如く釣鐘のある所へ上り行きたり

＊＊＊＊＊＊＊＊

牢居の役人は「ハテどうしたのであろうもうなりそうなものだが小僧なにしているのだろう」といつまでまつていてもならないので立腹して寺に行き小僧を叱ればいくらやつてもどうしたのだかならないのですと云ふたので上り見れば誰ともしらぬ一人の女、髮はみだれ、身には血流れて死にいたり釣鐘をいだきて、これ眞の心より出でたる死ならざるや。

何か西洋もの丶飜譯ではなからうか、事實の奇、稱すべし。(選者評)



はがき文

編輯局選

天

○雛子

伊豫　深山女

三日前に、孵化たばかりの、雛子九羽、餘りの可愛さに、見惚て居ると、親鷄の翼の中から、首丈突き出して居る雛、親の羽を、つゝいて居る雛、餌を爭てる雛また、踵で大人振てる雛等、それは〳〵可愛い。

雛もあなたのやうな方に養はれて幸福です

地

○苺

牛込　玉籬子

人は花見に急ぐ頃、私はうらの畑の一番日當りの、よい處へ、苺の苗を植ました、そうして毎日丹精しましたので、今ではそれが眞赤に熟し、敷いた藁の上に、重たそうになつて居ます。

教訓あり、詩趣あり、僅に四行の文字、然かも人を感動せしむること無限なり

人

○あれよかし

備後國比婆郡帝釋村　市岡まさ子

無くて叶はぬものは凡てですが其中でも物を得ようとした時のお金と書窓の生花とブックの栞と燒卵やこしあんの砂糖と雨降の傘と束髪のリボンとそしてあの肴のおつくりに青物の劍が附いて居ない程殺風景なものはありませぬ。

あれよかし、あれよかし、實にハガキ文に此種の文字もあれよかし

秀逸

○霧

磐城　石井翠子

向うを通るのは誰でせう? 後姿は浪子樣らしいが、あら此方を見て! 噫霧よもつと深くなれ。妾は學生姿の方に逢ふと、どうも昔の事が偲はれてなりません、此田植姿を恥かしいとは思ひませんが。

田植姿の一句あつて、情景活躍

○嬉しい事

芝 宮崎久子

先生に御褒美を頂く時と、運動會日曜に日比谷公園へ行くのと、繪葉書を戰地へ送るのと、幅の廣いリボンを掛るのと、内の玉が鼠を取つた時と、夫から毎晩父樣や皆なと種々の御話しながら、御飯頂くのが、私一番嬉しいわ。

作者の家庭の樣子も能く分る、斯云ふ時代は何でもうれしい

○女子文壇を夢む

横濱 いちじく

「姉樣々々私のが當選しましたワ、うれしい、今夜は抱いて寢よう、いや美しい口繪が皺になるか知らむ」愛妹の今宵の夢如何に樂しからむ。

果報なるかな女子文壇

○水

越後 小柳滿汝

大海に有りて、日露の軍艦を、浮かせるのも水、我庭を美にして、金魚を養ふのも水、深山の細い谷川を流れる水も水、毎日食る御飯を、煮るのも水、字を書くのも水、殊に妾の大好な草花の露も、水の中である。

殊に妾の大好なと斷はりしだけ嬉し

○なつかしいもの

酒田 池田紫楓女

摘書の時間に先生は崩した字を示しなされて御問ひなされましたが誰一人知る人もありませんでしたのに皆さんはこれをきくと慕しいと思ふものだと云はれたので異口同意に故郷と叫びました。

書かずに聞く方が早かつた



上野妙義山旭嶽

○朝

淺草 石原薔薇子

東の空は白み渡り鳥は塒を離れて餌を漁り、牛乳新聞配達は街上を東奔西走、工場通の男女は三々五々、小僧下婢は岡持味噌漉を携へて勝手の使ひ、豆腐納豆の聲、巡査はねむさうに、電車は七時まで割引。

大都會活動の序

○父の酒　下總　飛田あき子

是れ迄父様は毎晩二合づゝ酒をめされたが妾が恤兵部へ獻金するといつて毎日學校から歸ると草履を造るやうになつてからは一合づゝになさつたよ。

德孤ならず必ず隣有り

○いやな物　越後　藤本小女

女の眼鏡、男子の指輪、夏草のしげみに蛇の姿みとめたる、己が歌の人の歌と暗合したる、待ちし友の來ぬ、己のみ郭公の聲聞き洩したる、滊車に乗り遲れたる、花見の催しなれるに雨の降り出でたる、澁茶のぬるき、海苔の香の失せたる。

海苔の香の失せたるが最も奇抜

○人間再生論　金澤　いばらがに

姉様私はね、人は哀れな露人で死ねば樂しい日本人に生れ佛人で死ねば英人に生れると思ふの、そうでないと神様は正直で公平と言はれないわとは可憐な増子が説である、あゝ幼き頭腦にも幾分の眞理あり。

ダルウインの進化論も三舍を避けむ

○師の君の恵　羽前　梅村ます子

くれ竹の世の中には、師の君の恵みほど有難きものなからん。師の君は一字も知らぬうちより我等をして正道にみちびかんとて心をつくして敎へ給ふなり、あゝ有難くうれしきは師の君の恵みにこそ。

眞率の文、一字も犯すべからず

○蠶　新潟　熊倉歌代子

妹と樂しんで居りました八十八夜なので蠶の種紙を開けて見ますとおや〳〵愛らしい蠶が澤山生れて居る直ぐ妹と桑をつみに行きまして語り合ひました、まゆに成たら少々の御金でも恤兵部へ寄附しませうよと。

擧國一致

○眞の嬉しさ　兵庫　柳田のぶ子

姉様お待兼の女子文壇が。早く御覽んなさいよ出て居ますよ。そらこゝにと云ひますと姉様につこり。嬉しい嬉つて。いきなり御本をお顔にあてゝ。お机の上にうつ伏してお仕舞なさるのよ。

一寸貸して下さい、イヤはなしません

○女學生の移轉　府下　さかゑ女

男學生の下宿がへはよくあるが之は女學生の下宿がへ妾は小さき荷物を持ち友はランプ片手に人力車のあとより二人で歩み行く内男學生五六人にヤア女學生の下宿がへだといはれた時のきまりのわるさ。

風俗畫の新題

○目鏡　　福岡　池田秋水

目鏡目鏡實に重寶なものだ、片目は此れを以て兩目と見せかけ、學校の教員は學者ぶり、官吏は紳士ぶり、學生は勉強家ぶる然し近眼は少々容捨もなるが無度の目鏡は少々恐れ入る。

お口のわるい方よ

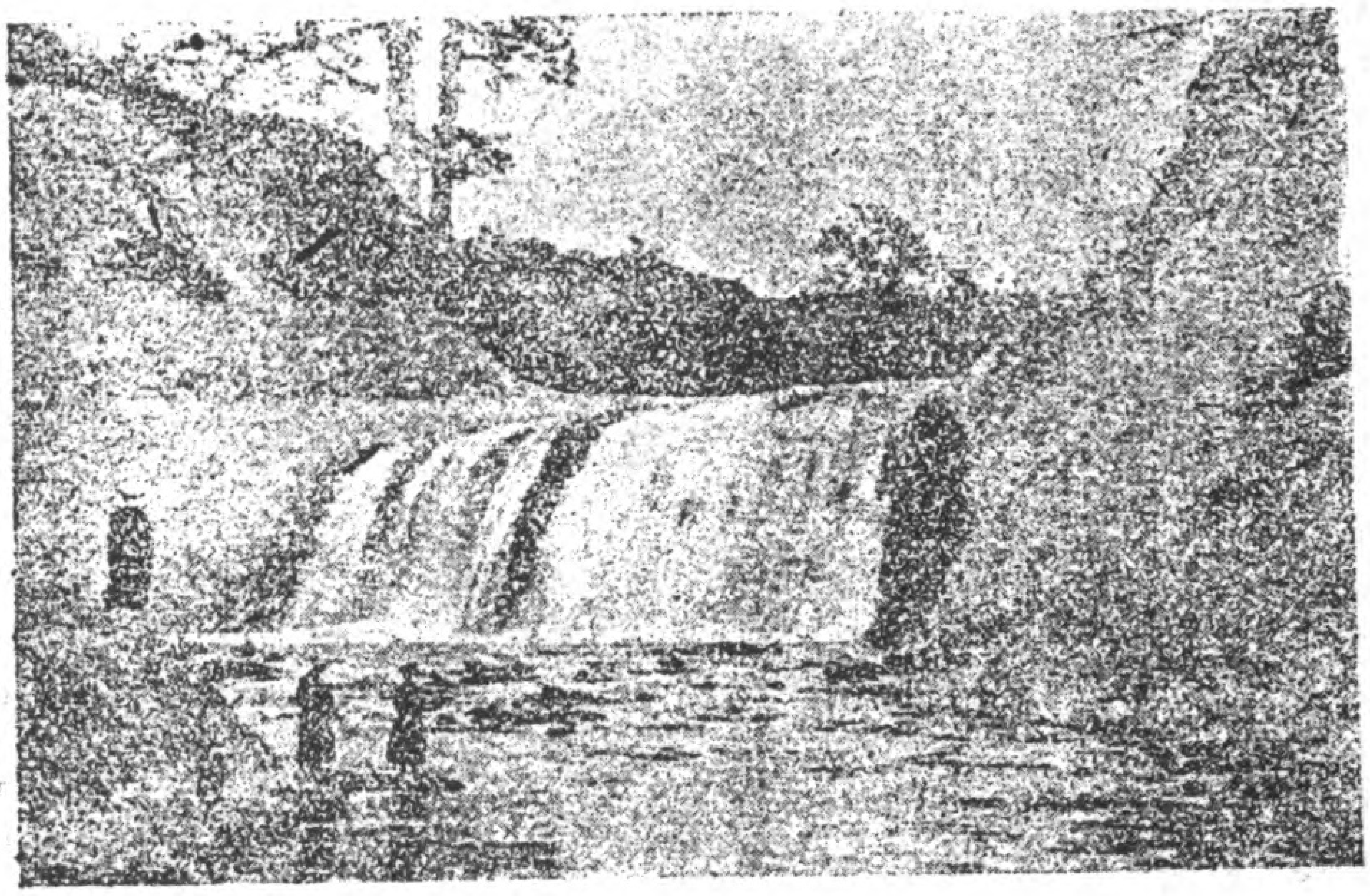
○運命　　埼玉　ほたろ

私はこの二字に散々泣されながらしかもこの二字に慰められて、強て何もかも諦めて居るので御座います あゝ運命は、實に私の憎い仇であつて、そして又私の無二の友なので御座います。

理外の理

○初節句　　鳥取　上山千重子

戰捷國の男節句、ましてお初のだから心計りの御祝がして遣りたいけど、御父樣の御遺骨さへ到着しない今日、坊や母樣の心を察しておくれと表を眺めてむせぶ



北海道膽登別瀧

奥樣、懐の子は無心に笑つてゐる。

新聞以外の時事的美文

○襦袢　　千葉　揚子

昨日から縫ひ初めた、赤い鴛鴦のついた富ちやんの襦袢が母樣の御手傳で、やう〳〵今日仕上りましたので早速着せて見ました……おゝ可愛らしい事ッたら……思はず抱き上げました。

女子ハガキ文集に一篇はあるべき着想

○はだか　　周防　寺内あまつき

人が若し裸躰になつたら、之れくらゐ神聖な、神の子のやうなものはあるまい。若し凡ての人間が裸躰になつたら、裸躰以外に作る罪がないやうになるだらう、香水も白粉も美服も入るまい。

啓硯廬の問題なり

○今朝の地震　　岡山　大村ますの

あゝ最前の騒ぎはどこへ消たらう、舍は全く無人の様だ、あ自若として動じなかつたは我室ばかり死なば諸共と手を取つて寐た枕元には櫛鏡 袴 足袋等が並べられた、しかし今夜は地震がゆるであらうか、今朝の様に。

地震のゆッたあと、盜賊のはいッたあと

○お料理　日本橋 橘本辰

あら！清ちやん！そんなことをしちやアいけない子、まあ、妾の小刀なんか持出して金魚の御料理して居るんだわ。

○幼な心　武藏 山下要人

「印度の女は靴墨で御化粧をするんだとさ」と口の惡い兄様にあてこすられて、今年十になる琴ちアんは幼な心にも恥しくてか臺所へ行つて獨りてシク／＼泣いてゐる。

○五月雨　本郷 山下常子

降りてはやみ、やみては降りつる雨に、山梔の花も殘り少くなりぬ、されど戀近き梧葉の綠ひときはまさりてほこり顏なるもをかし、颯と吹き出でし風に、黄色の梅子泉水に落ちて、雨またはら／＼とふり出でぬ。

○穴のあいた蚊帳　靜岡 たか子

君ちやんは朝起きて「母様あのれーわたし昨夜こんなに蚊に食はれてよおうちの蚊帳は穴だらけなのよきつと」。父様と母様は顏見合せてお笑ひてしたが君ちやんはたいそう眞面目てした。

○夏の夜に　羽後 鈴木しゆん

夕方からは雨もやんだ、けれども、その雨の爲に、水かさをましたせいてもあろう、ごう／＼とひゞく、其벽川をへりどりて、電氣燈のやうな大きな螢が、時ならぬ花を、ヒカーリヒカーリ咲かすのであつた。

○あゝ妹　長門 大坊勢以

何たか心細い夕方、此間病氣で國へ歸つた妹の事など案じて居ると、雑かて妹が愛して居た牡丹の花、風もないのに、そと頽れた、餘り氣になるので其夜、病狀伺ひの手紙を認めて居ると突然電報。

○けしの花　雲州 白すみれ

風もないのに女神の樣な白いケシの花は、スッカリ、蕚から離れ落ちて了つた。そーすると窓から白い蝶々がひら／＼と入つて來てさも悲しさうに飛び廻つて居る。

○春雨　小石川 服部けつ子

數奇屋につゞく飛石のあたり、青苔の所々に咲くは赤き、眞白き葉牡丹の花……パッと小雀のむれたつところ、春雨絲の如し。

○姉君　麹町 賀数代子

少し氣分がわるいと言つて、眞白な手て胸のあたりを抑へ乍、美しい眉根をよせて、欄干にたより遊した姉様の美しさ。忘れやうとしても忘られませぬ。噫。其の姉様は、今、神の御國に、何していらつしやいましよう。

○俊ちやんと雀　岐阜 木村貞子

今年八つになる俊ちやんは極惡戯て、此程も軒端に巣ひし雀の雛を六つ取りました、一羽過つて踏殺まして、アラ姉さん一羽封死しました、お墓を建てゝ遣ませうとて細かなる墓をしつらへて遣ました其石碑に「嗚呼忠臣雀忠兵衛之墓」

○紅薔薇　名古屋 中平文子

去年緣日て買つて來た紅薔薇、庭の隅に植て置いたのが、餘り美しく咲いたから、一輪折つて隣の美い樣にあげると、あの可愛い目にさも嬉しげな色を表して、姉様、有難う之れ母様大好きだつたわ、私今からお墓へもつて行つてよと、につこり。

○白百合　日本橋 植松ひさき

庭の白百合が咲きましたので妾はその花に赤いインキで姉さんのお名と武雄さんのお名とを書いて姉さんにあげたら姉さんが、まあ、つて！

○恐ろしい顔　名古屋 山田とし子

「姉さん恐い事」と勝子は我が胸の痛き迄抱き付いた。聞けば、「でも茂さんが恐い目て靑い顏して物も云はないて池の向ふに立つてゐらしつた物」、直ぐかけ出して見ると果して然り、茂様!!、懸に沈むて子供の可愛らしい事も忘れた茂様。

○愛子が口から

下總 北川よれ子

姉さん〳〵、この繪筆を彼所の小川て洗ひましたられ赤い色や白い色が筆から出てれ、そして傍に菫の花が咲いてゝよ。

○ポチの病氣

豐後 田能村ひさ子

淸さんと仲よしのポチが今朝から不意な病て好物な肴や御飯もたべないて居ると淸さんが心配のあまりお乳も菓子もよしてしまつた。

○夏の夕

常陸 霞 義子

夕陽は西山へ沈んで里は夜の女神の手に被はれた妾は涼みがてら公園に散歩した、寂寞を破つて聞える螢呼の歌ホ ホ螢こい其方の水はにがいぞ此方の水は甘いぞあゝ愉快な此歌? 妾は覺えず聲する方へ歩むだ。

○虹

常陸 酒葉しづく

流れる樣に降つた夕だちが今は殘なく晴たので、妾は庭に出てあたりの景色を眺めて居りました、すると向の山の上に奇麗な虹が出來ました、五つになる淸ちやんは『私にあんな帶買つてお吳れよ』と云ひました。

○霖 雨

滋賀 石井琴㨗子

蕭々と小やみなく降る此頃、紫の雲を見た事が御座いません、ですが草木に美はしゐ玉を置き、そして充分な發育をさせるのだと思ひますと少も辛く存じません。

○花

遠江 河村咲子

草に化すると書て花であるか、妾は此の花なる字を讀て一種いふべからざる感を惹せり、我が忠勇なる軍人が、君のために身を滿州の草に化したるは、是れ我國の美花てある、早く此の花に實を結ばしめん事を。

○虹

茨城 高田ひて子

あら〳〵虹々、虹が出たから來て御覽、秀ちやんと云ふので御座敷の障子もろく〳〵しめずに出て行て見ると、おつと早く見ないから三時になつちまつてよと、からかわれて、悟らしいことね。

○女學生

金澤 森井せき子

紅白取りませて三枝、小花のつゝぢを持つた女學生が今し、○○醫院の門内を見るやうな見ぬやうな目付て通ると、柴折り門の蔭に立つて居たりゝしい顏の書生が思はずクスリ、さつきから幾か是て三度通るよ。

はがき文に就いて

本誌のはかき文が逐號盛んになるのは、選者の欣ぶ處で、投稿數の多いこと、秀逸の多いこと、本號の如き秀逸中にはなか〳〵面白いものがある。優にハガキ文學專門を以て稱せられる雜誌に、勝るとも劣らない。それで聊かハカキ文投稿諸孃の參考までに、現下選者が考へた心得を左に載せて置きますから、多々益々奮勵あらんことを祈ります。

はがき文心得八ケ條

▲自然にせよ、人事にせよ、急所を捉えると。
▲文字の洗錬を要すると
▲ハガキ文は特に平凡を忌むと
▲參考として古くは西鶴、近松、新しくは綠雨、一葉の文、及び和歌新體詩、俳句、漢詩等の韻文を學ぶこと
▲奇を求めずして奇拔なるべきと
▲詩を作る心得にて散文とすべきと
▲陳套な形容を避けると
▲含蓄と餘韻とはハカキ文の特色なると



讀友倶樂部

○諸孃と記者

○記者先生に伺ひます私共は本社から直接に項戴するので當地の小賣店から買つて二人て愛讀するのでござゐます投書するには一人てなければならぬのでありますか其れとも二人て投書しても宜しうございますか何卒御教を（伊具の二少女）（記者曰、正直なお尋ねにあづかりました、お二人とも御投書して下されて差支えありません、記者は一人でも投書家の多い事を欣びます、但し賣捌部は一部でも多く買つて頂くと結構だと申して居ります）○記者樣へ申上ます入賞入選今井八百子樣の猫のはだしな剽窃文と承りましたが、八百子樣は剽窃などなさるやうな卑劣な御方では有ません、自作も自作も正眞正銘の自作で有ります、友人たる私が保證人です、どなたか存じませんが御自分の卑劣な心に引くらべ、人も左樣とおもひ潔白なる諸孃に汚名を負はせるとは不埒ではありませんか（一友人）（記者曰、女子文壇第六號はがき文入賞入選今井八百子孃の「猫のはだし」と題する一文を剽窃ならずやと注意し來れる者ありし事は前號に見えましたが、其後右のはがき文に對する剽窃の旨、知は一通も來らず、又此の一友人の保證もあり、本人の八百子孃からも本社へ申込の次第もありましたので、右のはがき文は剽窃でなく、正眞の御自作てあることを天下に告白すると共に、本社は賞品を豫定の如く八百子孃に贈ります、諸孃も同女子の潔白を認めて下さい）○記者先生、私は滑義小學校の高等科四年生です、一號から本誌を愛讀して居ります、投稿もいたしますからお願ひ申します（神奈川縣愛甲郡下川入村志賀つぎ子）（記者曰、高等四年でいらつしやいますか、まだ、お若いのですから、强て投書をお急ぎにならなくも、能く學課を御勉强なさいませ、其ひまに歌の一首、文の一章でも出來ましたら、お送り下さいませ）○第七號の口繪山中古洞先生の「朝の散歩」私あの繪實にすきて御座いますのこの後もあんな畫をおつけ下さい（福島、日出世）（記者曰、仰の通り凉しさうな畫でした、此後も成可く美くしい繪を載せます）○記者樣誠に我儘の申し分てすが、各欄一人一章宛投稿の事といふ規定をどうか二章か三章宛位に改めて下さいな、さうでないと私みたいな拙な者は實に心細いわ、けですから（埼玉敷島花子）（記者曰、心細いと仰つても改めるわけに參りません、何卒傑作と思召すのを一章づゝ投稿して下さい）○繪ハガキと無邪氣な少女の讀みものとすべき小說とを入れて下さい（信濃松本町一少女）（記者曰、左樣な事も考へて居りますが何分口繪も他雜誌から見れば非常に奮發して居りますし、讀み物も一つでも投書を多く載せやうと思ひますので、大家の玉作すら後れがちになるくらゐです、併し追々諸孃の淸囑に應ずるやうに致します）○記者樣私は一二回投書を試みましたがまだ一度も掲載された事がありません自らが未熟ですから詮方がありません一度や二度の不成功には挫折しないでこれから每月每月投書を續ける考へです（某の娘）（記者曰、勿論お續けなさい、一回や二回で落膽することはありません）○記者樣私は女子文壇第三號からの愛讀者ですが淺學でお恥づかしいためまた一度も投書した事はありませんこれが初めてゞすから以後宜しく御願ひ申上ます、實は第六號のはじめの社說を見まして大變いきほひがつきましたのですよそして實名は暫く申上げません時期が參りましたら申上ませう（燈火女）（記者曰、勢ひの出た時にお作りになれば、其文章も屹度勢ひがありませう、實名は仰る時まで承りますまい、自然に分る時がございませう）○記者さんに御伺ひ申します、本文壇への投書は女子に限るのですか、又男子も良いのですか是非此處で御答下さい。（百合子）（記者曰、女子に限ります）○投書は之れでもようございますか、私はこれからどし／＼投書いたしますから、記者樣、何分宜敷お願ひいたします（秋田女學校白妙女子）（記者曰、どうか澤山御投書下さい、しかし投書文を、かう云ふやうに、半紙の初めの隅の方から、つめて書いて下さるのは、原稿を調べる時、綴るのに困ります、原稿は半紙へ天地を少しづゝ、左右の端を少しづゝあけて、書いて下さい、是はあなたゞけでなく、凡ての投書家諸孃に、屹度御注意を願ひます）○俳句は半紙二つ切に一首づゝ短歌などと同封ではいけんのですか敎へて下さい（梅操子）（記者曰、それでもよろしい）○記者さん本紙がだん／＼隆盛に趣くのも、記者さんの御盡力によります、妾も之れから時々投書致しますが、この紙へ書いても、よろしうございますか、一寸次號で御知らせ下さい。（千葉縣の一少女）（記者曰、よろしい）○私は田舍の無學者ですが御社の女子文壇は友の紹介で四號から愛讀致して居ります實に他にまれなる好雜誌と深く記者樣方の御厚意を感謝します私は此の淸き女子文壇の永久に盛へん事を切望してやまないのです、文壇を見る事につけ／＼熱心ですのよ、それ故出來もしない作つて見たくなり、別紙拙きもの恥かしながら御目にかけます次第です（德島市、無香女子）（記者曰、御熱心が何よりです、今に我文壇の一有力者とおなりなさるでせう、いつ迄も今日の熱心をお續けなさい）○記者さま妾學問がありませんから投稿などは思ひもよりませんが下手の横好とやら…文字の違ひなどありましたらお直しなすつて下さいましおねがひてございます（岩手縣毛利子）（記者曰、直しませう）○記者樣にお伺ひ申します、投稿規定に「用紙は規定の紙に限る」とありますが半紙のとてすか。文章の都合によりましては半枚でもかまいませんか、（大和雪子）（記者曰、半紙の事です、半紙半枚てもかまひません、其文章の短い都合て）○記者樣私は第三號から本誌を愛讀致して居ります是れ迄四五度投書して見やうと思て書きましても皆拙作なので捨てゝ終ひましたが第

六號の「試に投稿せよ」にはげまされ男を振つて此度投じましから何卒御批評なすツて下さいまし(北總賤の女)(記者曰、能く御奮發なさいました、あなたのやうな方があつてこそ、あれを書いた記者も滿足です、お作は頓て紙上へ出るでせうから、猶勉强して投稿して下さい)○東京愛讀少女樣ゞ習字寥集け云大賛成よ夫れから陸前入洲子樣のお說にも大賛成だわ、記者樣臨時增刊を春夏秋冬に出していたゞけなくつて、何れも實行して頂戴な(北海道龜田郡七飯村松井長子)(記者曰、今直ぐと云ふ譯にも參りませんが追々實行したいと思うて居ります)○私は今度初めて投書致しましたがあの圖畵は二寸の三寸判としてありますがあれは紙を二寸か三寸に切つて出すのですか又半紙半枚又は一枚に二寸の三寸の長方形の線の中に書くのですか(室覽島吉川芳子)(記者曰、横三寸縱二寸の雁皮紙に書いて下さい)○記者閣下、私も此度愛讀者の一人となりました、皆樣のやうに投書も致しますから、宜しく御愛顧の程を(宮城松江)(記者曰、何うかいつ迄も變らぬやうおつきあひ下さい)○敬愛する記者樣、私は田舍の小學校を卒へましてから都合上當地に出ました、病氣の爲に入學の好期を失ひ不幸な者で御座いますが今度貴社御出版の女子文壇を初號より愛讀いたして居ります前々號投書御進步記事と拜見しまして私のような者でもとぞんじまして先日より拙文をかへり見ず御手數を掛けて居りますドシ／＼と沒收して何卒腕を御誌上で磨かして下さいませ(大阪北區西部山茶花女)(記者曰、本誌に依りて慰藉を得らるゝとは何より本誌の光榮です、御投書は勿論紙上にあらはれるでせう)○記者樣わたしは、皆樣のやうに文章や歌がうまく出來ませんが、すこしづゝ投書して見たいのですが、一度に歌と文章と二つは、投書出來ないでしようか、一寸御伺ひ申上ます(神戸市一少女)(記者曰、かまひません)○次號より何卒繪はがきを附して被下宜敷賴みます(陸奥下北郡川內村兎木武)(記者曰、次號からは何うも實行出來ませぬ)○(イ)圖畵は二寸五分と三寸に切た何紙に何畵をかきますか?何畵てもいゝてすか、(ロ)誌友の諸姉さま方は本名でなく、何女史とか何生とか、御しやるが投書なさる時はそれでも住所姓名を明記なさるんですか(陸中、〇〇)(記者曰、(イ)雁皮紙に日本畵を描いて下さい(ロ)勿論凡て本名と御住所は記者までお知らせ下さることになつて居ります)○私記者さんに御願があるのよ、こんな美はしい雜誌に繪ハガキのないのは、なんだか變ですわ、どうぞ、毎號、繪葉書を附錄にして頂くわけには、まいりませんか、諸孃も贊成して下さいな(越後郡由子)(記者曰、皆さんからおすゝめがありますから、編輯部でも目下考へて居ります)○記者樣去る四月中旬頃からフト脚氣に侵されて郷家に靜養するの止むを得ざるに至つた爲め本誌を見ること出來なかつたのは深く遺憾でしたが漸く六月中旬病癒えて歸りましたからまた御厄介になりますから何分宜敷く御願申ます次に一寸御尋ね申ますが該部の記事を半紙に認めて原稿と同封で送つてはいけませんか但し四種郵便として(越中、宮田伊惠智子)(記者曰、原稿として送り下さる場合には開封、四種郵便てよろしい)

○剽窃詩文の注意(記者)

○鹽井先生の「選評餘談」にもありました通り、元來人の文章を盜んで投書するとは、苟くも雜誌などを讀む者の了簡としては、解し難い事で、紙上に猶ほ此剽窃家の後を絕たぬのは、慨嘆の極であります。左に又新しく分つた剽窃文を發表します。

△文章の部

○第七號論文地賞、尾張國中島郡豐田村友松瀧口平野春子の「愛情」と題する一文は、「中學世界」第一卷第八號普通文の欄、同頭坤賞に當選したる岩代國伊達郡伏黑村宮本宍戸藤太郎君の文を剽窃せしものにて僅に三字違へるのみ

○第七號叙事文地賞、神奈川縣都築郡新田村新羽中村三重子の「東山紀行」は「中學文壇」三十八年六月一日發行大阪東區谷町黑木春山君の住吉紀行と題するものと同文なり只少し許り違へたる處あり剽窃と決定す

○同じく叙事文地賞、兵庫縣明石東魚町四七三浦久子の「幼な」と題する一文は、「女學世界」定期增刊第三卷第十五號「玉あられ」に一等賞を得たる島根縣松江岸崎涙子君の「釣床」と題する文章の剽窃にして只普通文體を言文一致體に變へたるばかり。

○京都府乙訓郡大原野村菩野岩村義子の「あゝ妹」は「少年世界」三十五年三月一日發行の分にて三等賞を得たる東京牛込區福原花子君の「あゝ露子」と一字一句も相違なし。

○第六號抒情文天賞、千葉縣山武郡千代田村山田冲子の「月波根」は「少年世界」秋季增刊第十二年二十四號雜文一等賞東京本郷京華中學校川田清泉君の「ふるさと」と題する文の剽窃なり。

△新體詩の部

○第七號新體詩秀逸、岐阜きよ子の「渡守」は三十六年三月三日發行の「中學文藝」と云ふ雜誌の新體詩一等賞三重縣立第四中學岸田英君の渡守の剽窃にて一字の相違なし。

○第七號新體詩欄三十九頁上段、富山きよ子の「虹」は「少年世界」第七卷第七號一等賞木村理助の作を剽窃せしものなり。

△短歌の部

○第六號短歌欄六十頁、下段、廣島渡邊喜市の「うらぶれの……」と云ふ歌は去年十二月發行の「ハガキ文學」の天賞を剽窃せしこと發覺せり

以上、尾張平野春子、神奈川中村三重子、兵庫三浦久子、及び第六號の千葉山田冲子の四名には賞品の發送を停止することゝ致しました。又玆に諸孃に一言、以上の剽窃文をお知らせ下さいました諸孃に深く其親切を厚謝します。記者はいつも諸孃のおかげに依りて、女子思想界の淸濁を明かにする事を得るのを欣び、且諸孃が自ら此煩累を厭はず詳細叮重に本誌へ報告下さることを重ねて厚謝いたします。例に依りて其芳名を

列擧いたしますと
○大阪西區、平田撫子○北海道七重村、○すみゑ子○下總佐原町、海野○京都松枝町、芳子○備中 文子○北海道 松井長子○埼玉、山下里子○千葉縣、つる子○千葉縣人○長野縣檜川村、粟山かのへ○長野市、萩原ふく子○東京、少女子○西備、女學生○橫濱、初子○京都、空見女○以下無名失名十數人

○諸孃の交際

○記者樣私は第五卷から愛讀者の一人となりました只今は澁谷の豫備病院に勤務して居ります澁谷分院内林田金子）どうぞ交際欄で諸姉に紹介して下さい、○女子文壇愛讀諸姉樣私も六號より愛讀者の一人となりました何卒末長がく御交際下さい（武藏糸柳）○佐々木信綱先生著少年歌話相當絹製編物御送付の御方に御送り致します、田舍物の悲しさ、妾は編方を知らないので御座います（滋賀縣甲賀郡柏木村字泉辰井擧子）○諸姉樣よ私は夏中左の地に居ります御手紙又端書が送て下されし方は十八人でしたよ其内の男の方には送りませんでした大坂の宮子さん居所消印で不明一寸しらせて下さい御返事をあげます（本所區向じま長命寺内一室にて村上義子）○妾は實にこよなき不幸者ですが文通との交際なり繪端書の交換なりをお願ひ致し度い方思ひます（東京市下谷區中根岸町四番地宮地方江口春子）○御約束通りに私から小說を送りましたお方の御姓名を一寸申上げます水戶市吋月女史へ鐵腸著玉手箱一册信濃國伊藤ろく子孃へ露伴著三保物語、新羽衣物語、新手腕水蔭著利根の舟歌合四册越後國武藤豐子孃へ紅葉著多情多恨一册肥前國浦部久子孃へ露伴著ひとり寢一册但馬國岩崎榮子孃へ美納小社會一册北津輕堀井千代子孃へ捌汀著人の罪一册下野國關塚樂子孃へ鏡花著錦帶記一册右之方の外に舞鶴海軍病院内伊與木某へつゝを欣一册此の方は男子ですが兎に角名譽なる海軍々人ですから送りました（しける子）○埼玉縣靑柳樣私は直に御返事を差上げ申うと思ひましたが住所が消印の爲めに分りませんので遺憾ですが折角の御申越を空しくして居りました至急御知らせ下さい（しける）

○本郷なほえ子樣今回わが特に御願ひしますあつかましいですが貴女御調作の栞頂戴する事は出來ませぬか若しやうふと思ふ氣が御座りましたなら何卒宜しく賴みます（近江國志賀郡坂本日枝之麓大川石子）○誌友皆樣の中で女子文壇第一號御不用の御方はありませんか、御座いますればおゆづり下さいます、御賴み申ます、又大分町の佐野玉江子樣先日は御玉章、ありがとう一寸御禮申上ます（岡山市上石井津島榮）○皆樣繪葉書下さいまして有難う御座いました、お返事着いたでしやう。私しは肉筆でないのは好みません。それから普通の葉書の裏へ書いたのや、餘りお粗末のが多いにはこまりました。男の方や又郵便はがきと印刷しないで自筆したのや判が大小不同で不足稅を受けたのもありました。七月の十四日廿三日廿六日の萬朝、東京朝日にも有ります通り、一家の中に不幸が有りまして、それ故返信漏れの御方が御座いますかも知れません、何れ分明次第御返事致します。次に麴町より牛込に轉居致しました。（牛込早稻田、小島濱子）○江州彦根の小蝶子樣、小說家に成つて身を立てやうとなさる貴女のお目的は誌友倶樂部の欄で拜見いたしまして實に驀はしく存じます、妾も同じ希望を持つて居ります、讀者樣到底世間から注目される樣子にはなれないだらうと思ひますれ、誌面では何ですから何卒お住居を知らせ下さい、そして御交際遊ばして下さいまし、いづれ直接に御手紙を差上たいので。（周防德山町藤井泰子）○皆樣へ申し上ます私も本誌第七號より愛讀者となりましたから此後は親しく御交際の程を願ひます（島根縣飯石郡赤名一六四二倉橋小鶴子）○全國の誌友諸姉、何卒御交際下さい（秋田高等女學校寄宿舍白妙女史）○私は京都の一交換手です何分高等小學校を卒業した許りの淺學の者ですから皆樣の樣に立派な投書も出來ませんが六號から愛讀者になりましたから何卒誌上を以て御交際を願ひます、京都十一交換手（くに子）○宇都宮田野郁子樣、兵庫縣三浦久子樣、どうも久濶、妾近頃は會の方が忙しいもんですから、すまない〳〵と思ひつゝつひ御伺ひもいたしませんでした、○許して頂だい、北海道龜田郡七飯村松井長子）○群馬縣の神島由子樣に申し上ます誠に突然ですがあなたのお姉樣はたき子樣と仰る方では御座いませぬか私たき子樣の御芳名は或る誌上にて承り、かねておしたひ申して居るのです何卒以後御交際をお願ひ申し上ます。（文子）○私は畫を書く事見る事大好で寢食も忘れる樣でありますどうか皆さん畫の類を送つて下さい私も水彩畫、木炭畫、日本畫の類を送ります（牛込天神町二十七番地齋藤方たそがれ）○私は男子ですが若し諸令孃の中で內面は古びて居つても口繪の水彩畫さへ美しければよいのですが女子文壇の貳、參、四號を御讓り下さる方はありませんか吳市明神町六〇三浦峰明へ御知らせ下さらば元の定價金か或はそれ相當の繪葉書を相送ります記者樣男子ですが此を御揭載下さらば誠に幸甚の至りです（記者曰、一躰男子の投稿は全然採用しないわけですが、特に御便宜を計つて之だけ採用します）○私は女子文壇の第六號から愛讀者の一人になりましたのがゑんで下野の淺野しげろ子樣とも交りする樣になりました皆樣も御交際をねがいますよ（信濃の一少女）○妾今月より愛讀者の一人になりましたら皆樣方、拙き私を見捨て被下らない樣願ひます私今は福岡の方へ來ていますが本籍大牟田の近くですから炭坑御出なされたら御出被下さい御案內致しますから（福岡市外堅粕坂梨芳子）○本鄕なほえ子樣あなたも北海道れ、おなつかしい、貴女以前少女界のなんでしたわれ、私今本誌と女學世界と少女界の愛讀者よ、貴女「シオリ」お惠み下さいな私、モデルにして稽古いたしますから（北海道龜田郡七飯村松井ホワイトローズ）○此方へ來ました以來都が戀しくて何日も心はかりば此處に居る氣がしないのですお友達はなくツて文壇と二人きりです何誰樣でも御手紙で御交際下さろ御方がありませんか繪葉書の御方へは繪葉書で御返しします又あみものを御送り下さる御方へは妾しからも下手なんですけど御返し申ます（北海道石狩深川本町八丁目寺尾みさ子）○親愛なる文壇愛讀者の諸孃樣妾は埼玉縣の一少女で御

座ひますが本月より同じ愛讀者の仲間に入りましたから御見捨なく御交際を願ひます（北足立郡大砂土村大字大和田十四番地細沼藤子）○中村基、高木郁子、竹内さよ子の諸君！御送り下さつた本は確に着しました、返書を出しましたが着きましたか、私は皆樣の字の御上手なのに感心して了ひました、返事が却て恥し樣で：：又繪葉書も頂戴な竹内樣の涙子の繪葉書實に氣に入りました（埼玉山下芳葉）○妾は本誌の愛讀者ですが第一號が何所の書店にも無くて困つて居ります御不用の方は何卒御讓り下さい身にて適つた御禮は必ず致します（横濱市南太田町一七六七清谷入郎方吉田みち子）○備後の脇屋樣横濱の小川樣兵庫の吉田樣金澤の澤山樣肥前の松崎樣廣島の井上樣先日は御親切樣に不學なる妾に御はがきを被下りましてまことに嬉しく御禮申上ます何卒御見捨てなく御交際を願ひます（兵庫山陽社宅柳田のぶ子）○在筑波郡北條町の赤澤せい子樣、先日は度々の御手紙、誠にありがたう、早速御返事を差上ましたが御屆きになりましたろうれ、御約束の品は不日御送り致します先は紙上を以て御禮迄（下總結城、伊佐岡澄子）○妾は諸孃と交際を願ひます又大阪の武勝愛子樣に申し上げます私は何卒出來ん無學の者でございますけれども御交際を願ひますどうぞ御ひまの折りは御文を送て頂戴よれ又加藤百子樣に申し上げます、あなたは大分縣の人と誌友倶樂部の内にはありませんでしたがあの短歌の所であなたの姓名を拜見いたしましたが私もおな！豐後の者でございまして大島に留守をいたして居る者でございますから御交際を願ひます（鹿兒島縣大島郡名瀨金之村白石女子）○本鄕なほえ子樣、早川りよう子樣、横山りう子樣、淺野しげる樣、此の後とても御見捨なく御引立下さいな（宮城縣伊具郡角田町字谷地町高橋りわ子）○皆樣私も一號からの愛讀者です此れからちよと顏を出しますからよろしく（遠江磐田郡見付町淸水佐原方靜波子）○私群馬の方の御名前を見まゐらするのが何より嬉しい、けれどもこの誌上に御顏出しなさる方の少ないのを殘念に思ひます（都久井とく子）○東京の上野不孤さん、大坂の佐々木安子さん、岡山の大橋霞峰さん、越後の太刀川和美江さん、先日は御手紙下すつて有難ふ。不孤さんと霞峰さんの御住所はよく分らないので御返事を差上げる事ができませんでした、御手數でも折返し御住所委細に御通知下さい（長野縣小縣郡中鹽田村甲田英勝方工藤松子）○誌友皆さん御機嫌よく妾は芙蓉の里の極片田舍で目に若葉耳に時鳥と云ふ山間に住居して居ます極不覺束な者で本年の四月迄て駿東農業補習學校に出校して居ましたが本年十四才で家事上二學年で退校しましたがある人に女子文壇が面白いと聞きましたから直に愛讀者となりました何れ不覺束者でありますが皆さん宜敷願升（靜岡縣松本壽江）○私、島根縣下の誌友諸姉が本文壇へ、詩情を吐露ならないのを實に殘念に思ひます、是から縣下の諸姉がどし〳〵投稿なさつて此の誌上に文陣をお張りなさらんことを祈ります（島根縣郭千島女史）○麻布の高橋桂水子樣に一寸申上ます、これまで度々なつかしい御文にあづかりましたが何時も々々々怠り勝の私つい〳〵御無沙汰のみを致しまして申譯がありませんが決して貴方樣をうとんじ申す譯では御座いませんのですから此末長く親厚なる御交際をお願ひ申すます（愛香より）

○文事百般

○「をんな」（大日本女學會の發行）第五卷の全部を御持ちの方は御讓り下さい直段もどうぞ共にそれと左記の書物を御持の方はどうぞ英語講義錄（初學科第七期第二號より全部）日露戰爭記（金港堂發行第一、二、三、十七、の四冊）（大分縣大分郡大町分南新地後藤ケイ方佐藤玉江子）○大方の壇友諸子、私の許に、立志訓、處世訓、すみれ集、作文錦囊、婚姻文學、小説乳姉妹全二冊、戀と死、があります、何か他の圖書と交換致しませう。それから諸子の内に、黃菊白菊、花紅葉、續千山萬水、秀英舍の中學文藝二號より末號迄（春季增刊共）御不用の方はありませむか、右記のものと交換或は相當代價で申受けてもよろしい。（佐世保市宮田町三谷方横山汎愛）○私の樣な者でも集詩「塔影」を讀みましたならば拙なくとも法にかなへる新體詩を作り得べきや御答へを切に願ひ申ます（德島市無香女子）（答、作る作られぬは別問題として、お讀みになれば必ずお爲になります）○諸孃にお願ひ申します、本誌一號より五號まで（彩色畫の附きもの）及び月刊スケッチ一號より三號まで送つて下さる方はありませんか又ホトヽギス園藝界何號にてもよろしう御座いますからいづれも汚損のないものでそして名は本名を書かず雅號にて願ひます（大和郡淺田澄水女）○記者樣よ每々御手數をわづらわしてすみません私は英語を學びたく思ふて居りますがわからない所は英文を御出しになる津田先生、河合先生に伺ふ事は出來ませんか御答を次號で（横濱SN）（答、女子文壇の愛讀なる由を附記してお伺ひなさい）○古くて失禮ですが女學世界の定期增刊社會百生活、家庭十二ケ月、小天地、國秀文壇の四冊を御一人に一冊づゝ進上致したく思ひますから御厭ひなくば直に御仰せ下さい御送り申ます（大阪府三島郡鳥飼村大字中、刀禰格方はる子）○長歌とは何んなものですか、一寸敎へて下さい（神戸君子）（答、長歌は和歌の一體で、和歌よりは句の多いのです、五、七、五、七長く續けたものです、例は萬葉以後各歌集を御らんなさい）○記者樣へ折入つてお願ひ致します私は當縣立師範學校に入つて居る者ですが本校に愚かな私か一番修めたいと思ふ英語科の設けが御座いませんで私は雜誌等見る度に殘念に思ひます實に文學丈でも知りません實に不びんなものと思召して英語の入門から獨りで修める方法を敎へて下さいませそれにつひてよい書物か又は其他會とか何とかあるならこの通信欄に一寸敎へて下さいお願ひ致します（肥前松浦、研究女）（答、雜誌には英文少年世界、初等英語などあります、初歩ならばリーダーの一から獨案内を買つて勉强なさい、お國にありませう、若し無ければ爲替で十錢許り、本誌記者宛にお送りなさい、所を詳しく書いて、さすれば取まとめて送りませう）

毎號懸賞募集課目

特別奬勵賞與法は第九號より實行す

選評大家｛文學士臨井日本女子大學教授、巖谷小波君、佐々木信綱君
　　　　　文學士尾上女子高等師範校教授、服津柳浪君、山中古洞君｝

○論文　　○抒情文　　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以內）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以內）　○はがき文（端書かな付廿四字四行）

○短編小說（半紙總かな付廿四字六十行內）　○新體詩（半紙一枚十句以內）

○短歌（半紙二ッ切一枚一首）　○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）

○新體俳句（はがき判紙一枚一句）

▲各欄とも一人佳作一章宛投稿の事
但着色無用可成厚紙を用ゆ

▲此外家庭教育に關する事項並に讀者の通信等何でも寄稿あれ

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小說○圖畫、當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○短歌○俳句、當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

賞品規定

毎回の本誌により當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

【投稿メ切＝毎月十五日】

▲嚴守すべき投稿規定　必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纏め郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

定價

女子文壇（毎號水彩畫彩色版寫眞口繪數葉挿入）毎月一日發行

一册（大判百二十頁）前金拾錢	定價郵税共一册金拾壹錢	外國行
六册（半ヶ年分）前金五拾七錢	定價郵税共六册金六拾三錢	郵税共
十二册（一ヶ年分）前金壹圓八錢	定價郵税共十二册金壹圓廿錢	拾四錢

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○代金送不足のなき樣注意被下度候○御收書は一切差出さず候○御注文毎に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券代用は必ず定價の壹割增に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本可仕候

廣告

（六號ヨリ取正）

種別	普通	特別（表紙四面口繪對面）
一頁（二十四字六十四行）	金拾五圓	金貳拾圓
半頁（二十四字三十二行）	金八圓	[illegible]
一行（五號字二十四字）	金參拾錢	○
メ切	發行前十五日	

▲廣告特約取扱

京橋區南佐柄木町二番地　日本廣告株式會社
神田區千代田町二番地　博報堂
神田區花房町九番地　富士原秀穗

明治三十八年七月廿九日印刷
明治三十八年八月一日發行

不許轉載

定價金拾錢

編輯兼發行者　東京市京橋區南鍋町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京京橋區大鋸町十二番地　女子文壇社
電話＝本局六〇七番

特約發賣所

東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目　共東海堂
東京市京橋區鍋屋町十三番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鍋屋町九番地　良明堂

A. Is it possible? Then come this month with me. I am going to my uncle's summer home up there, and he told me to bring two three friends of mine with me. He will be delighted to have you at his home.

甲. 本當に？それならば，私と一所に此月御出で遊ばせな．私は叔父の別莊に參りますので叔父は私の友人を二三人御伴れ申せと申しました．貴女が御出で下さると叔父も喜びます．

B. How very kind of you to say that. But really I can not accept your invitation.

乙. マー御親切にね，併し御招きを御受け致し兼ねるので御座います．

A. Why not? But have you planned out already for August?

甲. 何故で入らしやいますか．既に八月の御計畫を御立てになりましたの？

B. For many years, I have not seen my elder sister who lives in Shikoku, so—

乙. 餘程永く四國に居ります姉に逢ひませんから，それで ————

A. Down to Shikoku! Do you intend to go there? Terrible! You will die from heat.

甲. 四國へ！御旅行遊ばす御積り？それは御酷い！貴女，御暑さで御倒れなさいますから．

B. You are always afraid of heat. Shikoku is not a tropic. My sister tells me that she is cooler there than in Tokyo.

乙. 何時も貴女は暑氣におぢけて居られます．四國だとて熱帶地でも御座いません．姉などは東京よりあちらの方が涼いと申て居ります．

A. So you are going to visit her! Well, well, I shall not discourage you, but if any time is left afterwards, do come to Hakone to breathe the pure mountain air.

甲. それですから御姉樣の處へ入らしやいますの？マー，マー，御失望させますまい．若し御歸りに成りましてから御暇が御座いましたら，是非箱根に御こしになつて山の新鮮な空氣を御吸ひ下さい．

Summer Vacation.	夏休暇
A. It is very good of you to call on me.	**甲.** 本當にマーよく御出下さいました事.
B. I have been wanting to see you ever so long.	**乙.** 先達から是非とも御目に懸り度く思て居りました.
A. So have I. You can stay here to-day as long as you wish, can't you?	**甲.** 私も. 今日は御緩くり成さつても宜しいので御座いましよう.
B. Yes, until it gets dark.	**乙.** ハイ. 暗く成るまて.
A. Well then, we can talk a great deal. But have a glass of ice-tea first. You must be very warm.	**甲.** それては色々御噺が出來ます. マー氷茶を一杯召し上つて下さい. 御暑いてしよう.
B. Thank you there is nothing like ice-tea us in a day like this.	**乙.** 難有御座います. 此んな日には氷茶に越すものは御座いません.
A. Do please have another glass.	**甲.** 何うぞ, もう一杯召し上つて下さい.
B. No more thank you. By the way, may I ask you where you are going for your vacation?	**乙.** イヽエ, もう充分で御座います. それはそうと, 貴女は此休みに何處へ御出に成りますの?
A. I am hoping to go to Hakone next week.	**甲.** 來週箱根に行きたいと存じて居ります.
B. How splendid! I am very envious of you.	**乙.** 何んて御宜しいでしよう. 御浦山しう御座います.
A. You have been there several times, have you not?	**甲.** 貴女は箱根へ屢々御遊びに入らしたので御座いましよう?
B. Not once, shame to say.	**乙.** 御恥しい事にはまだ一度も御座いません.

But I go on for ever.

Tennyson.

我は進まむ　限りなく。

Our Thoughts.

Our thoughts make us. They are the silent builders on the temple of character we are rearing. They give color and form to the whole building. If our thoughts are evil, the fabric that is rising within us is blemished.

The inner and outer life will always correspond in the end. A bad heart will work through to the surface. If a man's life is righteous, you know his thoughts are just; unjust thoughts will never yield righteousness in conduct.

Thoughts seem mere nothings, flecks of cloud flying through the air, flocks of birds flitting by, and gone. But they are the most real things about our life. All things we do are thoughts first. Our thoughts fly out like birds and take their place in the world. Then our heart is still their home-nest, whither they will return at last to dwell.

Miller.

我等の思想

我等の思想は我等を造る者なり．彼等は吾人が設立しつゝある品性宮殿の沈默なる建築家にして全構造に光彩と好容を與ふる者なり．吾人の思想に於て邪ならんか，其建堂や瑕疵あるを免かれず．

夫れ内心と外顯とは最後に符合するを常とす．奸惡の心は表面に現出せざるを得ず．若し人正義の道を渡らば，汝知るべし此人の思想は公正にして且不正の思想は決して正義の行爲を産出し得ざる事を．

思想は恰も空中を飛行する斑片たる雲の如く或は翔り來り翔り去る鳥の群集の如く虚無空論に過ぎざるの感あり．然れども思想は人生中最大確實の不動物なり．我等が成す處凡て思想を以て始む．我等の思想は鳥の如く飛行して世界をその舞臺となさん．されど尚彼等の終に歸りて住居せん巢窟は我等の心（ハート）なり．

英文

津田梅子閲　河井道子述

The Song of the Brook.

I come from haunts of coot and hern,
I make a sudden sally,
And sparkle out among the fern,
To bicker down a valley.

I chatter over stony ways,
In little sharps and trebles,
I bubble into eddying bays,
I babble on the pebbles.

I wind about, and in and out,
With here a blossom sailing,
And here and there a lusty trout,
And here and there a grayling,

I chatter, chatter, as I flow
So join the brimming river,
For men may come and men may go,

小川の歌

鷺や鴫の　棲家より
我は來にけり　迸り,
羊齒の中より　ほのみえつ
あるは谷間を　かけ走り.

我は石地に　さゞめきて
聲も調子も　やゝ高く
渦卷く入江に　泡たてゝ
さゞれ石とは　談るなり.

我の遶は　いと繁し
こゝに花瓣　浮べつゝ
彼處に大鱒　跳らせつ
其處の魚とも　戯むれて.

我は談らん　道すがら
漲る川に　逢ふまでは.
人の往來は　定めねど

第壹巻第八號　女子文壇　明治三十八年八月一日發行（毎月一回一日）

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



最廉無比
定價金拾錢
郵税壹錢

（東京秀英舍印行）